

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (22)

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— XIII —

総 集 編

1982・3

鹿児島県教育委員会

序 文

九州縦貫自動車道（鹿児島線）の建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の調査については、昭和43年4月1日同自動車道の加治木～鹿児島間の工事施行が決定されたので、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」（昭和42年9月30日）に基づき、日本道路公団の委託により本県教育委員会が、昭和43年度に分布調査を行い、昭和46年8月20日発掘調査に着手しました。

その後、加治木～吉松間の路線計画が決定されたので、昭和47年度にこの区間の分布調査を実施し、その結果に基づき日本道路公団と県教育委員会が協議し、路線の一部変更によって遺跡の保存を図ることになりました。

なお、この区間の発掘調査は、昭和49年3月15日から昭和55年2月21日まで実施しました。

昭和46年8月から始まりました九州縦貫自動車道関係の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、昭和55年2月まで、およそ9年の歳月をかけて38遺跡、面積約186,000㎡を調査し、数々の貴重な発見をしました。遺物がばく大な量であったので、整理に多くの日時を要しましたが、ようやく本年度をもって調査事業を終了することになりました。

これまで刊行してきました発掘調査報告書を学術資料として、また、文化財愛護思想の普及のために活用していただければ幸いです。

10有余年の長きにわたり御指導と御協力をいただきました文化庁、日本道路公団、関係各市町教育委員会、関係者各位に衷心から謝意を表します。

昭和57年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 井之口 恒 雄

例 言

1. 本書は、九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設に伴い、日本道路公団の受託事業として、鹿児島県教育委員会が発掘調査したすべての遺跡の総集編である。
2. 遺跡番号（例・1 堀之内B遺跡）、報告書番号（例・鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(21)堀之内B遺跡）は既刊報告書番号と同一である。
3. 本書は、遺跡を概要としてまとめるとともに、各遺跡出土の遺構・遺物を各時代順に配列し、ほかに科学処理、発掘状況、土層等も掲載し、遺跡の理解に役立つよう努めた。
4. 出土品の一部は、県立博物館（考古資料館）に公開展示するとともに、文化課収蔵庫に保管している。
5. 図版の縮尺は、集成のため必ずしも同一ではない。



土層断面 (ポールは 2 m) 加栗山遺跡



緑釉陶器 (「伴家」と針書きがある) 小瀬戸遺跡

目 次

序 文	
例 言	
調査の経過	2
層 位	
土層柱状図	8
地層の局所的断層について	10
放射性炭素 (14C) 年代測定について	11
各遺跡の概要	
1. 堀之内B遺跡	12
2. 木場A遺跡	13
3. 木場B遺跡	17
4. 木場C遺跡	18
5. 山崎A遺跡	19
6. 山崎B遺跡	20
7. 山崎C遺跡	25
8. 中尾田遺跡	26
9. 木佐貫原遺跡	30
10. 石峰遺跡	31
11. 柳ヶ迫遺跡	33
12. 長ヶ原遺跡	34
13. 松木原遺跡	35
14. 葛根塚遺跡	35
15. 七ツ次遺跡	36
16. 松ヶ迫遺跡	37
17. 木屋原遺跡	38
18. 山神遺跡	39
19. 曲迫遺跡	40
20. 栢場遺跡	41
21. 西免遺跡	42
22. 中尾遺跡	43
23. 入道遺跡	44
24. 南十三塚遺跡	45
25. 東原遺跡	46
26. 桑ノ丸遺跡	47
27. 三代寺遺跡	49
28. 建馬場遺跡	51
29. 松木田遺跡	52
30. 小瀬戸遺跡	53
31. 小山遺跡	55
32. 谷ノ口遺跡	57
33. 上城城跡	58
34. 宮後遺跡	59
35. 木ノ迫遺跡	60
36. 加治屋園遺跡	61
37. 加栗山遺跡	63
38. 神ノ木山遺跡	70
各時代の概要	
旧石器時代	71
縄文時代	77
弥生時代	102
古墳時代	104
歴史時代	106
集石遺構の科学処理による取り上げと保存	121
あとがき	126

調査の経過

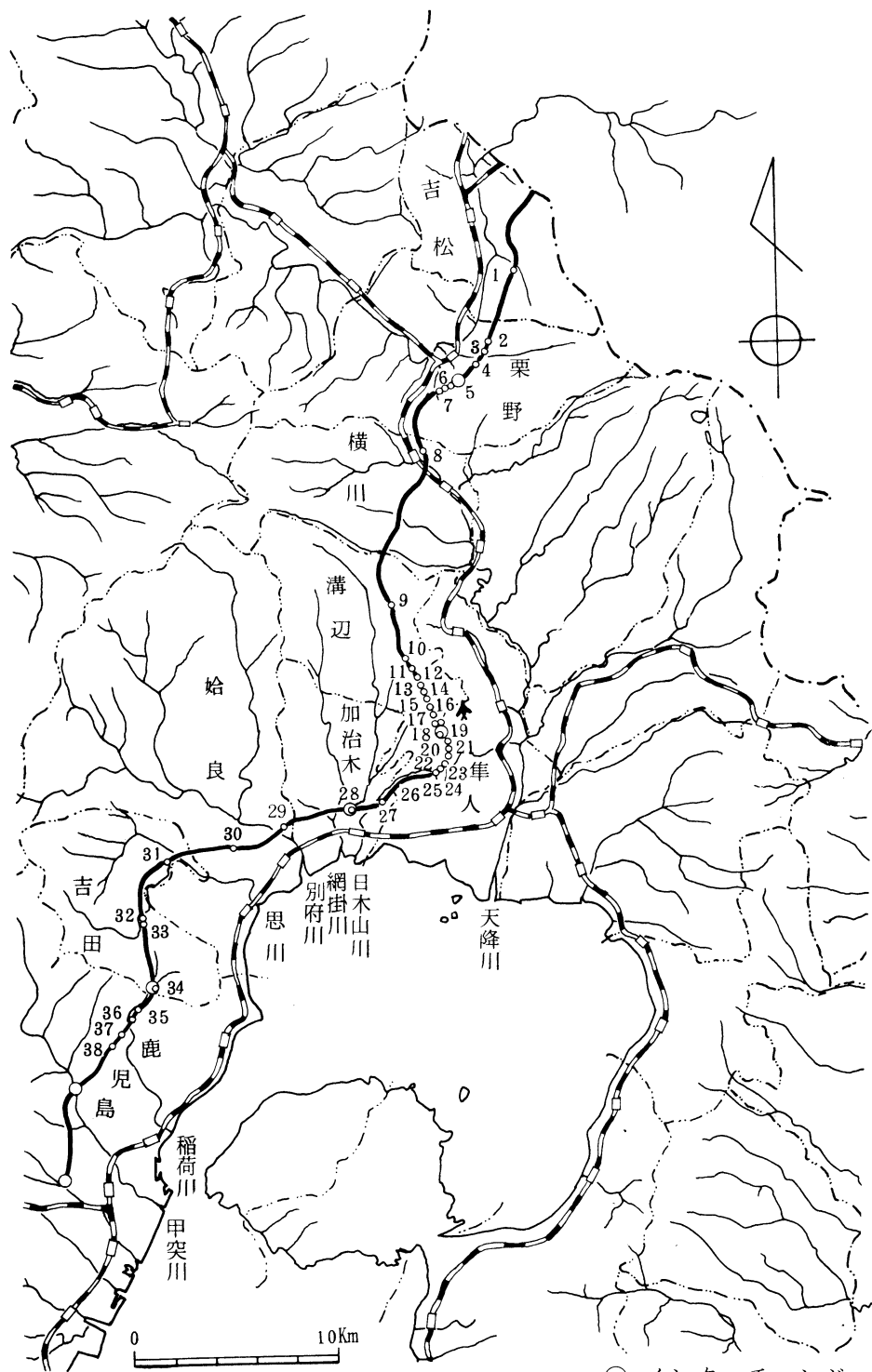
九州縦貫自動車道の建設事業が始まったのは、昭和43年で、本県は、加治木～鹿児島間の工事施工命令が、昭和43年4月1日出されている。県教育委員会としてはこれに対処するために、社会教育課文化係（当時）を中心に、関係者の協力を得て、昭和43年12月から昭和44年1月まで、九州縦貫自動車道建設に判う埋蔵文化財分布調査を実施し、この調査結果に基づいて、鹿児島～加治木間の路線が決定された。

その後、鹿児島線（加治木～吉田間）の工事計画が具体化するに及んで、県教育委員会は、昭和46年1月に再度、県文化財専門委員（当時）河口貞徳氏の指導を得て、日本道路公団福岡支社鹿児島工事事務所と路線内の分布調査を実施した。この結果に基づき、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」第4項により、日本道路公団と協議し、昭和46年度において、始良町小瀬戸遺跡ほか6か所の発掘調査と中世の山城1か所の調査を行うことになった。そのうち、小瀬戸遺跡・小山遺跡は、県文化財専門委員の河口貞徳氏を調査主任とした調査団が発掘調査に当たり、残りの遺跡は、県社会教育課が実施した。

その後、日本道路公団は、昭和47年2月23日に覚書に基づき、鹿児島線（吉松～加治木間）の埋蔵文化財について協議を求めた。これに対し、県文化室は、昭和47年8月2日～10日、同月18日から26日までの間に、延長38キロメートル、巾2キロメートル（溝辺～加治木間は予定路線内）にわたって分布調査を実施した。

その結果に基づいて、文化室は路線の決定については、埋蔵文化財の保護のうえから十分配慮されることを要望した。これに対して、日本道路公団は、溝辺～加治木間は、すでに昭和47年5月17日に路線を発表した後だった関係上、路線内の各遺跡はすべて記録保存をすることで県教育委員会と協議した。さらに、これらの遺跡について再度確認するために、県文化財専門委員の河口貞徳氏、同池水寛治氏の指導を得て分布調査を実施し、発掘調査前の取扱いに慎重を期した。また、吉松～溝辺間の埋蔵文化財包蔵地については、昭和47年度に実施した分布調査の結果によって協議を進めてきたが、さらに、昭和49年1月～2月、河口貞徳氏の指導を得て再確認のための分布調査を実施し、これらの結果に基づいて、遺跡の保存区分を決め、道路公団と協議の結果、保存する遺跡1か所（吉松町堂迫地下式横穴）、記録保存する遺跡10か所（横川町中尾田遺跡他）が決定した。

以後、発掘調査は関係者各方面の協力を得て継続され、昭和54年2月をもって38か所の遺跡すべてが調査終了し、そして、昭和56年度の整理報告書作成の完了で九州縦貫自動車道関係発掘調査事業は終了した。発掘調査期間10ヶ年、調査面積 206,300㎡に及んだ。



遺跡名

1. 堀之内B
2. 木場 A
3. 木場 B
4. 木場 C
5. 山崎 A
6. 山崎 B
7. 山崎 C
8. 中尾田
9. 木佐貫原
10. 石 峰
11. 柳ヶ迫
12. 長ヶ原
13. 松木原塚
14. 葛根塚
15. 七ツ次
16. 松ヶ迫
17. 木屋原
18. 山 神
19. 曲 迫
20. 杉 場
21. 西 免
22. 中 尾
23. 入 道
24. 南十三塚
25. 東 原
26. 桑ノ丸
27. 三代寺
28. 建馬場
29. 松木田
30. 小瀬戸
31. 小 山
32. 谷ノ口
33. 上城城跡
34. 宮 後
35. 木の迫
36. 加治屋園
37. 加栗山
38. 神の木山

○ インターチェンジ

○ 遺跡

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

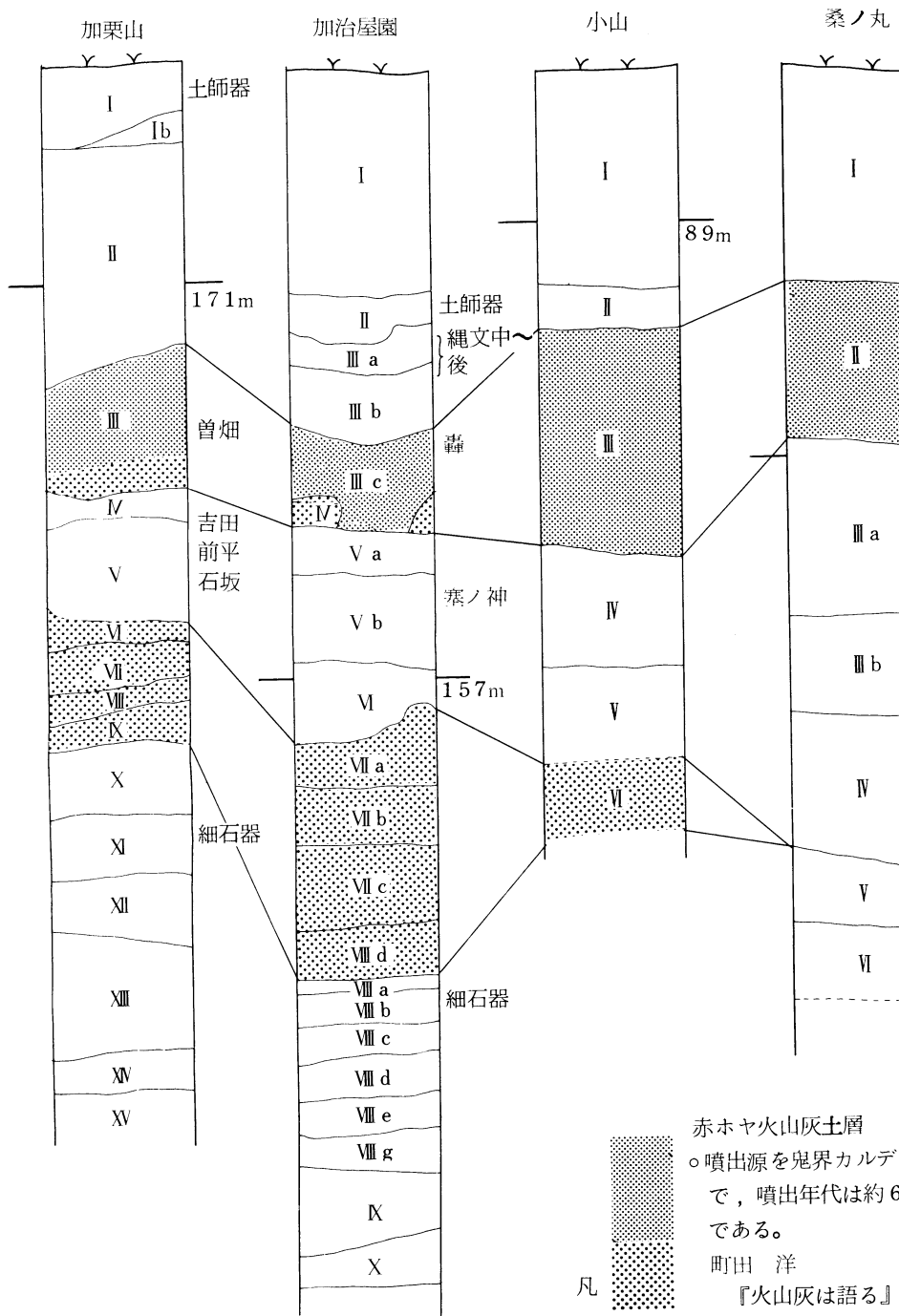
(昭和46年～昭和55年2月)

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	調査員	文 献
1	堀之内B	吉松町川添	54. 9. 10 } 54. 9. 27	500	立 神 青 崎	県埋蔵文化財発掘調査報告書(21) 1981. 3
2	木場 A	栗野町木場	一次 53. 12. 11 } 54. 3. 31 二次 54. 8. 28 } 55. 2. 21	14,000	牛ノ 浜 新 東 宮 田 池 畑 長 野	県埋蔵文化財発掘調査報告書(21) 1982. 3
3	木場 B	〃	54. 8. 28 54. 11. 24	4,500	新 東 出 口 弥 柴 中 島	県埋蔵文化財発掘調査報告書(21) 1982. 3
4	木場 C	〃	53. 11. 27 54. 1. 13	2,700	長 野 出 口	県埋蔵文化財発掘調査報告書(17) 1981. 3
5	山崎 A	栗野町山崎	52. 12. 13 53. 3. 26	6,000	吉 永 牛ノ 浜	県埋蔵文化財発掘調査報告書(17) 1981. 3
6	山崎 B	〃	53. 4. 10 54. 10. 12	21,800	牛ノ 浜 西 田 中 島 出 口	県埋蔵文化財発掘調査報告書(18) 1981. 3
7	山崎 C	〃	52. 12. 13 53. 3. 26	3,000	中 村 西 田	県埋蔵文化財発掘調査報告書(17) 1981. 3
8	中尾田 (山城)	横川町中野	53. 5. 15 54. 10. 6	9,800	新 東 中 島 井ノ 上	県埋蔵文化財発掘調査報告書(15) 1981. 3
9	木佐貫原	溝辺町木佐貫	51. 2. 6 52. 11. 31	17,000	吉 永 牛ノ 浜	県埋蔵文化財発掘調査報告書(11) 1979. 2
10	石 峰	溝 辺 町 麓	一次 50. 10. 2 50. 12. 19 二次 51. 11. 24 53. 5. 15	20,000	河 口 出 口 西 田 戸 崎 青 崎 池 畑	県埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 1980. 3

11	柳ヶ迫	溝辺町麓	51. 3. 22 51. 5. 17	700	長西	野田	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2
12	長ヶ原	〃	50. 10. 1 50. 11. 28	1,140	新中	東村	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2
13	松木原	〃	50. 9. 18 50. 9. 26	420	新池中	東畑村	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2
14	葛根塚	〃	50. 9. 8 50. 9. 26	790	新池中	東畑村	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2
15	七ッ次	〃	50. 8. 5 50. 9. 18	2,700	弥池中	栄畑村	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2
16	松ヶ迫	〃	50. 7. 14 50. 8. 11	600	弥中	栄村	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2
17	木屋原	〃	50. 4. 7 51. 3. 31	4,520	弥立	栄神	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2
18	山神	〃	49. 6. 13 50. 4. 28	6,950	平牛吉	田浜永	県埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 1977. 2
19	曲迫	〃	50. 1. 27 50. 3. 31	4,000	諏弥	訪栄	県埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 1977. 2
20	栢場	〃	49. 6. 5 50. 3. 27	2,500	平牛吉	田浜永	県埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 1977. 2
21	西免	隼人町西光寺	49. 5. 25 50. 2. 8	1,500	平吉	田永	県埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 1977. 2
22	中尾	〃	49. 9. 25 50. 2. 10	2,500	出吉	口永	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2
23	入道	〃	49. 8. 5 50. 3. 31	1,720	出吉	口永	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2

24	南十三塚	溝辺町崎森	49. 7. 16 49. 9. 20	600	出 口 中 村	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2
25	東 原	〃	49. 9. 17 50. 1. 24	8,700	諏 訪 弥 柴 中 村	県埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1978. 2
26	桑ノ丸	〃	49. 8. 1 50. 4. 25	8,750	新 東 牛ノ 浜 中 村	県埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 1977. 2
27	三代寺	加治木町 日 木 山	49. 3. 15 49. 7. 31	2,300	河 口 新 東 弥 柴 牛ノ 浜	県埋蔵文化財発掘調査報告書(11) 1979. 2
28	建馬場	加治木町反土	46. 12. 8 46. 12. 12	180	盛 園 立 神	県埋蔵文化財発掘調査報告書(19) 1982. 3
29	松木田	始良町鍋倉	46. 12. 12 46. 12. 15	42	盛 園 立 神	県埋蔵文化財発掘調査報告書(19) 1982. 3
30	小瀬戸	始良町西餅田	46. 8. 20 46. 11. 2	3,050	河 口 戸 崎 立 神 尾ノ 上 中 有 間 元	県埋蔵文化財発掘調査報告書(19) 1982. 3
31	小 山	吉 田 町 東 佐 多 浦	46. 11. 6 47. 2. 10	1,050	河 口 戸 崎 立 神 尾ノ 上 中 有 間 元	県埋蔵文化財発掘調査報告書(20) 1982. 3
32	谷 口	吉田町本城	46. 11. 10 46. 11. 18	124	盛 園 立 神	県埋蔵文化財発掘調査報告書(20) 1982. 3
33	上城城跡	吉田町本城	47. 1. 14 47. 1. 18	20,000 (現地踏査)	盛 園 田 野 辺	県埋蔵文化財発掘調査報告書(20) 1982. 3
34	宮 後	吉田町宮ノ浦	46. 11. 10 46. 11. 18	44	盛 園 田 野 辺	県埋蔵文化財発掘調査報告書(20) 1982. 3

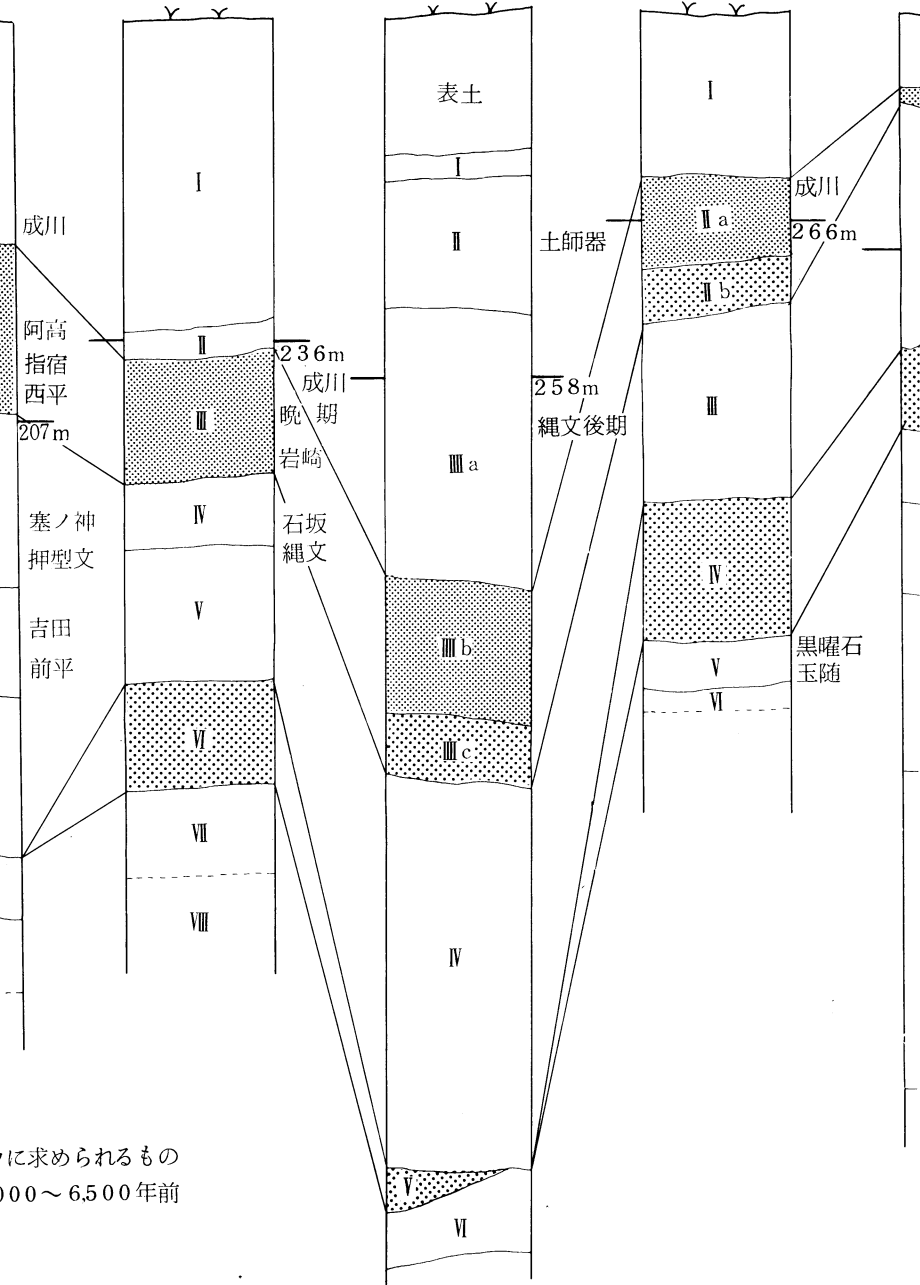
35	木の迫	鹿児島市 川上町	50. 12. 9 50. 12. 11	300	立神 牛ノ 吉浜 永	県埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 1981. 3
36	加治屋園	〃	50. 11. 26 51. 7. 31	1,200	弥栄 新東 長野 中村	県埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 1981. 3
37	加栗山	〃	50. 2. 15 51. 10. 16	30,600	戸崎 青立 吉神 牛ノ 永浜	県埋蔵文化財発掘調査報告書(16) 1981. 3
38	神ノ木山	〃	50. 5. 12 50. 5. 15	20	戸崎 青崎	県埋蔵文化財発掘調査報告書(16) 1981. 3



東原

中尾

西免

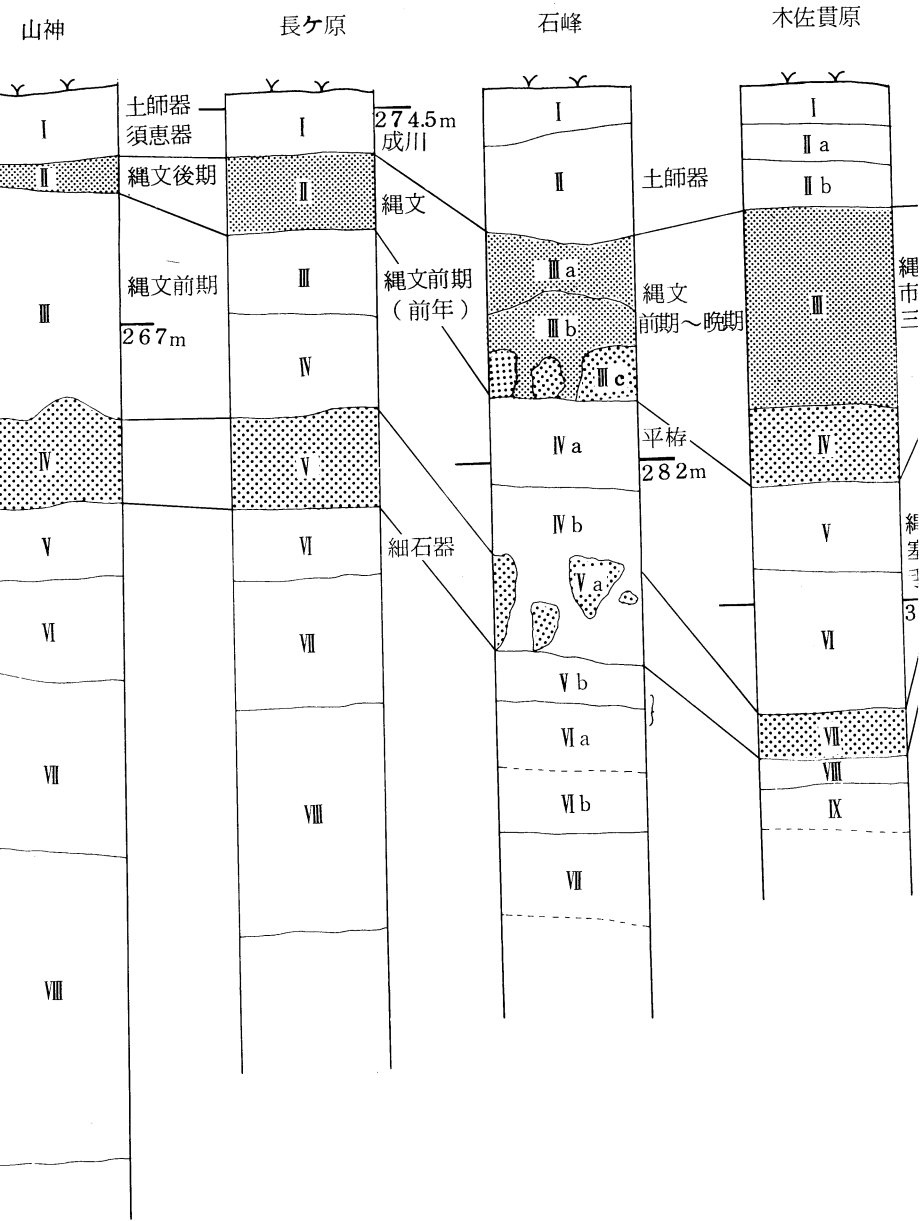


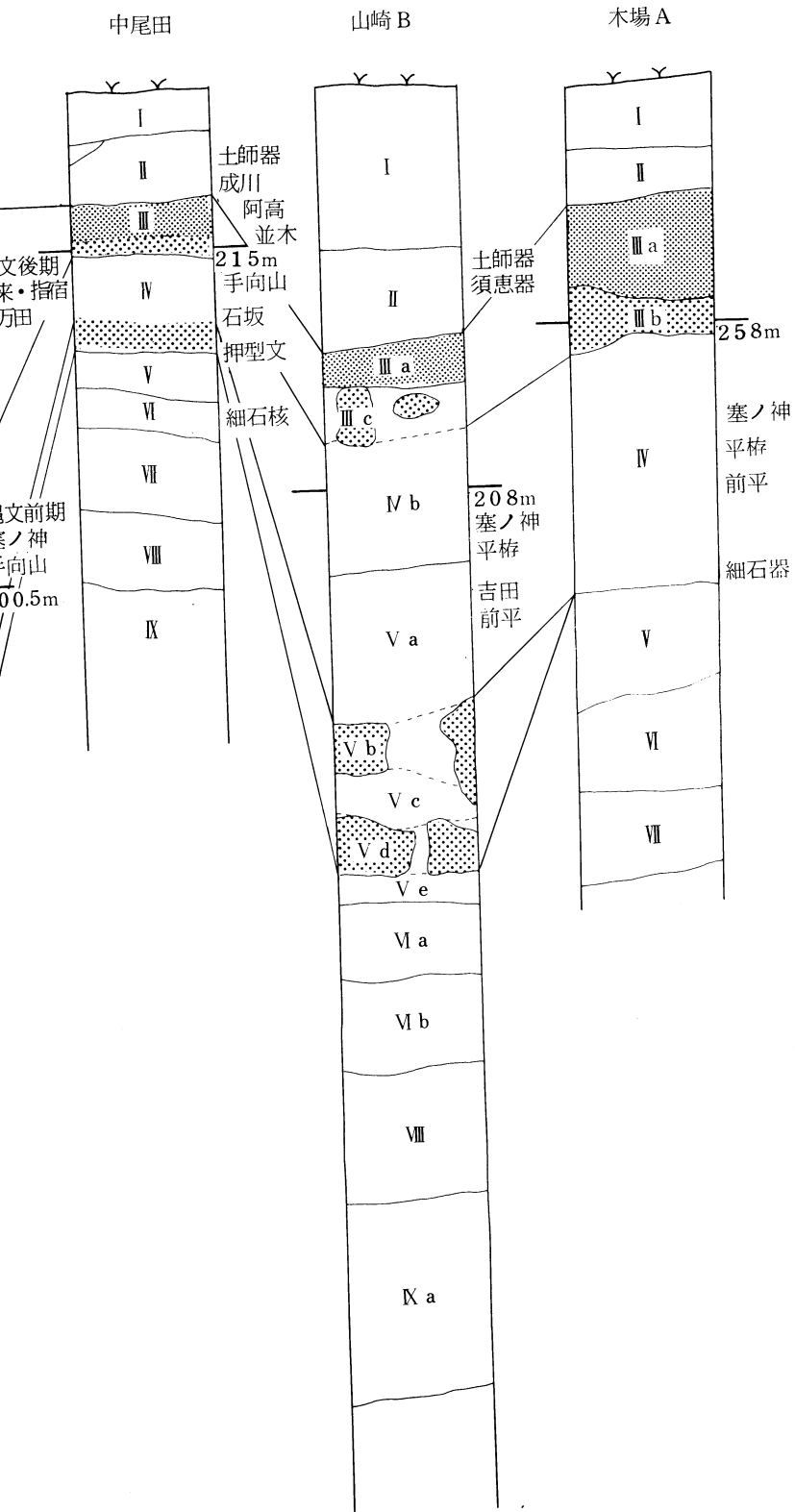
に求められるもの
000~6500年前

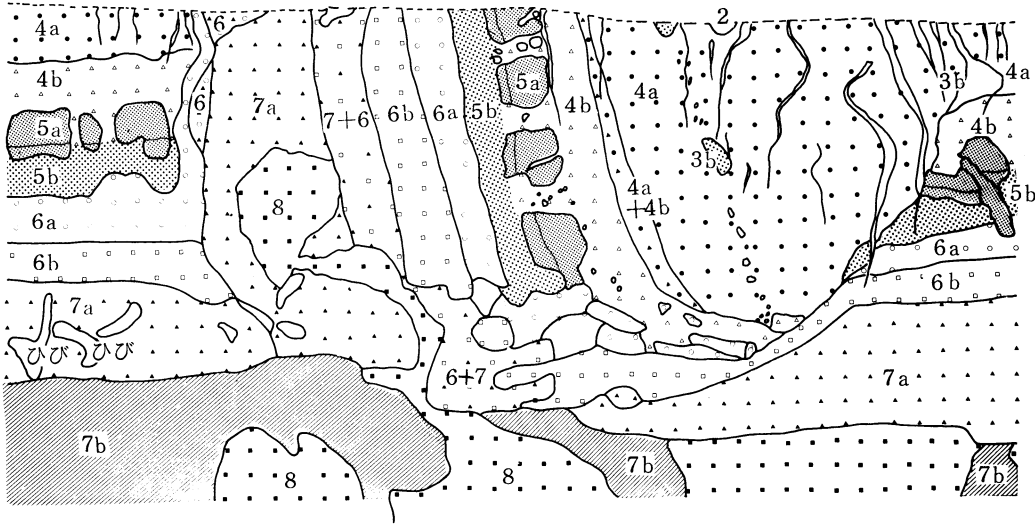
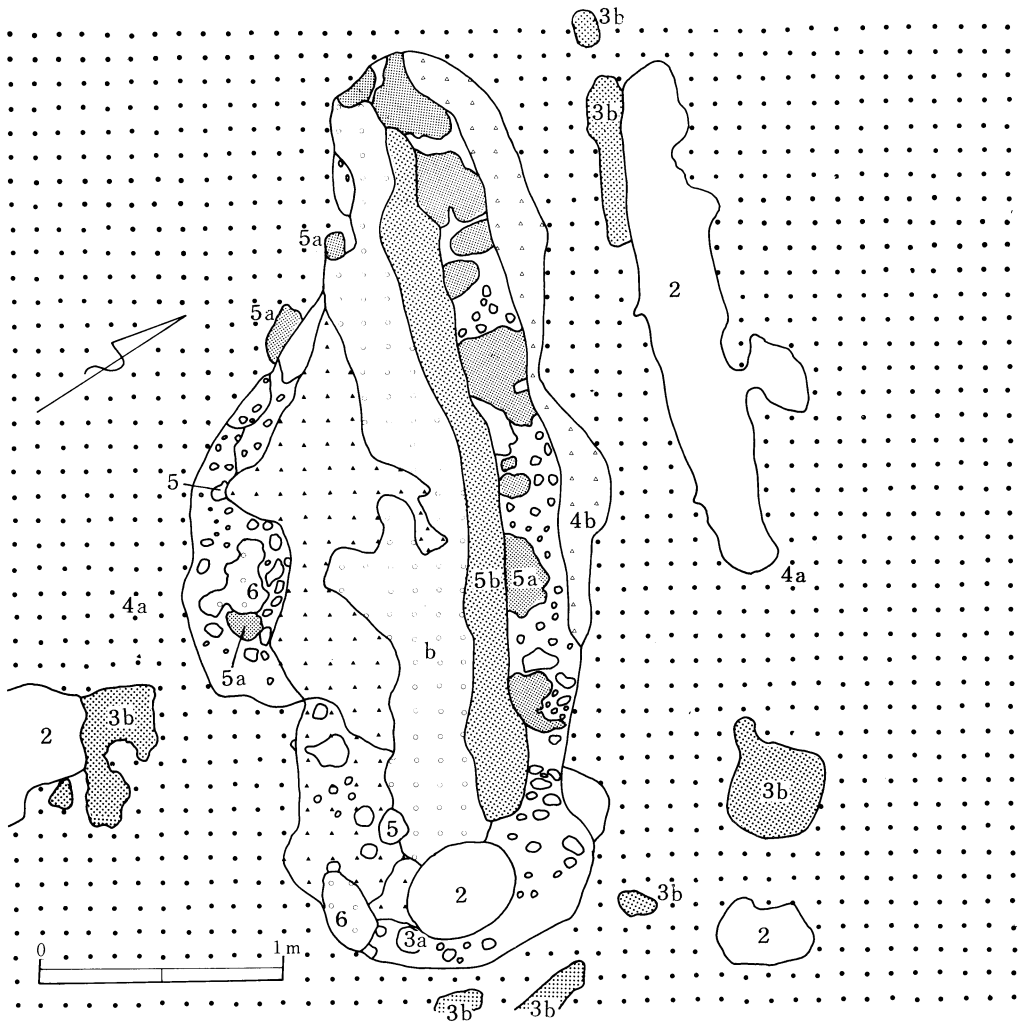
による

られるもので、
~10,000年前である。

る桜島火山起源、火山
『代』による。







地層の局所的断層について

九州縦貫自動車道関係の遺跡の調査において、溝辺町・横川町・栗野町などの霧島山地西方の姶良郡地域内において、地層に局所的な断層が広く分布することが確認された。

断層部分の断面を観察すると、整合の状態であった水平な層が、この部分では垂直に転位して縦に並んだ形となり、断面の形は下方が半円形ないしは弧状を呈するのが一般的である。

断層が発生した時期は、赤ホヤ火山灰土が堆積したあとであるという御教示を鹿児島大学教育学部（当時）石川秀雄教授より受けた。

放射性炭素（ ^{14}C ）年代測定について

出土した遺物の年代決定は、出土した土器の形式・系統で判断する他、土層の上下関係等で遺物の新旧関係を決定する。

これらの方法の他、近年では自然科学の土壌分析、土中に含まれていた木炭や貝殻等の放射性炭素の測定などで年代を推定する方法も利用するようになり、九州縦貫自動車道関係の遺跡の調査でも ^{14}C による年代測定を行なった。それらは、一部出土遺物の年代と符合しないものもあるが、絶対年代の目安となるので、次に示すこととした。

遺跡名	年	代	資 料	層	備 考
木 場 A ₂	8,860 ± 210 Y.B.P	(8,610 ± 125)	炉 穴 内 炭 化 物	Ⅳ	N -3539
中 尾 田	8,530 ± 125 Y.B.P	(8,280 ± 120)	炉 穴 内 炭 化 物	Ⅳ	N -3929
〃	8,430 ± 125 Y.B.P	(8,190 ± 120)	炉 穴 内 炭 化 物	Ⅳ	N -3983
〃	1,450 ± 65 Y.B.P	(1,410 ± 60)	炉 穴 内 炭 化 物	Ⅲ	N -3940
木佐貫原	1,080 ± 80 Y.B.P	(1,050 ± 75)	炉 穴 内 炭 化 物	Ⅲ	N -3376
〃	1,750 ± 65 Y.B.P	(1,700 ± 65)	炉 穴 内 炭 化 物	Ⅲ	N -3377
石 峰	5,720 ± 130 Y.B.P	(住居址内炭化物	Ⅳ a	GaK -6859
〃	2,780 ± 85 Y.B.P	(2,700 ± 80)	土 層 内 炭 化 物	Ⅳ b	N -3101
〃	3,050 ± 95 Y.B.P	(2,960 ± 90)	土 層 内 炭 化 物	Ⅲ a	N -3100
〃	7,910 ± 115 Y.B.P	(7,680 ± 110)	土 層 内 炭 化 物	Ⅳ a	N -3102
〃	9,410 ± 140 Y.B.P	(9,150 ± 135)	Pit 内 炭 化 物	Ⅳ b	N -3099
中 尾	1,490 ± 90 Y.B.P	(Pit 内 炭 化 物	Ⅲ a	GaK -5801
〃	1,330 ± 80 Y.B.P	(Pit 内 炭 化 物	Ⅲ a	GaK -5802
〃	590 ± 90 Y.B.P	(焼 土	Ⅲ a	GaK -5800
加治屋園	7,550 ± 130 Y.B.P	(7,330 ± 125)	集石内炭化物	V a	N -3924
〃	5,020 ± 105 Y.B.P	(4,880 ± 100)	集石内炭化物	Ⅲ c	N -3925
加 栗 山	9,150 ± 160 Y.B.P	(8,880 ± 150)	集石内炭化物	V	N -3926
〃	9,390 ± 130 Y.B.P	(9,110 ± 130)	土 塚 内 炭 化 物	V	N -3927
〃	8,890 ± 130 Y.B.P	(8,630 ± 125)	土 塚 内 炭 化 物	V	N -3928

各遺跡の概要

1. 堀ノ内遺跡

1. 所在地 始良郡吉松町川添堀ノ内

2. 環境

遺跡は、吉松町街地より南へ約3km下り、国道267号線より東へ1.5kmほどの標高約400mの畑地にある。当地は西へ向いた傾斜面となり、面積の狭い段々畑が作られている。当遺跡から西方に山あいをぬって流れる川内川があり、河岸岸丘が形成された地点に、地下式板積石室を主体とした永岡古墳が位置する。

3. 層位

I層は耕作土、II層は黒褐色火山灰土層で、土師器の遺物包含層である。III a層は黄色土層(赤ホヤ層)、III b層はバミス層(不規則でブロック状を呈す)、IV層は灰青色粘土層、V層は暗褐色粘土層、VI層は暗黄褐色粘土層、VII層は黄褐色粘土層(粘質が強く、安山岩が多数含まれ、岩石層となる)、VIIIはシラス層。

4. 遺物

発掘対象地は、畑地の縁辺部で、しかも傾斜地の約500㎡と狭い面積の調査であった。遺物としては、土師器坏・甕・内黒土師器・須恵器等の小破片が出土するにとどまった。

以上、本遺跡は台地縁辺部の約500㎡を調査したが、一部は攪乱を受け、小規模な調査に終わった。遺物も奈良時代以降のものであったが、主体部は調査区以外の東に延びることは確実で、その意味では、遺跡は保存された形となった。



遺物出土状態

2. 木場A・木場A—2遺跡

1. 位置

木場A遺跡は、始良郡栗野町木場外堀、木場A—2遺跡は、木場本城に所在する。木場A遺跡は国鉄栗野駅の北東約1300mの地点にあり、木場A—2遺跡はA遺跡の東約700mにある。

2. 環境

遺跡の所在する栗野町は、鹿児島市街地より北東約44kmの鹿児島県の北部に位置し、東は霧島火山群の一分峯栗野岳が宮崎県えびの市と境を接し、霧島山塊等の火山灰で地形が複雑である。また、川内川が吉松町境の峡谷をうがって栗野町の中央部に沖積地の盆地を作っている。

A遺跡は、川内川南東部の松尾城より約600mの栗野岳の裾野にあたる台地上にある。標高約260mの台地で川内川よりの比高は約80mである。A—2遺跡は、A遺跡の東700mのところであり、栗野岳の裾野が綾織の谷にむかう傾斜地を削平した桑畑にある。

3. 層位

I層～VII層に分類された。I層は耕作土である。II層は黒色軟質土であるが、削平されて部分的にしか存在しない。土師器の散布がみられた。III a層は黄褐色土層で縄文時代前期～後期にかけての遺物が出土するが量的には少ない。III b層は黄褐色パミス層で無遺物層である。IV層は黒褐色硬質土層で上部において縄文時代前期の土器と石器が、上部から中部において、縄文時代早期の土器と石器が出土した。IV層下部に桜島起源と想定される黄褐色パミス層が、ブロック状に存在した。V層は黄褐色粘質土層で、IV層最下からV層最上部にかけて細石器の出土をみた。VI層は暗茶褐色を呈した粘質土層で、VI層下部からVII層最上部にかけて旧石器時代の遺物が出土した。VII層は黄シラスで最上部に石器がみられたが、それ以下は無遺物層であり基盤をなすシラスの上にある。A—2遺跡はVI層まではほぼ同様であるが、VII層は暗黄褐色を呈した火山灰層で尖頭器が出土した。VIII層は茶褐色を呈する火山灰層でやはり尖頭器が出土した。IX層はA遺跡のVII層に対比される黄シラスである。

4. 遺構

遺構は道路跡・溝状遺構・土壇・集石が検出された。道路跡は表層を除去したIII a層上面にポットホールを形成するもので、遺物として須恵器・土師器から陶器類まで遺物がみられ、中世から近代まで続いた古道であろう。溝状遺構は2本検出され、1号溝からは土師器の皿が出土している。土壇は3基検出され、埋土は全てII層の黒色火山灰土である。土壇1からは、3枚の土師器皿が重なるようにして出土した。集石は縄文時代のIV層に拳大の礫を集めたものが8基検出され、VI層下部には旧石器時代の集石が4基検出された。旧石器時代の集石には周辺に炭化物が確認されたものも検出された。性格は不明である。A—2遺跡では遺構は検出できなかった。

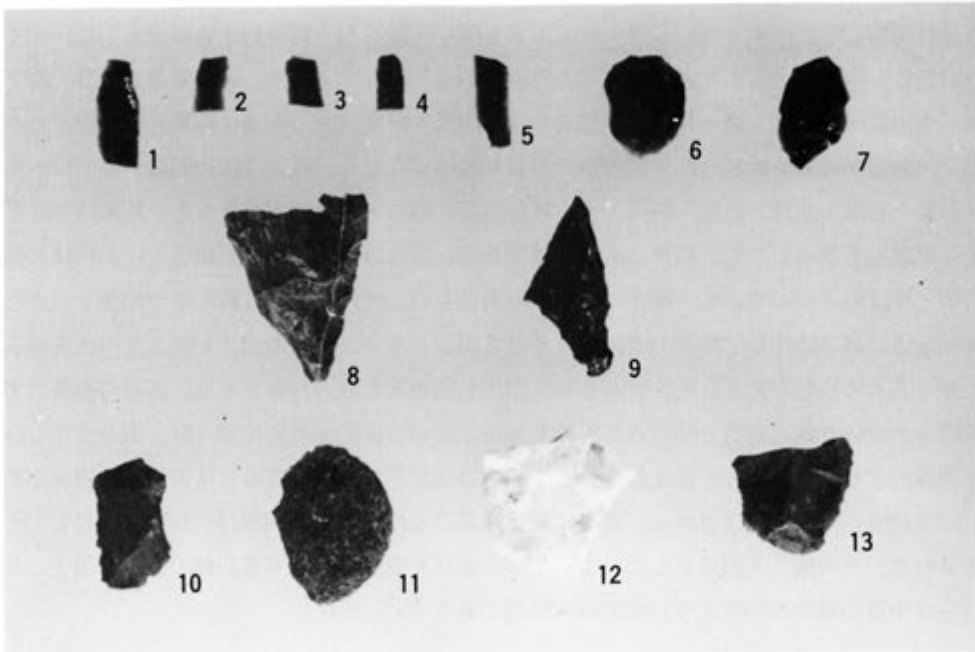
5. 遺物

遺物は旧石器時代の石器・縄文時代土器・石器・土師器・須恵器・陶器・青磁等が出土した。

旧石器時代の石器にはナイフ形石器・加工のある剥片・細石刃・調整剥片等が出土した。ナイフ形石器はシラス直上にあり古いタイプの石器である。縄文式土器は、連点鋸歯文土器・桑ノ丸式・吉田式・前平式・塞ノ神式・押型文・手向山式・阿高式・出水式・市来式等の出土を見たが、平椀式から塞ノ神式への中間形態の土器が主体をなした。縄文時代の石器としては、石鏃・石斧・石匙・石錐・石槍・剥片・つまみ形石器・磨石・石皿等が出土した。石鏃は180点出土し形態も多種にわたる。石斧は磨製石斧である。石匙は縦型と横型が出土し、石槍は尖頭状石器と呼ばれるものである。剥片には加工のあるもの、使用痕のある剥片等が出土し、また、北九州地方の縄文時代早・前期の遺跡で見られる両面からノッチ状の加工を施すつまみ形石器や抉り入りの石器が出土した。磨石も多く出土し凹石等もみられる。また、石皿の表裏に多数の凹みをつけた蜂ノ巣石と呼ばれるものも出土している。土師器には甕・杯・皿が出土し、皿は遺構内より3枚重なって出土している。須恵器は細片である。陶器には備前焼の攪鉢があり、16世紀頃の年代が推定される。青磁は竜泉窯系のもので白磁と同様15～16世紀頃のものと推定される。その他、土製品として、ふいご口の破片や石製品の滑石製石鍋の破片が出土した。これらは中世の遺物の年代より16世紀頃の時期であろう。

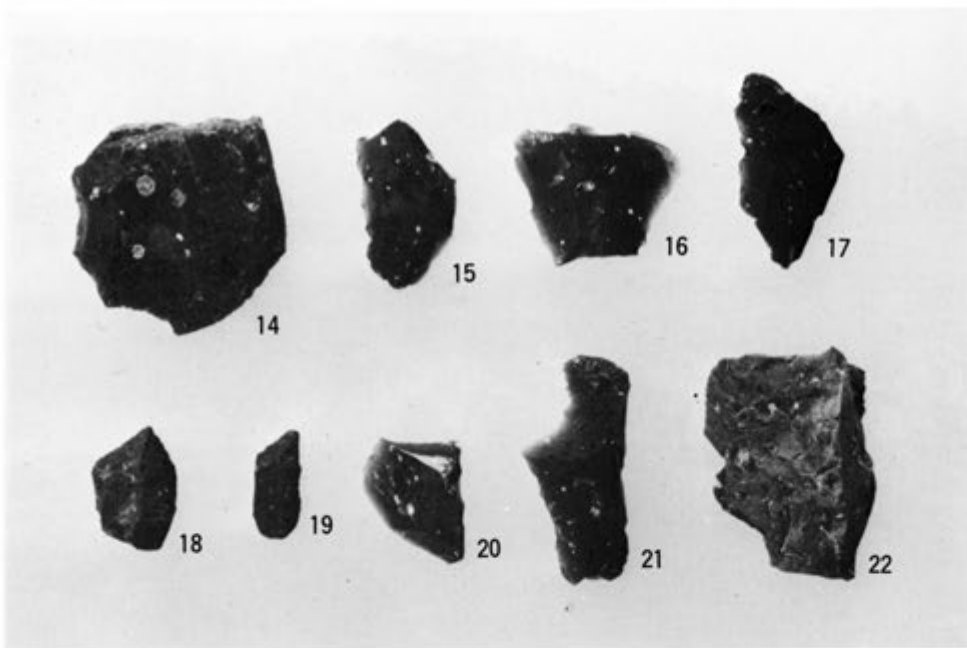


木場 A - 2 遺跡近景



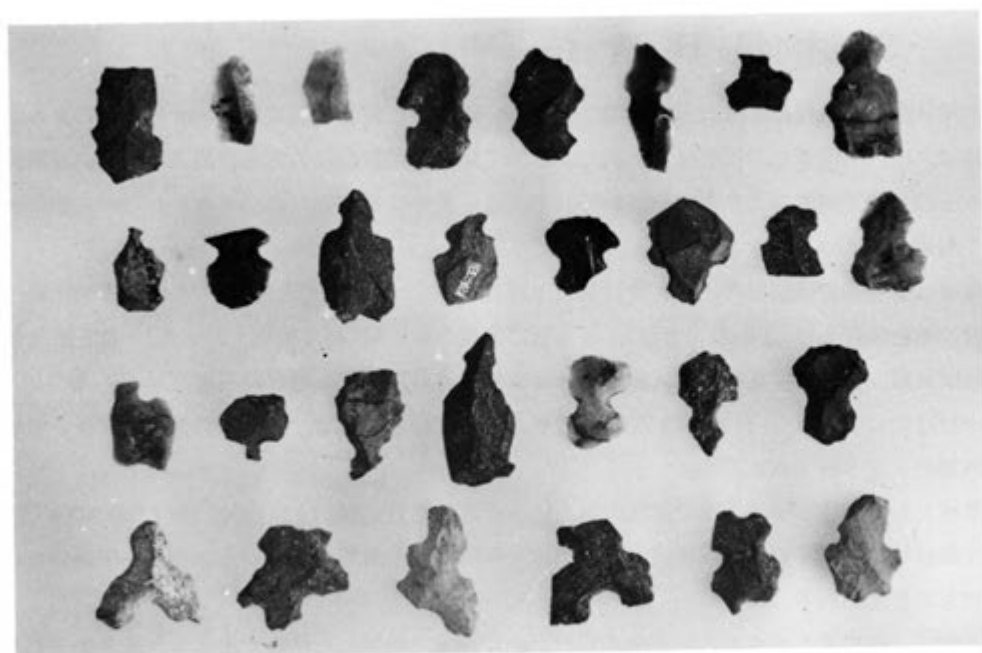
旧石器時代石器

1～5 細石刃 6・7 調整剝片 8・9 ナイフ形石器 10～13 スクレイパー



旧石器時代石器

14～22 剝片



縄文時代石器・つまみ形石器・抉り入り石器



蜂ノ巣石



土師器皿

3. 木場B遺跡

木場B遺跡は始良郡栗野町木場内堀に所在し、国鉄栗野駅より北東約1100mの地点にある。遺跡は、川内川南東部の松尾城より約500m南で栗野岳の裾野にあたる台地上にある。標高約250mの台地で川内川よりの比高は約80mである。遺跡は畑地のため削平され、牧草・桑畑として利用されている。

地層はⅦ層まで確認した。Ⅰa層は褐色土層(白色パミスの粒子を含む)、Ⅰbは黒褐色層、Ⅱ層は黒色軟質土層(土師器包含層)、Ⅲa層は赤褐色軟質層(縄文晩期土器包含)、Ⅲb層は黄褐色硬質層、Ⅲcは黄褐色パミス層、Ⅳa層は黒色粘質層、Ⅳb層は軽石層(小指先大のパミスが断続的に広がる)、Ⅳc層は黒色粘質層、Ⅴ層は褐色粘質層、Ⅵ層は黒褐色粘質層、Ⅶ層は黄褐色シラス層である。

遺構として、Ⅲa層直上面で溝状の落ち込みがみられた。幅約1m内外、深さ30~40cmで断面は鍋底状を呈している。成川式土器の破片や陶磁器を少量包含していた。古代~中世にかけてのものと思われる。

遺物は、成川式土器を主として出土した。小片が多く散乱した状態で出土し、まとまったものは少ない。土師器もかなり出土した。層位的にはⅡ層からⅢa層上面に当り、古墳時代の成川式土器と混合している。坏は糸切り底を主とする。また、青磁や白磁の破片もみられた。いずれも13世紀前後のものである。その他、須恵器や備前焼の破片も出土している。

縄文式土器は、市来式や黒川式が数点出土した。また、これらに伴う石鎌や剝片もみられ、近辺に後期から晩期にかけての遺跡が存在が予想される。早・前期の土器は全く発見されなかった。



発掘調査風景

4. 木場 C 遺跡

木場C遺跡は、栗野町木場字上原に位置する標高 231 m の所にある。調査面積は約 800 m²で、縄文時代・古墳時代・平安時代・室町～安土桃山時代の4期にわたる痕跡を見出した。

縄文時代の生活痕跡として集石遺構がある。これは50cm四方の中に人頭大あるいはこぶし大の円礫・角礫が集中しているもので、検出された層序あるいは遺跡の類例から早期のものと思われる。遺物は中期末～後期前半の南福寺式土器・市米式土器・石鎌などが出ている。

古墳時代の土器は少量で、前期の甕と、後期の高坏・鉢・甕がある。

平安時代のものには、土師器の坏・皿・碗・甕・内黒土師器の碗・須恵器の甕・大陸製の青磁碗と白磁碗がある。建物等は検出されていない。

室町～安土桃山時代のものには、土師器の坏・鉢には内面にスラグの付着したものがある。この時代の性格は、山城関係の遺跡であることが考えられる。

当遺跡は西側にのびる台地の基部にあり、台地西側は相当に広い。したがって、この先端部の調査がされなければ、この遺跡の性格づけは十分にされ得ない。



木 場 C 遺 跡

5. 山崎 A 遺跡

山崎A遺跡は、鹿児島県始良郡栗野町米永牛瀬戸に所在し、国鉄栗野駅の南西約750mの標高約210～220mのところにある。

遺跡は、霧島火山群の分峯栗野岳の裾野の末端部にあたり、複雑な地形の谷頭の様相を呈した迫状の所にある。周囲は台地末端部のため階段状の畑で、桑が植えつけられている。周辺は、川内川によって形成された盆地状の沖積地に水田地帯が広がっている。

土層は、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ層が黒色火山灰土、Ⅲ層がⅢa層の暗赤褐色軟質土とⅢb層の赤褐色軟質土、Ⅳ層が黄褐色パミスである。Ⅲ層とⅣ層は鬼界カルデラ噴出の赤ホヤに比定されるものである。Ⅴ層はⅤa層の青灰色土、Ⅴb層の黄褐色砂質土、Ⅴc層の乳褐色砂質土、Ⅴd層の灰褐色砂質土である。Ⅵ層がⅥa・d・f層の黒褐色砂質土、Ⅵb層の茶褐色粘質土、Ⅵc・eの黄褐色砂質土である。Ⅶ層が茶褐色粘質土、Ⅷ層が黄褐色硬質土、Ⅸ層がシラス土である。Ⅵ層は桜島の噴出源のパミスに比定されるものである。

遺構は、Ⅲ層上面に2×3間の建物跡が2棟と、谷に沿った数本の古道跡と考えられるものが検出された。遺物から奈良～平安時代に属すると考えられる。建物跡のpitは坪事業が行なわれており、又、1棟のpitのうち4個のpitの最深部に同一個体と考えられる内黒土師器の小片が埋設されていた。Ⅴ層からは、炉に利用されたと考えられる集石が1基検出された。

遺物は、Ⅱ層から土師器・内黒土師器・須恵器・青磁・古銭等が、Ⅱ層下部からⅢ層上部にかけて土師器・須恵器・成川式の甕形土器・埴・高坏等が散布状態で出土した。Ⅲ層からは縄文時代後期に属する土器片が、Ⅴ層からは縄文時代早～前期に属する貝殻文系統の土器片がそれぞれ少量出土した。Ⅱ層出土の青磁の中には、熊本県城南町板野の1410年刻銘の石塔から出土したものと同タイプ(註)のものがある。石器では、石斧・敲石がⅢ層から、打製石鏃がⅡ・Ⅲ・Ⅴ層から出土した。

(註) 九州歴史資料館の亀井明德氏の御教示による。



山 崎 A 遺 跡

6. 山崎 B 遺跡

1. 位置

山崎 B 遺跡は、姶良郡栗野町木場字牛瀬戸に所在する。この地は国鉄栗野駅の南西約 750 m の地点にあり、現在は栗野インターチェンジの料金徴収所の付近である。

2. 環境

遺跡の所在する栗野町は、鹿児島市街地より北東約 44 km の鹿児島県の北部に位置し、東は霧島火山群の一分峯栗野岳が宮崎県えびの市と、南は牧園・横川両町と境を接し、火山灰土で地形が複雑である。また、川内川が吉松町境の峡谷をうがって栗野町の中央部に沖積地の盆地を作っている。

遺跡は、栗野岳の裾野から広がる丘陵に川内川の氾濫による砂礫層が堆積し、河岸段丘を形成しているテラス状台地上にあり、畑地として利用されていた。北側は川内川と水田を望む地であり、標高約 210 m の台地であり、川内川からの比高は約 30 m である。

3. 層位

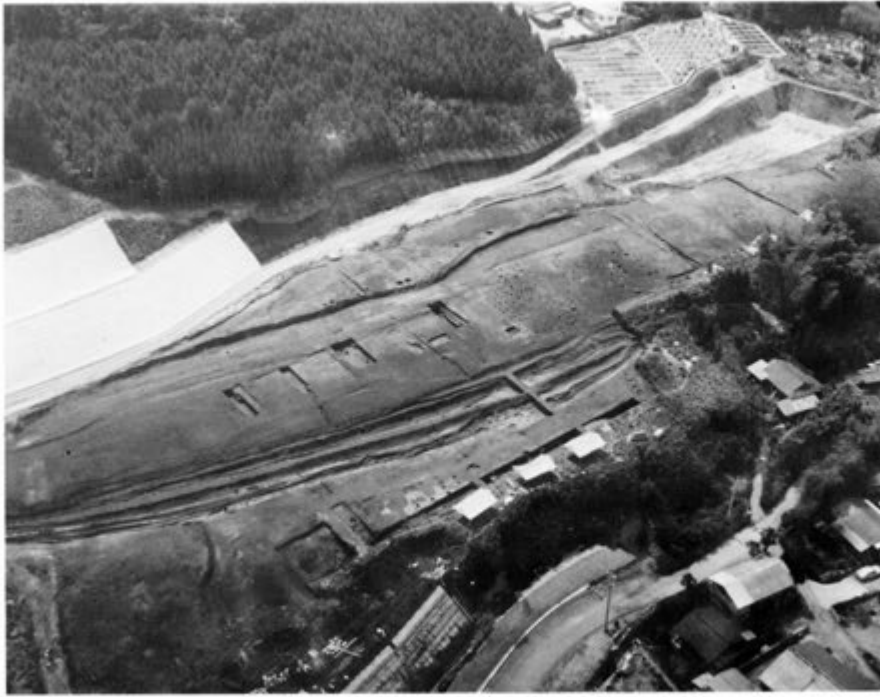
I～Ⅷ層に分類された。I 層は耕作土で、II 層は黒褐色軟質土である。II 層は部分的にしか存在しない。遺物は須恵器・土師器・陶器・青磁・白磁が出土している。遺構は溝状遺構・堀が検出された。III 層は黄褐色土層で縄文時代前期～晩期にわたる遺物を包含するが出土量は少ない。III 層下部はパミス層があり無遺物層である。IV a 層は青灰色を呈し、縄文前期の遺物が出土した。IV b 層は乳褐色を呈し、縄文時代前期の遺物が出土した。V 層は黒褐色硬質土層で縄文時代早期の土器と石器が出土した。VI 層は黄褐色パミス層で無遺物層である。VII 層は水成砂層で 1～2 m にわたり互層をなして堆積している。VIII 層は砂礫層で細石器が出土している。石器は磨滅したものが多く、川内川の氾濫により運びこまれたものと思われる。

4. 遺構

遺構は、堀・溝状遺構・掘立柱建物跡・集石・土壇が検出された。堀は 3 本検出され、いずれも南北に平行して築かれたものである。溝状遺構は西から堀へむかって傾斜している。遺物は土師器・須恵器・陶磁器が出土した。掘立柱建物跡は、7 棟検出された。堀より東に築かれ、溝 1 と溝 3 の間に無数の柱穴が集中し、5 棟が確認され、また、その南の方にも 2 棟検出された。その他の地域にも無数の柱穴が存在し、掘立柱建物がその他にも築かれたと想定されるが確認されたものは 7 棟であった。2 間×5 間、2 間×4 間、2 間×3 間、2 間×2 間を測った。縄文時代早・前期の集石遺構は、土器出土の状況と同じように分布し 17 基を確認した。検出状況は IV a～V 層にみられ、一か所に集中しているものから、散乱しているものと形態はまちまちである。大半が拳大の安山岩の角礫や円礫の自然石からなる。土壇は VI 層に V 層が埋土されているもので 6 基検出された。長径約 100 cm、短径 60～70 cm、深さ約 60 cm の方形状を呈する土壇である。埋土中に少量の黒曜石片と細片の吉田式土器片が検出されたが、性格などは不明である。

5. 遺物

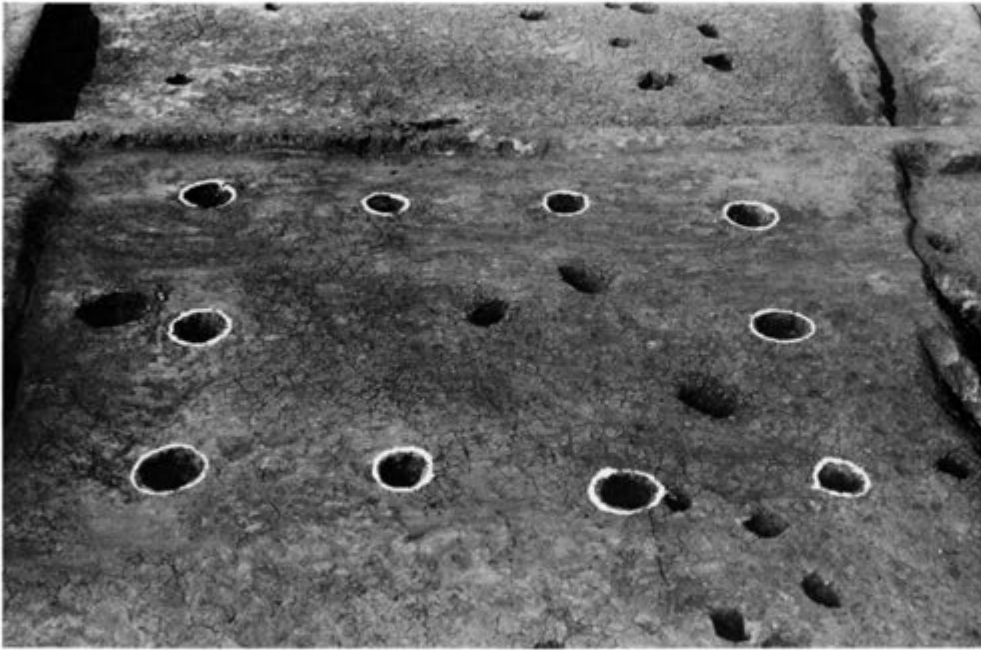
遺物として旧石器時代は細石刃・細石刃核・尖頭器・剥片等が砂礫層の中で出土し、石器は磨滅していることから氾濫による周辺遺跡からの移動と思われる。縄文時代の遺物は早期から晩期まで各時期にわたり出土した。吉田式土器・前平式土器・平楯式土器・寒ノ神A式土器・寒ノ神B式土器・押型文土器・手向山式土器・政所式土器・木屋原式土器・轟式土器・阿高式土器・指宿式土器・市来式土器・黒色研磨土器等多種多様にわたって出土したが、破片が多く復元できたものは、寒ノ神A式土器と木屋原式土器・前平式土器であった。石器は、石鏃・石斧・石匙・スクレイパー・剥片・すり石等が出土した。弥生時代・古墳時代の遺物は少なく破片が小さい。中世の遺物には、土師器・内黒土師器・須恵器・瓦質土器・磁器・陶器・土製品・石製品・古銭が出土している。土師器には、皿・坏・埴・蓋・こしき・甕・浅鉢・すり鉢があり、内黒土師器には、坏・埴・埴がある。須恵器は坏蓋・坏身・坏・壺・こね鉢・提瓶・甕があり、瓦質土器には甕・すり鉢がある。磁器には白磁・青磁・染付(青花)・青白磁がある。陶器には天目茶碗と備前焼とがある。



遺 跡 全 景



堀 出 土 状 況



掘立柱建物跡(2間×3間)



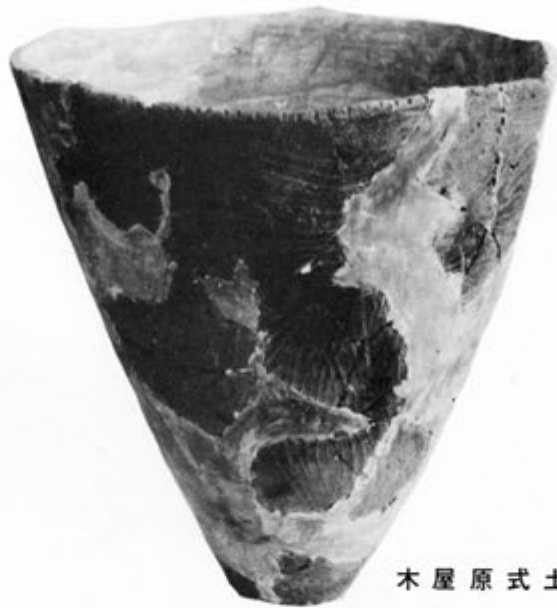
木屋原式土器出土状態



塞ノ神式土器



前平式



木屋原式土器

7. 山崎 C 遺跡

山崎C遺跡は、始良郡栗野町大字米永字牛瀬戸に所在する。鹿児島空港の北方約16km、国鉄栗野駅より南西約750mに位置する。遺跡は標高約230m～250mの丘陵の中にあり、川内川に向かって形成された谷を利用して造られた桑畑にある。隣接地には縦貫道関係で調査が行なわれた山崎A遺跡・山崎B遺跡が存在する。

層位は、Ⅰ層は灰黒色（耕作土）で部分的に二次堆積の痕跡が見られる。Ⅱ層は黒褐色火山灰土、Ⅲ層は赤褐色火山灰土で、3層に細分される。Ⅳ層は青灰色火山灰土を観察した。

遺構は、Ⅲ層上面において大小のピットが約90個検出された。落ち込みはⅡ層（黒褐色土）で、ピット中より青磁・白磁・土師器等が認められる。時期は中世と思われるが、ピットの形、大きさ、深さ等が不統一でまとまりのない状態であり、建物跡を想定できるものではない。

遺物は、Ⅲ層中より縄文時代後期と思われる凹線文土器片、完形の鉢形土器が見られる。又、それに伴うと思われる石鏃、石斧も出土した。Ⅲ層上部よりは成川式系土器、Ⅱ層中よりは、土師器、内黒土師器、須恵器、青磁、白磁等が出土した。

山崎C遺跡においては、遺物の量も少なく、性格は明確に出来ないが、隣接する山崎A・B両遺跡と類似点も見られ、密接な関係にあると思われる。



山 崎 C 遺 跡

8. 中尾田遺跡

1. 位置

本遺跡は、鹿児島県始良郡横川町中ノに所在する。

2. 環境

遺跡は、栗野岳から王ノ山へ連なる台地の舌状台地の先端にあり、標高は223m～210mである。眼下には、国見岳を源として山ヶ野方面から流れてくる支流と、安良岳を源として山ノ口方面から流れてくる支流が合流した天降川が流れており、この川は、遺跡付近で蛇行しながら東流して、対岸の丘陵部を廻るかたちで南流して牧園町へ流れ、そして、霧島山系や溝辺台地の支流を集めて大河川となり、隼人町・国分市の沖積平野を形成して鹿児島湾に注いでいる。遺跡は、眼下の水田面より約50mにもおよぶ高位にあるため、天降川とその支流によって形成されたわずかな平地に発達した横川町の市街地やその縁辺部を一望できる絶好の場所でもある。

横川町は、かつて山ヶ野金山が栄えた頃には宿場街として繁栄したところでもある。

横川町内の遺跡を概観すると、これまで縄文時代の遺跡4ヶ所、弥生時代の遺跡1ヶ所、古墳～歴史時代の遺跡6ヶ所が、これまで知られている。

3. 層位

中尾田遺跡の基本的層序は、表層から基盤層の溶結凝灰岩（阿多火砕流＝Ata）まで10層の土層堆積が確認された。火山灰を主成分とする各層は、整合したかたちで良好な層序であったが、傾斜面や中世の遺構による削平などによって部分的には土層堆積に差異が見られた。

なお、遺跡全体の基本層序を整理すると次のようになる。



遺跡全景（北から）

I層は、耕作土である。暗灰色を呈し、平均15cm～20cmの厚さである。II層は黒色土で、掘切り遺構の東側部の周囲で見られ、土師器片を包含する。III層は黄褐色を呈した火山灰層であり、鬼界カルデラ噴出のアカホヤ火山灰 (Ah) に対比される。III層中でも a・b層に分かれて、III a層は、ホヤホヤした茶褐色に近い軟質層で、堆積は約30～40cmと厚い。III b層は、黄褐色の軽石粒 (パミス) を含む粘質硬土で、堆積は約5～10cmと薄い。遺物は、III a層に阿高式土器、並木式土器が多量に包含されていた。なお、アカホヤ火山灰層 (Ah) は、¹⁴C年代測定値により、6000年～6500年B.P.の値が得られている。IV層は黒色土層であるが、土層中に黄色軽石が一部で見られるため a・b・c層に細分した。IV a層とIV c層は、黒色土層である。IV b層は、黄色パミス混層で、桜島降下軽石 (SzP) 層と呼ばれるものである。遺物は、IV a層中に包含されている。V層は淡褐色を呈し、若干粘質をおびている。平均約10cmの厚さである。VI層は、V層と類似するが、色調が暗褐色を呈した腐植土層である。約10cmの厚さで堆積している。遺物は、黒曜石の細石核1点および碎片が出土した。VII層は明黄色土層で、粘質の強い硬質土である。層厚は50cmと厚い。VIII層は灰黄色を呈する水分の多い粘質土で、ヌレシラスとも呼ばれている。粘質土と砂層の互層をなすところもあり、水成層と考えられる。VII層は2層に細分でき、VII a層を水成層として、VII b層を砂礫層とした。区層は、灰白色の火砕流であり、一般にシラスと呼ばれている。この火砕流中には、かなり大きな軽石が含まれている。始良カルデラからの噴出物で、入戸火砕流と呼ばれ、¹⁴C年代測定によりほぼ2.1万～2.2万年B.P.が得られている。X層は、暗灰白色の溶結した火砕流である。この火砕流は、阿多カルデラの噴出物で、阿多火砕流と呼ばれるものである。¹⁴C年代測定により3万～4万年B.P.の値が得られている。

3. 遺構

縄文時代の遺構は、IV層とIII層に見られた。

①IV層内からは、炉穴と集石が検出された。炉穴は、V層に掘り込んでつくられており3基検出された。炉穴の平面プランは、ほぼ円形をなすが、その中には楕円形を中心として拡張したプランを持つものも見られる。炉穴内には、角礫・焼土・木炭片が見られた。

集石は、10基検出された。そのうち、遺跡中央部において8基が集中して検出されている。集石は、掘り込み内にあるものと平坦面に組まれたものがあり、礫の大きさは大小様々である。集石の形で、花卉形に組まれたものもある。

②III層では、炉跡3基、土塚1基が検出された。炉跡はIII a層の下面で焼土を確認し、III b層でプランを検出することができた。平面プランは、隅丸方形をなしている。炉穴内には木炭片が流入している。土塚は、隅丸方形で、III b層からIV層にかけて掘り込んであり、埋土はIII a層が流入している。

③山城関係の遺構は、堀切・隧道・成壁・空堀・土塁・盛土・登り道・古道・柵列・郭・腰曲輪・排水溝・掘立柱建物・土塚が検出された。これらの遺構は、本遺跡の所在する舌状台地を南北に切断する堀切りを中心として東西に見られた。堀切りは最も狭いところで、幅7.5

m、深さ8.2mを測り、広いところでは、幅11.5m、深さ7.4mを測る。堀切りの断面は、逆台形あるいはV字状を呈し、シラス層まで掘り込んで造ってある。南側より隧道付近までは、逆台形を呈しているため、堀切りが防備に加えて通路として利用された可能性がある。隧道は、ほぼ堀切りに対して東側に直角に延びており、天井の一部がアーチ状に残存していた。堀切りからの入口は傾斜して上り一段高くなっている。空掘は、5本検出された。そのうち2本は、堀切りに直行して西側平坦地の中央に並行して築かれていた。他の3本は、いずれも壁面下や傾斜面中腹に築かれたものである。断面は、逆台形をなすものが多い。土塁は、堀切り東側の側辺部に造成盛土面が一部上面が削平されて残存していた。盛土は、遺跡の西側中央部にあり、シラスと黄褐色土（アカホヤ）混りのものが盛土造成されていた。登り道は、西側平坦地の南傾斜面に4本検出された。柵列は、堀切りの西側に3つ検出された。柵列は、堀切りに対して、鋭角的に作られていた。柱穴は2列に並ぶものと、1列のものが見られた。柱穴の大きさは、55cm～65cm大の円形をなしている。深さは浅いもので12cm、深いもので35cmを測る。柱穴間は約2m前後である。掘立柱建物跡は、8棟検出された。堀切りより東側に5棟、西側に3棟である。建物跡は、用地外に延びて、全容をつかむことのできない棟が多かった。梁間柱間および桁間柱間の平均は2m前後である。また、庇の付く棟がほとんどである。土壇は、6基検出された。平面プランは、方形・円形をなしている。深さは65cm～115cmとわりに深い。玉砂利敷遺構は、郭内のほぼ中央部にあったもので、不定形な敷きかたをしているが、上から見るとあたかも動物を形どっているかのように見える。玉砂利は、1cm～4cm位のものである。



隧道断面（北から）



建物跡玉砂利敷遺構（東から）

4. 遺物

遺物は、先土器時代、縄文時代、古墳時代、中世期のものがある。特に、縄文時代の遺物は調査中。包含層の性格を知るために、各土器形式ごとの平面分布、垂直分布を示し、各土器型式の出土状況に注意を払った。このことは、土器の原位置をつかみ、各土器形式や同一個体がどのような分布をしているかによって、土器包含層の形成状況を見るためであった。

Ⅳ層の土器は、貝殻文系、撚糸文、縄文系、押型文系、その他の土器と大きく4つに区分される。貝殻文系土器は、口縁外面に貝殻縁で連続刺突を施すものや器面に条痕を施すものである。撚糸文・縄文系土器は、器面に撚糸文や縄文を施し円筒形である。押型文土器は、山形、楕円、菱形、同心円文などの各種押型施文を有するものである。器形は、口縁部が大きく外反し、胴部が「く」の字に屈曲するものである。その他のものとしては、みみずばれと呼ばれる微隆起突帯文・凹線文・楕円状の沈線文・円文が見られた。石器は、石鏃30点、石匙7点、石斧3点、磨石5点、凹石1点、石弾状礫1点が出土している。

Ⅲ層の土器は、縄文中期の凹線文土器を中心とするもので、遺跡の南側半分に多く分布が見られた。出土した土器は凹線文土器、凹線文の間に連点もしくは貝殻腹縁押圧の文様を持つもの、口縁部が肥厚してその部分にヘラや貝殻腹縁で施文したのが見られ、中には文様のないもの、胎土に消石を多く含んでいるものも見られた。また、同層から晩期の黒色研磨土器も出土した。石器は、石鏃68点、石匙2点、石斧7点で、いずれも局部磨製か磨製である。磨石9点、敲石3点、凹石2点、安山岩製の石皿が5点出土しているが、石鏃が68点とⅣ層に比べ、数が多く注目される。

山城に伴う遺物は種々出土しているが、遺構の規模に比較すると小量といえる。出土遺物は、磁器（青磁・白磁）土師器・陶器・瓦器・石製品・金銅製装飾品・古銭などがある。いずれも表層中や山城遺構内流入土中の出土であった。白磁は、碗・皿など4点出土し、時期的には、13世紀～15世紀前半の明代に比定される。青磁は、青磁描文皿・鎬蓮弁文碗等で、総数48点出土し、時期は12世紀～15世紀のものである。備前焼・常滑焼の甕も出土している。古銭は、淳化元寶・至道元寶の2枚が出土している。

5. むすび

中尾田遺跡は、基盤層まで10層に区分され、その間に火山灰層と文化層が狭まれる良好な層序が確認された。そのうち縄文文化層は、Ⅳ層とⅢa層に確認された。また、Ⅵ層の黒色腐植土層中に旧石器文化の存在が想定されたが、黒曜石のチップが数点出土するにとどまった。

山城調査は、縄文時代の調査に先だっておこなったものであり、縦貫道用地全域に中世山城に伴う遺構・遺物が検出された。掘切りを中心にその周辺の調査であり、城全体から見ると一部の区域にあたるが、多くの構築遺構が判明したことにより中世山城の構築形態を知る重要な手がかりを得ることができた。このように、この台地はいくつもの文化層が存在しており、長い間、各時代の生活の場として活用されたことをものがたっている。このことは、台地を中心とし、この一帯が生活する条件を当時かねそなえた環境であったと言える。

9. 木佐貫原遺跡

木佐貫原遺跡は、鹿児島県始良郡溝辺町木佐貫木佐貫原に所在し、鹿児島空港の北西約5kmの地にあり、霧島連山を一望できる標高約300mの台地上にある。

遺跡は、平坦な台地縁辺部にあたり、ゆるやかな稜をなし、谷頭が形成されているところである。水の便は良いとはいえず、周囲はすべて畑地として利用されている。

土層は、Ⅰ層が表土で耕作土、Ⅱ層がⅡa層の黒色火山灰土とⅡb層の暗褐色粘質土、Ⅲ層がⅢa層の黄褐色砂質土とⅢb層の黄褐色粘質土、Ⅳ層が黄褐色パミス層でⅢ・Ⅳ層は赤ホヤに比定される。Ⅴ層がⅤa層の青灰色土層とⅤb層の乳白色土、Ⅵ層が黒色土、Ⅶ層が黄褐色パミス土で、Ⅶ層は桜島が噴出源とされている。Ⅷ層が黒色土、Ⅸ層が茶褐色粘質土、Ⅹ層が暗茶褐色粘質土、Ⅺ層が黄褐色混礫土、Ⅻ層がシラスとなっている。

遺構は、Ⅲa層に掘り込まれ、Ⅱ層が覆土の溝状遺構が4本、Ⅲa層に掘り込まれ、Ⅲa層が覆土の土壇が2基、Ⅲb層に掘り込まれ、Ⅲa層が覆土の炉穴が3基検出された。

遺物は、Ⅱb層から土師器・須恵器が、Ⅲa・Ⅲb層から縄文時代後期の西平系統・市来式土器・指宿式土器・出水式土器・岩崎上層式土器・縄文土器が、Ⅴ層から縄文時代前期の塞ノ神式土器・手向山式土器・押型文土器・貝殻条痕文土器等が出土している。これらのうち、Ⅲ層出土のものの中には、器壁に絵画様線刻のある土器も出土している。

石器では、Ⅲ層から打製石鏃、磨製石斧、石匙等が、Ⅴ層から打製石鏃、磨石、凹石、石匙等が出土しており、打製石鏃の出土数が多かった。

遺跡は、土壇や炉穴等が検出されてはいるものの、遺物は散布状況であった。



木佐貫原遺跡遠景

10. 石 峰 遺 跡

1. 位置及び環境

本遺跡は、溝辺町石峰にある。鹿児島空港の所在する十三塚原台地は、標高200m～280mをなし、溝辺町北原から東南方向隼人町境まで、さらに西南へ糸走、崎森と加治木町境に至り、西方は弧状となって崎森川の溪谷を望む約20kmにおよぶ広大なシラス台地である。遺跡は、台地のほぼ北端、三角形台地の西側縁辺部にあり、崎森川の源となる狭少な谷水田を望む崖端部にある。昭和41年に河口貞徳氏によって調査が行われ、器面に楕円押型文と変形撚糸文の二つの文様を施した土器「石峰式」(早期)が出土している。

2. 層 位

I層は褐色表土層、II層は黒色火山灰層(下位に土師器包含)、III a層は橙色軟質土—アカホヤ—(縄文前・中・後・晩期の土器包含)中位出土の木炭によるC-14測定、 3050 ± 95 YBP (2960 ± 99 YBP)、III b層は黄色パミス層、IV a層は黝灰青色硬質土層(平椀式土器包含)C-14測定、 7910 ± 115 YBP (7680 ± 110 YBP)、IV b層は黒色粘質土(上部に縄文式土器包含) V a層は黄褐色パミス土層、C-14測定、 9410 ± 140 YBP (9150 ± 135 YBP)、V b層は黒色粘質土、VI層は茶褐色粘質土(V b層下位からVI層にかけて細石器包含)、VII層は黄褐色粘質土(シラス)。

3. 遺 構

縄文時代・竪穴住居址—IV b層中に掘り込まれ、IV a層が埋土となっている。長径3.84m、短径3.59mの円形で深さ15cm、中心部に長径1m、短径0.8m、深さ22cmの楕円形の炉を設けている。・集石遺構—拳大の安山岩の角礫を集めたものである。33基を確認した。・土塚—平面楕円形をなす落ち込み5基を確認した。これらのうち3基は細石器時代の可能性がある。他の2基は押型文土器を伴出した。

弥生時代以降・溝状遺構とピット群、周辺に土師式土器が多く出土した。・集石遺構—溝内に小児頭大の安山岩の角礫や軽石を寄せ集めたもの、陶磁器伴出。・土塚、III a層中に掘り込まれたもので4基を確認した。・近世墓、円形6基を検出する。寛永通宝、木製数珠玉出土。

4. 遺 物

縄文式土器を主体として多くの遺物が出土した。そのほとんどは崖端部に集中している。以下列記する。・縄文式土器—連点鋸歯文、石坂式、吉田式、円筒形条痕文、撚糸文、凸帯撚糸文、押型文土器(楕円・山形・菱形)細形格子状押型文、網目文、石峰式、手向山式、平椀式、塞ノ神A・B式、轟式、曾畑式、深浦式、春日式、阿高式、岩崎上層式、草野式、黒川式等 弥生式土器・弥生系土器・須恵器・土師器・陶磁器・石器—細石刃、細石刃核、ブランク、スクレイパー、剝片、石鏃、石匙、削器、石斧、すり石、叩石、礫器等・鉄鏃

5. む す び

平椀式土器を中心として、縄文早・前期の各種の土器型式が多くみられ、特に縄文を有する

土器文化の系統が明らかになったことは重要である。また、細石器に共伴した石鏃・打製石斧、土器片も、今後の研究課題として貴重な資料となろう。



石 峰 遺 跡 調 査 風 景 (東 南 か ら)



豎 穴 住 居 址

11. 柳ヶ迫遺跡

本遺跡は、始良郡溝辺町柳ヶ迫にあり、鹿児島空港と高屋山陵のほぼなか程に位置する約2000㎡の台地上にふくまれていた。遺跡内の層位は第8層まで確認することができ、この8層がシラス層であった。この遺跡から出土した遺物は少量であったが、古墳時代・縄文時代・先土器時代の各時代の遺物の変化の様相を層位的によく観察できた。なかでも、先土器時代の遺物は、総数45点の出土量で全て黒曜石を用いている。出土品は、残核・剥片(大・小)・砕片がそのほとんどを占め、スクレイパー様石器が1点、細石刃核ないしはブランク状の石器が1点である。これらのことから、本遺跡は、最も小さなまとまり(単位)として、タイプツール(完成された石器・製品)を欠いた状態での発見であったとされている。



柳ヶ迫遺跡

12. 長ヶ原遺跡

長ヶ原遺跡は、始良郡溝辺町大字麓字長ヶ原に所在する。鹿児島空港ターミナルより西北へ約500mに位置する。標高約270mの火山灰台地の縁辺部で、西南部に南方から入り込んでいる谷を控える。その谷と台地面の比高は約20mを測る。

層位は、Ⅰ層は灰黒色(耕作土)、Ⅱ層は黄褐色火山灰土、Ⅲ層は青灰色火山灰土、Ⅳ層は黒褐色火山灰土、Ⅴ層は黄褐色パミス、Ⅵ層は暗茶褐色粘質土(ローム質)、Ⅶ層は明茶褐色粘質土(ローム質)、Ⅷ層はシラス質の8層が観察される。

遺構はⅦ層面において、径約1.2m、深さ約0.7mの略円形の落ち込みが検出されるが、遺物等は見られず、性格は不明である。同一層より旧石器時代の遺物が出土しているのも、それに伴うものと思われる。

遺物は、Ⅳ層より、細石核・細石刃・たたき石等・旧石器時代の石器が見られた。なかでもたたき石3点とやや扁平な石1点とが、近接した状態で出土しており、石器製作をうかがわせる。Ⅲ層及びⅣ層上面は縄文時代早期の包含層で、土器は前平式土器、貝殻を施文具とする櫛描状の文様を持つ円筒形土器(桑の丸遺跡出土のものと同様)が見られる。石器には、石鏃、スクレイパー、異形石器、すり石等が見られる。Ⅱ層上面よりは、古墳時代の成川式系の土器が見られ、甕・壺等の破片が出土する。



たたき石等出土状態



細石核

細石刃

13. 松木原遺跡 14. 葛根塚遺跡

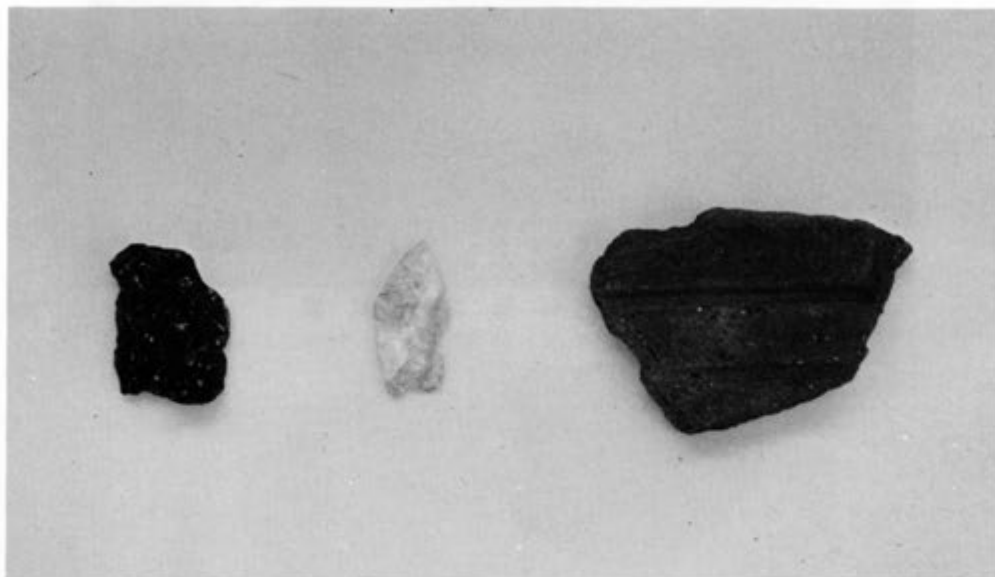
松木原遺跡・葛根塚遺跡は、農道をはきんで相接しているため、ここでは合わせて記すことにする。

遺跡は、始良郡溝辺町大字麓字松木原・葛根塚に所在する。ここは溝辺町の東北部にあたり、鹿児島空港ターミナルより西方約400mに位置する。標高約270mの火山灰台地で、ほぼ平坦であるが、東南部に谷が入り込んでいるため東南方向へゆるやかな傾斜をなしている。

層位は、Ⅰ層は、灰黒色土(耕作土)、Ⅱ層は黄褐色火山灰土、Ⅲ層は青灰色火山灰土、Ⅳ層は黒褐色火山灰土、Ⅴ層は黄褐色パミス、Ⅵ層は暗茶褐色粘質(ローム質)、Ⅶ層は明茶褐色粘質(ローム質)、Ⅷ層はシラス質の8層を観察する。

松木原遺跡・葛根塚遺跡は、共に畑地構造改善事業のため、広範囲にわたり上層部は削除されており、縄文時代以後の包含層は認められなかった。ただし、松木原遺跡においては、Ⅵ層中より黒曜石片が一点出土しており、旧石器時代の存在をうかがわせる。葛根塚遺跡は、Ⅰ層中より、縄文時代後期の土器片、石鏃、古墳時代の成川式系の土器片が認められた。

以上のように、松木原遺跡・葛根塚遺跡においては包含層がほとんど認められず、特筆すべきものがない状態である。



出土遺物

15. 七 次 遺 跡

七次遺跡は、始良郡溝辺町麓七次に所在し、鹿児島空港ターミナルビルの西約300mの位置にある。

ここは十三塚原という標高200m～300mの台地上にある。十三塚原の台地は溝辺町と隼人町の行政区画にあり南北12km、東西6kmと台地である。この台地はシラス台地で南九州特有のものである。始良カルデラより噴出した火砕流で入戸火砕流と呼ばれ、今から20,000—22,000年前の年代があたえられている。この台地の東側は嘉例川、西側は日本山川があり、これらの支流が熊手状に台地を浸食し大小の谷を形成している。そのため各地に舌状台地や棚田があり、小さな集落が点々としている。

遺跡は玉利と鍋の集落の中間にあり、陵南小学校の東側を走る谷頭の北にあたる。遺跡の標高は270mで平坦な所である。南側は松ヶ迫遺跡の谷頭部分にあたる。

遺構は径1m前後、深さ10cm～15cmの土壇が11基検出された。この土壇には炭や煙土がはいっているが、時期・性格は不明である。

層位はⅠ層が表層、Ⅱ層が黒色火山灰土層で腐植土、Ⅲ層が黄褐色土層でa・b・cと3枚に分けられ、アカホヤ火山灰土層に比定される。Ⅳ層は灰褐色を呈したローム層である。Ⅴ層は黒褐色のローム層である。Ⅵ層は黄褐色軽石火山灰土層で桜島噴出物の火山灰層である。Ⅶ層は暗茶褐色の腐植土層である。

遺物は縄文後期の指宿式土器・西平式土器・縄文晩期の晩期Ⅱ式と打製石鏃・磨石・削器・くぼみ石、そして古墳時代の成川式土器が出土した。出土層としては縄文時代のものがⅢa層に、古墳時代のものがⅡ層下部からⅢ層の上面にある。



七 次 遺 跡

16. 松ヶ迫遺跡

松ヶ迫遺跡は、始良郡溝辺町麓松ヶ迫に所在し、鹿児島空港ターミナルビルの西約300mの位置にある。

十三塚原という標高200m～280mの台地に立地している。この台地は隼人町と溝辺町に分かれ南北12km、東西6kmの広い台地である。北方には、霧島連山、南方には桜島を望む台地である。

この台地はシラス台地とよばれ始良カルデラの噴出物である。水には非常に弱くすぐ浸蝕される性質があり、川の部分は深い谷となっている。台地の東側には天降川、西側には日本山川があり、これらにそそぐ支流が台地を熊手状に浸蝕している。天降川の支流嘉例川には国鉄肥薩線が南北に通っている。日本山川の支流には小さな集落が点々とあり、狭い湿地地帯には棚田がいとなまれている。

遺跡は日本山川の支流の谷頭部にあたり、南を向いた傾斜面である。標高は265mで西側の台地には松林がみられる。七ツ次遺跡と同台地にあたり、木屋原遺跡の対向地である。

I層は耕作土、II層は黒色土、III層は黄褐色土、IV層は灰褐色土、V層は黒褐色土、VI層は黄褐色土、VII層は暗赤褐色土、VIII層はシラスとなっている。ここは谷頭のため東西は弓状になっており、中央部は非常に厚い。土の流れ込みが強く、III層だけがめだつ。

遺物は古墳時代の成川式土器と石鏃が発見された。包含層はIII層であった。



松ヶ迫遺跡

17. 木屋原遺跡

木屋原遺跡は、始良郡溝辺町麓木屋原に所在し、鹿児島空港ターミナルビルより約300m西にある。

遺跡は十三塚原という標高200m～280mの台地上にある。この台地は行政区画上で溝辺町と隼人町に分かれている。この台地は南北12km、東西6kmでほぼ三角形をしている。この台地の性格はシラス台地とよばれる南九州特有のもので、地質学的には始良カルデラより噴出した入戸火砕流という火山灰が基盤となっている。

遺跡は論地部落の北にあり、その北東側には深さ15mの谷がある。谷は遺跡付近で北と東に分かれ北側の谷はゆるやかな傾斜をし、東側の谷頭は急である。遺跡は標高267m～268mの台地上で谷部に行くにしたがって傾斜している。また、北側には鹿児島空港が建設されている。

層位は、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ層が黒色土、Ⅲ層が黄褐色土、Ⅳ層が灰褐色土、Ⅴ層が黒褐色土、Ⅵ層が黄褐色軽石層、Ⅶ層が暗茶褐色土、Ⅷ層がシラス層となっている。Ⅲ層がアカホヤ火山灰で、Ⅳ層が薩摩火山灰である。

遺構は、Ⅵ層に直径10cm前後の石を20数個集めた集石遺構が2基検出された。遺物はⅤ層に前平式土器、Ⅳ層に石坂式土器、Ⅳ層上部に形式不明の貼り付け突帯付きの条痕文土器等が出土し、縄文時代の早・前期にあたる。また、石器としては石鏃が出土した。古墳時代の遺物としては成川式土器と須恵器が出土した。



木 屋 原 遺 跡

18. 山 神 遺 跡

山神遺跡は、始良郡溝辺町麓論地に所在し、鹿児島空港の約1200mの南に位置する。

溝辺台地は標高200～280mで、始良カルデラの北壁に連なるシラス台地である。東側は天降川により霧島山塊、西側は網掛川により蒲生地塊と切りはなされている。この台地上の20km²をこえる平坦面は十三塚原と称される地である。遺跡は、鹿児島空港が所在する十三塚原台地の西端部に近く、海拔256～258mの平坦な台地上の茶畑地帯である。

層位は、Ⅰ～Ⅴ層に分類され、Ⅰ層は黒ボクと黒ニガの2層に分かれる。黒ニガより土師器等が出土する。Ⅱ層は赤ホヤ層で縄文前期～後期の遺物が出土する。Ⅲ層（黒褐色粘質土）から縄文前期の貝殻条痕文土器が出土した。Ⅳ層は黄橙色含軽石層で無遺物層である。Ⅴ層は暗黒褐色粘質土で他の遺跡では細石器が包含されるが、本遺跡では確認しえなかった。

遺構は、溝状遺構・焼土・掘立柱建物跡・ピット群・集石が検出された。掘立柱建物跡は、2間×2間、2間×3間である。

遺物は、縄文式土器・石器・土製品・土師器・須恵器・青磁が出土している。縄文式土器は凹線文・岩崎下層式・市来式・貝殻条痕文・燃糸文・ヘラ沈線文等が出土している。石器には石匙・磨石・凹石・剥片・石鏃があり、土製品は土錘が5点出土している。土師器は、甕形土器・鉢形土器・坏が出土し、坏には墨書土器がある。須恵器は破片のみであるが甕が主をしめている。青磁は高台付碗の底部の破片である。



遺 跡 近 景 (南東から)

19. 曲 迫 遺 跡

曲迫遺跡は、始良郡溝辺町大字麓字曲迫に所在し、鹿児島空港ターミナルビルの南約 1,000 m の位置にある。

遺跡は標高 267 m のシラス台地に立地し、鹿児島空港の東南端から約 250 m 南に位置する。曲迫遺跡付近の地形は、溝辺台地の東側を流れる天降川にそそぐ小川があり、その小川の上流が遺跡近くまできている。遺跡は、その谷頭が円弧状にめぐりその中央部の台地にあたる。中央部の台地はこの附近で最も高く、「ケンツケ山」(関鶏山) と呼ばれる小高い所である。周囲は茶畑であり、谷には杉・桧が植林されている。

近くの遺跡としては、木屋原遺跡・山神遺跡・杵場遺跡・西免遺跡等がある。

本遺跡の地層は、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が黒色火山灰層(腐植土)、Ⅲ層が黄褐色火山灰層で通称アカホヤと呼ばれる層。上部は軟質で下部は若干硬質である。Ⅳ層は赤褐色軽石質火山灰土層でブロック状にみられる。Ⅴ層は灰褐色火山灰土層で、下部に至っては黒褐色を帯びてくる。Ⅵ層は黒褐色火山灰土層で、上部は灰褐色を帯びる。Ⅶ層は黄褐色軽石質火山灰土層である。Ⅷ層は茶褐色火山灰土層で腐植土である。Ⅸ層はシラス層である。Ⅲ・Ⅳ層が鬼界カルデラ噴出物のアカホヤ火山灰で、Ⅶ層が桜島噴出物の薩摩火山灰。Ⅸ層が始良カルデラ噴出物の入戸火砕流にあたる。

遺物はⅢ層に縄文後期初頭の岩崎上層式と石鏃・石匙が出土し、Ⅱ層にも石鏃がみられた。他に表層直下に成川式土器や内黒土師器が出土した。



曲 迫 遺 跡

20. 柵 場 遺 跡

柵場遺跡は、始良郡溝辺町麓柵場に所在し、現在の溝辺インターチェンジの場所である。

溝辺台地は標高200～280mの始良カルデラの北壁に連なるシラス台地である。東側は天降川により霧島山塊、西側は網掛川により蒲生地塊と切りはなされている。この台地上の20km²をこえる平坦面は十三塚原と称される地である。遺跡は、鹿児島空港が所在する十三塚原台地の西端部に近く、海拔256～258mの平坦な台地上の茶畑地帯で山神遺跡の南側に立地する。

層位は、Ⅰ～Ⅵ層に分類され、Ⅰ層は耕作土で黒色火山灰土層、Ⅱ層は黄褐色土層で通称赤ホヤと呼ばれるものである。遺物は縄文時代中期～後期のものが出土し、最上部からは成川式土器が出土した。Ⅲ層は黒褐色粘質土層で上部に縄文時代前期の塞ノ神式土器が出土した。Ⅳ層は黄橙色含軽石層で無遺物層である。Ⅴ層は暗黒褐色粘質土で他の遺跡では細石器文化の遺物が包含されるが本遺跡では確認し得なかった。Ⅵ層は茶褐色火山灰層で基盤であるシラスの上であり、遺物は見られなかった。

遺構は検出出来なかった。

遺物は縄文式土器・成川式土器・石器が出土している。縄文式土器は、岩崎下層式・凹線文土器・指宿式と塞ノ神B式が出土している。石器は、磨製石斧・石鏃が出土し、土錘も出土している。成川式土器は、甕形土器と壺形土器が出土している。甕形土器は完形品が1点、壺形土器は口縁部を除きほぼ完形に復元できたものが1点出土している。



遺 跡 近 景 (南から)

21. 西 免 遺 跡

西免遺跡は、鹿児島県始良郡隼人町西光寺字西免に所在し、鹿児島空港の南約1.5kmのところにあり、十三塚原台地が東・東南方向に傾斜しはじめる台地の縁辺部にある。周辺はすべて畑地として利用されており、茶の栽培が盛んである。

土層は、Ⅰ層が表土で黒色火山灰土、Ⅱ層がⅡ a 層の黄褐色土とⅡ b 層の黄褐色バミス土である。Ⅱ層は赤ホヤ火山灰土に比定されるものである。Ⅲ層が黒褐色粘色粘質土、Ⅳ層が黄橙色含軽石土、Ⅴ層が暗黒褐色粘質土である。Ⅵ層は桜島が噴出源とされている。

遺物は、Ⅱ層の最上部から古墳時代に属する成川式土器の甕形土器・壺形土器が少量出土した。石器は出土しなかったが、Ⅴ層から黒曜石片5点、玉髓片1点を出土し、旧石器のローム層としてとらえる発端となった。

遺跡は、機械力による大規模な開墾等がなされており、遺構・遺物等皆無の状況であった。



西 免 遺 跡

22. 中 尾 遺 跡

本遺跡は隼人町西光寺中尾にある。十三塚原の台地を横断し、西北から東南に県道論地一糸走線が走るが、その中央部から南西方向へ農道を約500mたどった地点である。遺跡は北側を南西方向に走る農道でくぎられている。この農道は標高264m線にそっており、ここから北方へはほぼ平坦な台地をなしており、鹿児島空港を遠望できるが、南方へは5～6mの比高差で急に下がり、あとやや低平となる。

層位はⅦ層まで確認した。Ⅰ層は黒色火山灰層、Ⅱ層は褐色粘質層で下位に土師式土器を出土した。Ⅲa層は黄褐色（軟質土）上部に成川式土器出土、Ⅲb層は黄色（硬質土）上部には縄文後期土器出土、Ⅲc層は黄褐色パミス層、Ⅳ層は黒色粘質層、Ⅴ層は黄褐色パミス層、Ⅵ層は黒褐色粘質ローム層、Ⅶ層はシラス層。

遺構として焼土面とピットがみられた。焼土面は長径12m、短径5～6mと不定形をなす。Ⅲa層内に約10cm入ったところで、灰層10cm、下位に赤褐色の固い土が1～2cm重なる。焼土面内外に成川式土器の小片が少量と須恵器片1点が発見された。ピットはA・B共に直径約50cmの略円形、深さ80cmで、周辺部の土が赤褐色に焼けて固く、また木炭片やその粒子が散在していた。

遺物は成川式土器が多く出土した。縄文式土器は条痕文・ヘラ描沈線文などが少量出土した。須恵器片、内黒土師器の碗、坏、把手等もみられた。石器として石斧、打製石鎌、磨製石鎌などがある。

なお、成川式土器の出土状況から、同一期と思われるピットA・Bの焼土による放射性炭素年代測定結果によると、ピットAでAD 500、ピットBでAD 620と出ており、成川式土器の下限の問題に貴重な資料となった。



中 尾 遺 跡

23. 入 道 遺 跡

入道遺跡は、鹿児島県始良郡準人町西光寺入道に所在し、鹿児島空港の南約3km、南十三塚原台地が南へ緩傾斜していく標高約260mのところに所在する。

周囲は、ほとんどが畑地として利用されており、水田は台地縁辺部の開析された谷等にわずかに存在するだけである。

土層は、Ⅰ層が表土で旧耕作土、Ⅱ層が黒色火山灰土層、Ⅲ層は上部(Ⅲa層)が褐色土層、下部(Ⅲb層)は黄褐色土層、最下部(Ⅲc層)には黄橙色のパミスがブロック状にみられる。このⅢ層は赤ホヤ火山灰層に対比されるものである。Ⅳ層は黒褐色粘質土層、Ⅴ層が黄橙色含軽石層で、Ⅴ層は桜島に噴出源を求められるものである。Ⅵ層は暗茶褐色粘質土、Ⅶ層が茶褐色粘質土、Ⅷ層が暗茶褐色粘質土、Ⅸ層が黄褐色シラス土である。

遺構は、溝状遺構が5本、古道跡と考えられるもの5本、ピット群が検出された。このうち溝状遺構と古道跡と考えられるものはⅢ層に掘り込まれ、覆土はⅡ層であった。耕作等により保存状況が必ずしも良いとはいえず、その性格等を把握するまでには至らなかった。ピット群も建物跡として確認することができなかった。

遺物は、Ⅲa層から、当遺跡での主体をなす成川式土器片が散布状態で出土した。甕形土器、壺形土器、高坏等の他、須恵器の甕を模したと思われる丹塗りの土師器の甕が出土した。

その他、Ⅲb層から縄文時代後期の底部と考えられる底部片が数点出土しているが、石器等は出土しなかった。



入 道 遺 跡

24. 南十三塚遺跡

本遺跡は溝辺町崎森南十三塚にある。東方は隼人町に接する。南は東西方向に走る県道崎森隼人線が、立岩部落で南走する。北方に展開する十三塚原台地は、波状を呈しながら南方へ緩傾斜する。遺跡は、その南端部に当たり、標高約240mである。北東から南西へなだらかなスロープをなし、西方30mで浅い迫を北から南へ形成する。

層位はⅠ層～Ⅺ層まで確認した。西方A・B区ではこの上にさらに二次的な流土が厚く堆積していた。Ⅰ層は黒色火山灰層、Ⅱ層は黄褐色土層（アカホヤ）上部は軟質で下部は硬質である。Ⅲ層は黝黒色粘質土層で縄文早・前期の包含層と思われるが、遺物の出土はなかった。Ⅳ層は黄褐色パミス層、Ⅴ層は黒褐色粘質層、Ⅵ層は褐色シラス層、Ⅶ層は砂礫層、Ⅷ層はピンクシラス層。

遺構は確認されなかったが、遺物は少量出土した。いずれも小片であり、地表面ないしⅠ層中に出土した。平椀式土器片1、貝殻腹縁部による刺突文土器1、他に成川式土器である。

1. 現地形は北東から南西になだらかなスロープをなして傾斜しているが、本来は急傾斜をなし、西方は細く浅い谷部となっていたと思われる。
2. A・B区は1.5～2mの厚さの埋土が見られ、また、東方E～I区は深く削平がみられる。昭和39年の土地改良事業等によって、地面の平坦化が行われている。
3. 包含層と推定される層は、ほとんど消滅ないし攪乱を受けていたが、縄文式土器・成川式土器が少量発見されており、近くに遺跡の主体部の残存する可能性もある。



南十三塚遺跡

25. 東 原 遺 跡

東原遺跡は始良郡溝辺町崎森東原に所在し、県道崎森・隼人線の立岩バス停より南に約100mの位置にある。

遺跡は、十三塚原という標高200～280mの台地の西南端部に立地している。十三塚原の台地はシラス台地で南九州特有の台地である。このシラスは今より20,000～22,000年前の始良カルデラ形成時に噴出した入戸火砕流である。シラスは水に弱く各地に浸蝕崖を形成している。浸蝕崖の下には小川が流れ水田のあるところもある。小川は浸蝕・蛇行しながらシラス台地を舌状にしている。東原遺跡は北側と南側に谷がみられる舌状台地に立地している。

東原遺跡の附近は北に立岩、南に桑ノ丸という集落があり、東側は広大なシラス台地となり、遺跡は標高215m～235mの高さにある。

土層は、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ層が黒色火山灰層、Ⅲ層が黄褐色火山灰層、Ⅳ層が灰褐色粘質火山灰層、Ⅴ層が黒褐色粘質火山灰層、Ⅵ層が軽石層、Ⅶ層が極暗赤褐色粘質火山灰層、Ⅷ層がシラス層となっている。(Ⅲ層がアカホヤ火山灰、Ⅳ層が薩摩火山灰である。)

遺構としては住居址が1基、Ⅲ層中に検出された。その規模は4.5m×4.9mの略正方形に近い竪穴住居で壁面は深いところで約30cm浅いところで約10cmである。この住居址の主柱は6本で他に補助柱が数本みられる。中央部は浅く広くくぼみ、炉床や煤がみられた。また南隅には185cm×85cm～98cmの台形で深さ40cm～50cmの掘り方が検出された。この住居址の遺物は成川式土器で甕形土器、壺形土器、高坏形土器、小形丸底土器、鉢形土器が出土し、古式土師器の時期のものであろう。

遺物としては、Ⅲ層中より成川式土器や縄文晩期・中期、Ⅳ層下部に縄文早期の石坂式土器が出土した。Ⅴ層には縄文早期の条痕文土器が完形で出土した。石器としては、Ⅳ層とⅤ層に石鏃が三本出土した。



東 原 遺 跡

26. 桑ノ丸遺跡

1. 位置・環境

桑ノ丸遺跡は、始良郡溝辺町大字崎森字桑ノ丸に所在する。桑ノ丸は溝辺町の南部にあたる。このあたりは台地が火口壁を経て鹿児島湾に至る地域で、小河川による台地の開析谷が形成されている。そのために台地はえぐられて舌状の台地が谷と交互に位置するといった地形をなしている。

桑ノ丸遺跡は標高約210mの西面する舌状台地にあり、南側を桑ノ丸川、西側を立岩川が流れている。川との比高は約35mを測る。南側はやや緩やかな傾斜であるが、北側は急傾斜となっている。台地の基部はやや平坦となり、西北の十三塚原台地へとつづく。台地面は現在畑となっており、各畑ごとに段があるが以前は平坦であったものと思われる。遺跡の北側約400mには、縦貫道関係で調査され、縄文時代早期、古墳時代の遺構・遺物が確認された東原遺跡が所在する。

2. 層位

層位は、Ⅰ層が黒色火山灰土、Ⅱ層が黄褐色火山灰土、Ⅲa層が青灰色火山灰土、Ⅲb層は乳白色火山灰土、Ⅳ層は黒色火山灰土、Ⅴ層は茶褐色粘質土(ローム質)、Ⅵ層はシラスが観察される。また部分的な地層横転が2ヶ所において認められた。

3. 遺構

遺構は縄文時代早期のものとして、落ち込みと集石が検出された。落ち込みは径80～90cmで4ヶ所あるが、遺物は認められない。集石は2ヶ所が検出された。Ⅱ層上面においては歴史時代のピット群が検出された。ピットは径15～30cmであるが、不規則で建物跡等を想定出来るものではない。ピット検出面と同じ面で焼土も見られる。又、近世墓66基と、それに伴う古道も検出された。

4. 遺物

遺物はⅢb層より縄文時代早期の吉田式土器・前平式土器(桑ノ丸遺跡で最も多く出土したもので、円筒土器・角筒土器とが見られる。)円筒形土器で貝殻状の施文具で櫛描き状に沈線文を施すもの、押型土器等が出土する。Ⅲa層より縄文時代前期の平椀式土器、塞ノ神A式土器、塞ノ神B式土器が出土する。Ⅱ層より縄文時代前期の轟式土器、縄文時代中期の阿高式土器、縄文時代後期の指宿式土器、西平式土器、三万田式土器が出土する。Ⅰ層より、古墳時代の成川式系土器、奈良・平安時代の土師器、須恵器、近世墓に伴う近世陶磁器が出土する。

石器は、縄文時代の石鏃、石匙、スクレイパー、石斧、磨石、凹石、敲石、弥生時代の磨製石鏃等が出土する。石器の中では、吉田式土器、前平式土器に伴って出土する石ケン状磨石が数点出土していることが特徴づけられる。

5. むすび

桑ノ丸遺跡においては、縄文時代早期・前期・中期・後期の土器、石器、弥生時代の石器、古

墳時代の土器、奈良・平安時代の土師器等と長期間にわたっての遺物が認められ、生活の場としての条件の良さがうかがわれる。特に縄文時代早期の前平式土器は出土量が多く、貝殻文系の円筒土器・角筒土器の完形品が検出されたことと、貝殻状の施文具により櫛描き状に沈線を施す今まで見られなかった土器群も認められ、縄文時代早期の好資料を提供した遺跡である。



桑ノ丸遺跡



調査風景

27. 三代寺遺跡

1. 位置

三代寺遺跡は、始良郡加治木町大字日木山字三代寺に所在し、国鉄日豊本線の加治木駅より北へ約1kmのところにある。

2. 環境

加治木町の市街地の地にひときわ高くそびえる安山岩で形成された円錐形の「蔵王岳」がある。この蔵王岳の麓に三代寺遺跡がある。

遺跡は標高40mの傾斜面に立地し、遺跡の眼下には日本山川が蛇行しながら南流して錦江湾に注いでいる。また、遺跡は網掛川や別府川によって形成された沖積地を一望される好位置にある。また、近くには日本山洞窟があり、昭和12年8月に樋口清之・乙益重隆氏らによって調査がおこなわれている。

3. 遺構・遺物

遺跡の層位は、Ⅰa層が暗褐色火山灰層、Ⅰb層が灰白色火山灰層、Ⅱa層が黄褐色ローム層、Ⅱb層が軽石層、Ⅲa層が黒褐色ローム層、Ⅲb層が黄褐色ローム様火山灰層、Ⅲc層が軽石層、Ⅳa層が暗黒褐色・チョコレート色ローム層、Ⅳb層が褐色ローム層となっている。その中で文化層はⅠb層とⅢa層である。

遺構としては、Ⅰb層の中世の柱穴群と土塚がⅡa層に検出された。柱穴群は300以上のものぼり、土塚は4基であった。その中で建物と想定されたのは東西3間～5間、南北2間～3間の構築物である。土塚は4基検出され、133cm×70cmの長方形で、深さ20cmの規模のものが定形で、他は不定形の土塚であった。遺物は少なく、埋土中に白磁の小皿1点のみ出土した。

また、Ⅲa層中にも集石遺構5基が出土している。10cm前後の円礫を主体に径40cm～160cmで円形に集めた遺構である。石材は安山岩が多く、そのなかには熱を受けた痕跡が認められるものもある。

遺物は中世から古墳時代のものと縄文時代のものが出土している。中世のものは青磁、白磁、土師器、備前焼が出土し、古墳時代のものは須恵器、成川式土器が出土した。

縄文時代の遺物は、晩期と早期が出土している。晩期該当は晩期Ⅰ式の土器が出土した。前期は塞ノ神B式土器、塞ノ神A式土器、早期は桑ノ丸遺跡3類、前平式土器、吉田式土器、石坂式土器、押形文土器や条痕文土器等形式不明の土器が他に少々出土した。

塞ノ神B式土器は本遺跡の中心的な遺物である。器形は口縁部がく字状に外反するものと、口縁部が直口した筒状口縁をもった円筒土器の二形式が見られる。文様は貝殻縁による刺突連続文と沈線文（貝殻文を含む）の組み合わせである。底部は平底をなす。

押型文土器は口縁が外反し、底部は丸底がみられる厚手の土器である。文様は山形押形文と楕円押形文がある。

石器は石鏃、石匙、局部磨製、磨製石斧、槌石、凹石、石皿、黒曜石製の剥片石器が出土し

た。石斧は長さ5cmの小形のものから15cmの大形のものまで13点出土している。石皿は5点出土しているが完形は長さ40cm位のもので1点である。黒曜石製の石器は大形剥片石器をはじめ加工痕のある剥片や使用痕のある剥片、円盤状剥片が出土している。他に剥片や石核、残核は多数出土した。なお、黒曜石は1900点にもものぼる量であった。

4. むすび

本遺跡の縄文土器は多種にわたっている。押型文土器や石坂式土器・塞ノ神B式土器がみられるが、中心となる文化は塞ノ神B式土器のものである。塞ノ神B式土器は貝殻文と沈線文で文様は構成され、器形は口縁部が朝顔状に頸部から外反し、底部は平底をなす土器である。本遺跡では今までみられた口縁の外反する土器のほか筒状の円筒土器が出土したことである。

その後、同じ様な塞ノ神B式土器の出土する文化層は加治屋園遺跡にもみられ、加治屋園遺跡では7550±130 YBPの年代が出ている。この様に三代寺遺跡は早期から前期初頭にかけての代表的な遺跡である。



三 代 寺 遺 跡

28. 建馬場遺跡

建馬場遺跡は、鹿児島県姶良郡加治木町反土建馬場に位置している。遺跡は加治木町の市街地はずれ、網掛川と日本山川とに取り囲まれた標高約12mの台地縁辺部に位置し、東側日本山川寄りを県道栗野・加治木線が走り、さらに日本山の山麓には、冠形の円錐丘を呈した安山岩で形成されている加治木町のシンボル蔵王岳が高くそびえている。西側は網掛川が蛇行して流れ、その流域は広く分布する水田地帯となっているが、最近では町営住宅等の建設に伴い宅地化の波が押し寄せている。北側には本遺跡との比高差が約60m以上の急崖がせまり、舌状台地となり、旧加治木城の跡が所在し、遺跡地より約550mの所に、竜門ノ滝があり、加治木町の名所のひとつに数えられる。南側は市街地を隔てて鹿児島湾となり、網掛川や日本山川が流入する。

土層は本遺跡が沖積平野の一隅に位置し、網掛川や日本山川等の氾濫や水蝕を含めた堆積地のためか砂混りの黄褐色砂層で、その下層は小石、軽石、パミスなどの混在した黄色砂層を呈している。各地区とも何んらかの影響を受けており、遺物包含層をつかむことはできなかった。しかし、第Ⅲ地区の一部で遺物包含層が認められたものの遺物は混在して出土した。

遺物は第Ⅲ地区の一部地区より成川式系土器の甕形土器・壺形土器・高坏・手捏土器、土師器、須恵器、陶磁器（青磁・白磁・近世磁器）などの遺物の混在が認められ、特に成川式系土器を中心とした土器溜まりの状態の小破片が多量に出土した。このようなことから、この台地縁辺に位置する遺跡は、洪水などの氾濫や水蝕により、殆んど滅失しており、僅かに第Ⅲ地区の一部に、その痕跡をとどめているにすぎない。



建馬場遺跡

29. 松木田遺跡

松木田遺跡は、鹿児島県始良郡始良町鍋倉松木田に所在している。遺跡は始良町の市街地はずれ、別府川や思川により形成された始良平野の北東縁辺部を開析する別府川北岸にそった鍋倉の東端近くで、標高約10mの畑地に位置している。遺跡の南側は標高約39.6mの凝灰岩の山を隔てて県道下手山田・加治木線が別府川沿いに走り、東部及び北部は標高約50～100mの山間部で加治木町との行政区画区域となっている。西部は標高約50mに及ぶ凝灰岩の山が急崖をなし、その山麓下には、蓬来山天福寺跡や鍋倉洞窟遺跡が知られ、さらに西方は、別府川北岸に所在する集落地となっている。

土層はⅡ層上部まで大幅な削平が見られ、Ⅰ層は灰褐色砂層で耕作土となり、Ⅱ層は黄褐色砂礫層であり、本遺跡の遺物包含層と思われる黒色砂質層はⅡ層の上位層で柱穴の埋土において見られたものの、全域が削平されており包含層は確認されなかった。

遺構は、Ⅱ層黄褐色砂礫層上部にくい込んだ柱穴が検出された。柱穴の埋土は黒色砂質層であり、黄褐色砂礫層まで削平された個所が多いため22個所の柱穴が確認されたが、いずれかの時代のものか判断することは出来なかった。

遺物は、耕作層からの出土がほとんどで、成川式土器・土師器・現代陶器が少数出土し、柱穴と思われる遺構の埋土中より滑石製管玉1点が出土した。



松木田遺跡

30. 小瀬戸遺跡

1. 位置

小瀬戸遺跡は、鹿児島湾奥の始良郡始良町西餅田字小瀬戸に所在する。この地は国鉄帖佐駅の北西約1kmの地点にあたる。

2. 環境

遺跡の所在する始良町は、思川・別府川によって形成された沖積平野が、鹿児島湾に添って約2km幅で開けた平野部と、標高約100m～200mのシラス台地となる山地部からなり、この間に各河川によって形成された開析谷と谷間の平地が、北方にわずかに開ける。

遺跡はシラス台地の通称城山の裾野から南へ突出した標高約11m余の微高地である。この微高地は遺跡のあたりで枝状に西に張り出し、東部を除く三方は比高約1m～2mをもって水田地帯となる。

3. 層位

I層は灰褐色を呈し、やや砂質みである。土層は約20cm～40cm内外となり、ほぼ水平に堆積する。II層は黒色を呈し、砂質みである。I層と同様にほぼ水平に堆積し、層の厚さは約20cm～40cmを測る安定した層序を示す。このII層が本遺跡の遺物包含層で、土師器、須恵器、青磁等の遺物が出土する。III層は砂質のシラス土層を基調とするが、バミス、黄褐色土が混りあう地点もみられる。遺構のすべてはこの層の上面で検出された。



小瀬戸遺跡

4. 遺構

遺構は建物跡、ピット群、溝状遺構、井戸が検出された。建物跡は遺跡の北西部に2間×3間のものが2基復元できた。

ピット群は遺跡全域に検出されたが、建物跡等復元するには至らなかった。ピットは径20cm～40cm、深さ20～50cmを測り、平面形は円形を呈する。ピット中には根石と思われる安山岩質の角礫を置くものも見られた。また、ピット中には土師器、須恵器、瓦片等が埋土とともに出土した。

溝状遺構は15条検出された。このうち東西に走るもの3条、南北に走るもの12条で、圧倒的に南北に走る溝が多い。溝状遺構のうち、東西・南北が交叉するものが2カ所あり新旧が確認できたが、遺跡全体の中での区割り等については明確にできなかった。

溝状遺構は幅20cm～40cm、深さ10cm～50cmを測り、断面U字形を呈する。遺構の性格については、C・D-Ⅳ区に検出された井戸に先端が連結すること、縦断面のレベル観察によると、先端部が遺跡中央にあり、末端はレベルが下りつつ遺跡外へ延びることなどから、排水溝としての機能が考えられる。

井戸は遺跡中央部、北西部に各1基検出された。このうち中央部の井戸には、直経約80cmの広葉樹を半栽し、のち内部をくり抜いたもの2枚を合わせ井戸枠としたもの、その中には、くり抜いて作った木製容器1点出土した。また、埋土中より土師器、須恵器、瓦等とともに、モモ、ウメ、イチイガシ、ヤブニッケイ、ヒョウタンの種子が出土した。

5. 遺物

遺物はⅡ層を中心に遺跡全体に出土した。遺物は土師器(甕・埴・鉢・坏・皿・蓋)、瓦器質土器、内黒土師器、須恵器、青磁、白磁、緑釉陶器、瓦、土錘、紡錘車のほか、縄文時代後期及び晩期、弥生中期の土器が少量出土した。土師器(坏・皿)は1点の糸切底を除きすべてへら起しであり、「仲家」、「大伴」、「原」、「雄」、「判」等の墨書、刻書土器があり注目される。また、緑釉陶器の底部内には「伴家」と針書されている。

瓦は丸瓦・平瓦の類で、本遺跡の北方約2kmの所に所在する宮田ヶ丘窯跡採集瓦と酷似し、関連がうかがわれる。しかし、瓦の相対量は少なかった。その他の出土遺物として、ピット中に土製土馬が出土したほか、製作技法から肥後地方の須恵器に類似する須恵器類も出土した。

6. むすび

以上のことから本遺跡は奈良時代末期～平安時代にかけての、地方官衙的な要素の強い生活址の遺跡であることが判明したが、当該時代の研究は緒についたばかりで、今後の研究成果に待つところが大きい。

いずれにしても、多量の墨書、刻書土器、緑釉陶器、土馬等の出土は注目されるであろう。

31. 小 山 遺 跡

1. 位 置

小山遺跡は、鹿児島市の北部に隣接する鹿児島郡吉田町東佐多浦字小山に所在する。

2. 環 境

遺跡の所在する吉田町は約80%が山林の町である。平野は始良町を経て鹿児島湾に注ぐ思川によって形成された小平野が東部、西南部には鹿児島市を経て鹿児島湾に注ぐ稲荷川の上流、流域にわずかな水田地帯が開けるのみである。

このうち小山遺跡の所在するところは、三方を山に囲まれた標高87m～89.5m、幅は広い地点で120m、狭い地点では40mにも満たない谷底平地である。視界は東側にわずかに開けるがこれとても谷底平野部分のみで、これが切れると再び谷川のある山狭となる。

3. 層 位

本遺跡の層位は、Ⅰ層～Ⅵ層まで確認した。Ⅰ層は灰褐色ないし黒褐色を呈し30cm～80cm堆積する。Ⅱ層は黒色の砂質ぎみで10cm～30cmの厚さで堆積する。Ⅲ層は橙色および黄褐色を呈し「赤ボッコ」と通称する層である。Ⅳ層は青灰色を呈し粘質の土層で40cm～50cm堆積する。Ⅴ層は黒褐色を呈する粘質の土層で20cm～40cmの堆積を示す。Ⅵ層は黄褐色パミス層で本遺跡の基盤層となる。



小 山 遺 跡

4. 遺 構

遺構は、縄文時代早期の吉田式土器に伴う集石10基、前期の塞ノ神式土器に伴う集石12基が検出された。早期の集石は拳大を中心にした安山岩礫を使用し、粗な集石である。これに比較して前期の集石は礫数も多く、まとまりの良い集石が多い。

歴史時代では遺跡の西側に礫列、南側にピット群が検出された。

5. 遺 物

本遺跡の主体をなす遺物は、IV層の縄文前期の塞ノ神A a式、塞ノ神A b式。V層出土の縄文時代早期の吉田式土器である。

これらのほか、縄文式土器では石坂系土器、円筒形条痕文土器(早期)、轟式土器、深浦式土器、春日式土器(前期)、岩崎上層式土器、指宿式土器(後期)、晩期の土器も出土した。

石器は、石鏃、特殊石器、石匙、スクレイパー、剥片石器、削器、磨石、石皿等が出土した。歴史時代では、土師器(埴、坏、皿)、須恵器、青・白磁、こうがい、台座等の出土をみた。

6. むすび

平地の幅約100mという谷底状の平地に、縄文時代早期から晩期、そして歴史時代と人々の生活は続いた。その間、縄文時代早期と前期は本遺跡が盛行した時期である。

また、多量の遺物の出土にも関わらず、住居址の発見がなかったこと、石斧の出土がなかったことなどから、本遺跡は定住地とは考えにくい。

さらに、歴史時代の遺物の出土は、現在、口伝1つもない当地に、寺院等の存在が考えられることなどが注目される。



縄文時代前期集石群

32. 谷ノ口遺跡

谷ノ口遺跡は、鹿児島県鹿児島郡吉田町本城谷ノ口に位置している。遺跡は、吉田町のほぼ中央部に位置し、本名川により形成された河岸段丘上の畑地に位置している。遺跡の北部から西部・南部にかけては、本名川が蛇行しながら流れ、その両岸に立地する水田地帯とともに遺跡を取り巻くような地形を呈している。北西部約500mの所には本城小学校、吉田町役場が所在し、その役場の南側沿いを本名川が流れ、その周辺は水田地帯となっている。東部は標高20.9mの山が遺跡地までせまっている。遺跡地の周辺には民家が点在し、民家に隣接した標高約138.6mの畑地が本遺跡である。

土層はⅣ層まで確認される。Ⅰ層は褐色土層、Ⅱ層は黄褐色土層で、その大半は削平され、また、攪乱をうけている個所が随所に認められる。Ⅲ層は黒褐色粘質土層、Ⅳ層は黄褐色パミス層である。

遺構は、Ⅲ層黒褐色粘質土層上面に柱穴と思われる掘り方が14箇所検出されている。柱穴の規模は長径32cm～70cm、短径20cm～42cm、深さ20cm～58cmの範囲内のものである。柱穴の埋土は、Ⅱ層黄褐色土で、Ⅳ層やⅤ層まで掘り込んでいた柱穴も認められた。柱穴の時期は、遺物包含層と思われるⅡ層黄褐色土層が攪乱を受けているため時期を明らかにすることは出来なかった。

遺物は、Ⅱ層より現代陶器、縄文式土器、成川式系土器、土師器、白磁、滑石製石鍋などの遺物が混在して出土した。



谷ノ口遺跡

33. 上 城 城 跡

上城は、鹿児島郡吉田町大字本城、町役場の南約500mに所在する。

城址遺構は、南より北に突き出た半島状台地に占地している。

当城で最も明確に築城遺構を遺しているものに、馬乗り馬場と称する腰曲輪。1.5m～6mの段差をもって階段状に削平した平坦部などである。

また、台地基部はピワンコン瀬戸と呼称される深さ約12m、底幅5.5mの瀬戸道は空堀の可能性も強い。しかし、現地踏査のみであるために、全体の形状は不明である。

採集された遺物は、越州窯系、竜泉窯系の青磁片と、すり鉢等の雑器類である。

なお、当城は吉田氏一族中納氏のものであると考えられている中世山城である。

九州縦貫自動車道建設に伴い、現地踏査が行われたが、路線は遺跡の先端部をよぎるのみであったため、発掘調査は実施しなかった。このため遺跡のほとんどは現在する。



上 城 城 跡

34. 宮 後 遺 跡

宮後遺跡は、鹿児島県鹿児島郡吉田町宮之浦宮後に位置している。遺跡は、吉田町の南部地区に位置し、飯山・大原・石下谷からのびるシラス台地縁辺部（舌状台地）の切れる先端部付近で、楢木川により形成された河川段丘上の畑地に位置している。遺跡地の西部は八幡神社の敷地に相接し、台地縁辺部を県道鹿児島・蒲生線が通っている。北部及び東部は、楢木川や牟礼谷川によって形成された河岸段丘上は水田地帯となり、さらに、東部は馬場園の集落地となっている。南部は、町道牟礼谷・宮之浦線がとおり、楢木川によって形成された河岸段丘上は水田地帯となり、楢木川が鹿児島市との行政区画区域となっている。

土層はV層まで確認された。I層はa・bとに分けられ、aが褐色土層、bは灰褐色土層でaは現耕作面と考えられ、bは開墾前のものと思われる。II層は赤褐色粘土層で酸化鉄を多く含み田んぼの基盤層と思われ、以前は水田として使用されたものと考えられる。III層は黒色土層で、第III地点の一部だけに認められる。IV層は黄褐色パミス層で、V層は黒褐色土層である。

本遺跡においては、遺物包含層は確認されず、攪乱部分より縄文式土器・土師器・現代陶器が混在して認められ、第II地点のIIIから硬玉製丸玉が出土した。縄文式土器は黒色研磨土器で、硬玉製丸玉も縄文晩期に属するものと思われる。土師器は皿と碗の二種類が出土し、糸切底は平安以降のものと思われる。



宮 後 遺 跡

35. 木の迫遺跡

木の迫遺跡は、鹿児島市川上町花棚字木の迫にあり、鹿児島市街地の北方約 77 kmの所に位置している。

遺跡の基盤は鹿児島県本土をほぼおおっているシラス台地である。本遺跡のシラス台地は川上町および吉野町を中心とした標高 200～260 m の東から西へ傾斜したところである。遺跡は楢木川の侵食によって 150～160 m 級の台地に形成されたシラス台地の西端にあり標高 162 m の河岸段丘の畑地に立地している。

層位は、地表面から約20～30cmに表層の耕作土があり、基盤層であるシラスが耕作土直下にみられる。遺跡の東側には攪乱層がみられ、礫混じりの黒色土や礫混じりのシラス層が観察される。

遺物は原位置を示す出土はなかたつたが、耕作土と攪乱層（礫混じり黒色土・シラス）から縄文式土器・土師器・須恵器・青磁・染付などが礫と混じりあいながら出土した。また、表層より磨製石斧が出土した。縄文土器は貝殻条痕文を施した土器で、土師器・須恵器等全て破片であった。これらは遺跡地に遺物の包含層があったが、畑地等により包含層が削平されたものと思われる。

36. 加 治 屋 園 遺 跡

1. 位 置

加治屋園遺跡は鹿児島市川上町加治屋園に所在し、川上小学校より約700m北に位置している。

2. 環 境

遺跡のある川上町は鹿児島市の市街地より約6kmにあり、近くには緑ヶ丘団地が対面にみえる。遺跡の基盤は南九州特有のシラス台地であり、遺跡はこの台地の舌状部に立地している。この台地は川上町、吉野町を中心とする広大な台地で標高200m～260mの高さである。このシラスは、錦江湾奥部の始良カルデラ形成時に噴出した火山灰で入戸火砕流と呼ばれている。加治屋園遺跡は入戸火砕流が形成されたあと、精木川の浸蝕により150m級の舌状台地に形成されたとみられる。下部には砂礫層を中心とした水成層があり、そのことを立証させる資料となっている。なお、入戸火砕流は今から約20,000～22,000年前といわれている。

3. 遺 構 ・ 遺 物

土層はⅠ層からⅫ層までみられ、Ⅰ層は表層、Ⅱ層は黒褐色層で腐植土層である。Ⅲ層はボッコ層でa・b・c、Ⅳ層は軽石層でa・b、Ⅴ層は青灰色層でa・b、Ⅵ層は黒褐色層でa・b、Ⅶ層は軽石層でa～d、Ⅷ層は茶褐色層でa～g、Ⅸ層は軽石層と砂層の互層でa～g、Ⅹ層は白粘土とシラス質土の互層でa～eにそれぞれ細分され、Ⅺ層は砂礫層、Ⅻ層はシラス層となっている。Ⅳ層がアカホヤ火山灰層であるが一次的な火山灰は良く残っていなかった。Ⅶ層が桜島噴出物の火山灰で最近薩摩火山灰と町田洋氏により命名され、今から約10,000年前の火山灰・軽石層である。

包含層はⅢa層・Ⅲc層・Ⅴa層・Ⅷb層であり、Ⅲa層は縄文後期・中期の遺物を含み、Ⅲc層は縄文前期、Ⅴa層は縄文前期の遺物を含んでいる。また、Ⅷb層は先土器時代の遺物が多量に出土した。なお、Ⅲa層には古墳時代の遺物も若干含まれた。

Ⅲa層は西平式土器・指宿式土器・岩崎式土器・並木式土器が出土し、Ⅲc層には轟式が出土した。Ⅴa層には塞ノ神B式土器が主に出土し、円筒土器と口縁部が「く」の字状に外反する器形がみられた。

遺構はⅢc層に集石遺構2基、Ⅴa層に7基検出された。この集石は10cm前後の円礫を径1m前後に集めて、若干木炭や煤等がみられる遺構である。Ⅲc層の¹⁴C年代は5020±105YBPでⅤa層の¹⁴C年代は7550±130YBPの年代がみられる。

Ⅷb層は主に黒曜石と頁岩（凝灰岩質頁岩を含む）の2つの種類の石材を利用した石器が多数出土した。黒曜石は細石刃核、細石刃、ブランク、使用痕のある剝片、搔器、削器、彫刻刀、ドリル状石器、剝片等が出土した。凝灰岩質頁岩は鹿児島市の北側の鹿児島郡吉田町から薩摩郡入来町にいたるまで分布する永野層といわれる堆積岩である。火山灰等が沈澱してできたといわれている。この石は盤状に剝げる性質をもっているため扁平な石になる。加治屋園で発見

された細石刃・細石刃核はこの石材を利用している。先づ扁平な石を分割して、3～6cm位の適当な大きさのブランクをつくり、分割面を打面として細石刃を剝離していく簡単な技法をつかっている。この細石刃核やブランクは接合される資料が多い。また、砂岩や頁岩も同様にして細石刃剝離を行なっている細石刃核もみられる。

また、この層には粘土紐を口縁部に貼り付けた隆線文土器と無文土器片が114点出土した。

4. むすび

加治屋園遺跡は、層位的に先土器時代から縄文時代・前期・中期・後期・古墳・歴史時代と、下部から上部にみられる。また、これらの文化層はアカホヤ火山炭、桜島より噴出した薩摩火山灰など火山灰で分けられ、土器編年に役立つ資料を提供している。

先土器時代の遺跡は県内でも少なく、隣の加栗山遺跡をはじめ上場遺跡・石峰遺跡等10数例みられるだけである。また、土器の出土した遺跡はなお少ない。本遺跡は石器の種類が多いのも一つの特徴である。細石刃核にしても黒曜石と頁岩類とがあり、黒曜石は舟野型と矢出川・野岳型を呈し、頁岩類は石材上側面調整のいらぬもので加治屋園遺跡独特の技法がみられる。

縄文時代は塞ノ神B式土器がV a層に出土し、三代寺遺跡と同様に円筒土器と口縁部が外反するものがあり、また、轟式土器がIII c層に並木式土器や岩崎式土器等はIII a層に出土し、前期から後期までみられる。

加治屋園遺跡は、先土器時代から古墳・歴史時代と多期にわたり生活しやすい地であったといえよう。



加 治 屋 園 遺 跡

37. 加 栗 山 遺 跡

1. 所在地 鹿児島市川上町字加栗山字野久保

2. 環 境

遺跡は緑ヶ丘台地を基部として南へ延びた長さ210m、幅80mの舌状台地に立地する。標高約174mの基部を最頂部として、南へ緩傾斜する平坦地となる。

台地はシラスを基盤とし、西側は長井田川によって浸蝕された深い谷が枝状に入り乱れ、しかも谷との比高差約60mを測り垂直な崖となる。東側は緩傾斜をもって、槽木川によって形成された開折谷ともいえる狭い水田地帯を経て、対岸の吉野台地へ続く。南側は舌状台地の先端部で急な崖となり谷が形成され比高差は80mとなる。北側は台地の基部で、小谷を経て緑ヶ丘台地へ連なる。

3. 土 層

台地を形成する地層は、吉野軽石流・坂元軽石流（シラス）の新时期火山灰層を基盤とし、その上位に本遺跡の遺構・遺物を包含する層（中世山城・縄文時代前期・縄文時代早期・先土器時代の4文化層）が観察された。

第Ⅰ層—表土層。中世山城の遺構・遺物包含層である。第Ⅱ層—茶褐色砂層。第Ⅲ層—黄褐色砂質土層。下部にパミスがブロック状にみられる。通称アカホヤ層と呼ばれる。その起源は鬼界カルデラに求められ、6050～6400YBPの年代が与えられている。縄文時代前期の曾畑式土器を包含する。第Ⅳ層—青灰色粘質土層。第Ⅴ層—パミスを含む黒褐色粘質土層。この層は2層に細分される。Ⅴa層は縄文時代早期の遺物包含層である。Ⅴb層は無遺物層となる。第Ⅵ～Ⅸ層—黄褐色パミス層。Ⅵ～Ⅸ層のパミスの粒子を比較するとⅥ・Ⅶ・Ⅸ・Ⅷと粗くなる。桜島起源か？第Ⅹ層—赤褐色粘質土層。第Ⅺ層—暗茶褐色粘質土層。細石核・細石刃等の先土器時代の遺物を包含する。放射性年代測定により10,230±220YBPの結果がある。第Ⅻ層—茶褐色粘質土層。第Ⅼ層—暗茶褐色粘質土層。第Ⅽ層—茶褐色粘質土層。第Ⅾ層—暗茶褐色粘質土層。第Ⅿ層—茶褐色粘土層。第ⅰ層—黄褐色火山灰砂礫層。以下シラスと続く。



加 栗 山 遺 跡

先 土 器 時 代

1. 遺 構

遺構の検出はみられなかったが、遺物の出土状況はまとまりをもって構成された(ユニット)。このユニットは38ヶ所を数え、また、石材・石器の差異により大きく4つのユニット群に分かれた。38ユニットの各々のユニットには、出土遺物の種類、石材、範囲等に差異を認められた。また、礫群といえる程の集中はないが、ユニットに共伴して礫が検出された。遺物と礫の範囲は一致する。

2. 遺 物

出土遺物は総数7万点弱で、石器として、細石刃・細石刃核・搔器・削器・ナイフ形石器・石鏃・磨製石斧・大型加工台形様石・剝片等が出土した。石材は黒曜石が主を示めチャート・凝灰岩・石英・頁岩等を用いている。細石刃は2532点出土し、黒曜石・凝灰岩・砂岩・頁岩・チャート等があり、石材の相違によって形態が異なる。三部切截手法が用いられている。細石刃核は総計349点出土し、その中で黒曜石製は279点である。凝灰岩は扁平礫を素材とし、折断による分割で打面調整し、細石刃核として利用したものである。ナイフ形石器は石英質であり、他の遺物の出土状況と若干の差異がみられる。石鏃は13点出土し、黒曜石・砂岩・チャート・石英・硬質頁岩等があげられ、器種は平基式の三角形鏃と、基部の窪んだ凹基式の石鏃の二形態に大別され、遺跡の台地全体に散在した。大型加工台形様石は輝石安山岩の自然石を素材とする面どりをした大形の台形様石で、平坦面に2ヶ所研磨痕がみられ、周囲は全て敲打により整形されている。石皿としての利用が考えられる。磨製石斧は基部が平坦で両側縁はほぼ平行する短冊形の石斧である。丹念な研磨が施こされている。以上の石器が特徴のあるものとしてあげられる。石鏃・石斧・台形石は縄文的文化の様相が強く、先土器時代～縄文時代に移り変わる過渡期の遺物としての特徴をもっている様に思われる。

縄 文 時 代

本遺跡の縄文時代の出土土器には、早期を主体に前期の土器がある。層位的には各々、Ⅴa層、Ⅲa層が遺物包含層となる。現代の耕作や、中世山城の構築時に一部攪乱を受けている部分もあるが、ほぼ舌状台地全域にわたって遺物包含層は残存していた。

1. 遺 構

㊤ 竪穴住居址 舌状台地の中央部を中心として縄文時代早期の竪穴住居址17基が発見された。ⅩⅤ号住居址は、他の住居址の配置と比較して分布もかけ離れ、形状も不定形となる。住居址周辺は石坂式土器の分布圏であり石坂期の住居址に想定している。ⅩⅤ号住居址を除いた他の住居址の分布状態は、吉田式・前平式土器の分布と一致し、中央部に広場的空間地と土壇群をとり囲むように孤状に分布していた。これらの住居址について若干述べたい。

各々の住居址は規模・平面プラン・内部構造など形態に差異が認められる。また、単基（Ⅰ～Ⅶ・Ⅹ・ⅫⅢ・ⅫⅣ・ⅫⅤ）と重複（Ⅷ・Ⅸ・Ⅺ・ⅫⅡ）が存在した。住居址の平面プランは方形を基本とし、1.6×1.9mの規模の小さいⅤ号住居址、5.1×2.8mから本遺跡で最も大きい長方形のⅦ号住居址がある。内部構造にはⅣ号住居址を代表とする径10cm程度の壁柱穴が30個以上検出されるもの、Ⅹ号住居址のごとく壁溝を有するもの、Ⅲ号住居址の柱穴のみの住居址があり、内部構造は、3つの形態に分けられる。さらにⅩ号住居址は、床面に平行する2列の溝と壁溝を有し、建て増しなど多慮すべき遺構であった。

住居址内出土の土器は大半が覆土中の小破片である。大半が前平式土器に比定されるものであるが、一部吉田式の土器もあり、また、周辺からは吉田・前平式土器の分布と一致することは住居址の時代の決め手と成り得よう。円筒土器である比較的に時間的に土器形式上、差の少ない吉田・前平式期に相当するものと考えられ、形態の違いや重複する住居址なども同様に、比較的接近した時間での関係として、集落の定着と移動のくり返しが行われていたと理解したい。

⑧土塚 土塚の分布状況は住居址群に囲まれ、台地の中央部に集中してみられる。土塚は単独・土塚や住居址との重複があり、数基の土塚が群として2ヶ所に配される。

土塚の形態は、連穴土塚（土塚検出面で小円形と略隅丸方形の別個体の掘り込みが隣接するが、底面は同一となり、ブリッジによって2つの土塚がトンネルで連なっている）33基と、一般的な掘り込みの土塚45基が発見された。ただし、重複する土塚が多く正確な数は不明である。連穴土塚については特殊な形状を呈し、東京都田中谷戸遺跡に類例をみるのみで正確な用途は定かでないが炉穴として理解したい。しかし、確かなデータは得られず、日常の調理場や土器作り、墓制・祭祀に関する遺構など多様な機能が予想され、今後の課題としてとらえたい。

⑨集石 集石は、土器の分布状況と同様に全域に分散し、17基が発見された。礫は1m四方に集中するもの、数個の礫を小範囲に集めたもの、バラツキがありまとまりのないもの、落ち込みを伴ったものがある。礫は拳大や幼児頭大の円・角礫の自然石が利用されている。礫には火を受けた痕跡が残っているものが一部観察される。調理場の用途が考えられる。

2. 遺物

出土遺物には、Ⅴa層を遺物包含層とし、縄文時代早期の円筒土器である石坂式、吉田式、前平式土器を主体に貝殻条痕文土器や、Ⅲa層出土の縄文時代前期の曾畑式土器がある。石坂式土器は台地の中央より南に、吉田式・前平式土器は北側半分に出土し、分布において台地を2分していた。

石器には、石鏃・磨製石斧・打製石斧・石匙・削器・磨石・石核・石皿など多数量出土した。その他、円盤状軽石製品や穿孔のある土製品、装身具・陰陽石など発見された。

中 世 山 城

山城は浸蝕された崖に囲まれた舌状台地の地形を最大限に利用したものである。中央部に曲

輪Ⅱ，東側一段高い曲輪Ⅰ，曲輪Ⅱ以南に曲輪Ⅲの平地を造り，東側には通称馬場といわれる腰曲輪からなる。

1. 遺構

㉑掘立柱建物跡 曲輪Ⅰ・Ⅱより多数のピットが検出された。この中で掘立柱建物跡として明確に想定可能なものは，2間×3間と2間×2間に底をもつ2基があった。

㉒堀 堀は舌状台地のほぼ中央部を東西に分断する堀Ⅰと東側の傾斜面を削平した腰曲輪の台地の接点に南北に走る堀Ⅱがある。

堀Ⅰ 堀Ⅰは台地のほぼ中央部にあたり，堀をつくることで台地を分断し，曲輪を区画したものである。堀は東西に走り，幅は5～6m，深さは1～4mを測り，底面は西側へ傾斜する。堀断面は逆台形状を呈しシラスを掘り込む。一部段掘をなす部分がある。

堀Ⅱ 台地東側の傾斜面を削平して作り出した幅12m，長さ約140mの腰曲輪に検出された。堀Ⅱは幅4～5m，床面1～1.5m，深さ2～3mで断面は逆台形の箱堀となる。全長は両端が不明な為に確認できなかったが，現存長は136mを測り北側へ傾斜する。また，堀Ⅱが破棄されたのち曲輪Ⅱへの登口と思われる古道や排水溝も重複して構築されていた。

柵列 堀Ⅰの北側縁辺に東西に走り，長さ22.5mにわたり平行する2列の柵列が検出された。柵跡は直径25～30cm，深さ10～60cmのもので合計58個である。各柵跡間は70～80cmの間隔で設け，各柵列は1.4～1.5mの幅となる。

溝状遺構 台地の縁辺部に台地を巡る幅20～40cm，深さ10～50cmの溝状遺構が検出された。

土塁 曲輪Ⅰを構築する際，自然地形を残した土塁がわずかに残存していた。

その他 炉址4基や礫溜り2基，井戸状遺構が発見された。

2. 遺物

遺物には，土師器・青磁・白磁・染付・備前焼・石臼・湯釜・かんざし等が出土したが量的には少ない。土師器は全て糸切り底である。青磁・白磁は13～14世紀前半のものから15～16世紀，染付は嘉靖様式のものを含め15～16世紀のものが主流であった。

中世山城としての加栗山遺跡の城主の比定の問題であるが，本遺跡を含む地域は川上町である。この川上に由来する人名は「鹿児島県史」によれば，島津氏第15代藩主島津貞久の長庶子頼久を祖とし，江戸時代まで島津氏の重臣としての地位を保った名家であった。そして，2代（頼久の子親久）が川上を拝領し，川上姓を称したとも伝えている。このほか「川上氏系図」「薩藩旧記雑録」には『勝久公遣兵攻川上城……』や『久利在川上城時失火……』等の記事が散見され，川上城の存在したことがうかがわれる。しかし，この記事にいう川上城が本遺跡であるかについては，断定はできないが，有力な地であることは言うに及ばない。

3. むすび

発掘調査の結果，加栗山遺跡は，先土器時代，縄文時代早・前期，中世山城の複合遺跡であることが判明し，舌状台地の約1万㎡の全面発掘は，各時代の遺構・遺物を全体的な視野でとらえられ，膨大な資料を得た。

貴重な遺跡であったので遺跡の永久保存が検討されたが、記録的保存にすることになった。しかし、発掘調査方法、考古学者の現地指導、地質、土壌、保存科学等の方法を取り入れて発掘調査に一時期を画するものとなった。ことに火山灰の多面的な検討や、集石・土層の科学処理等、多くの成果を得た。また、山城発掘、縄文時代早期の集落址、先土器時代の豊富な発掘成果は、今後の研究に多くの資料を提供することになった。



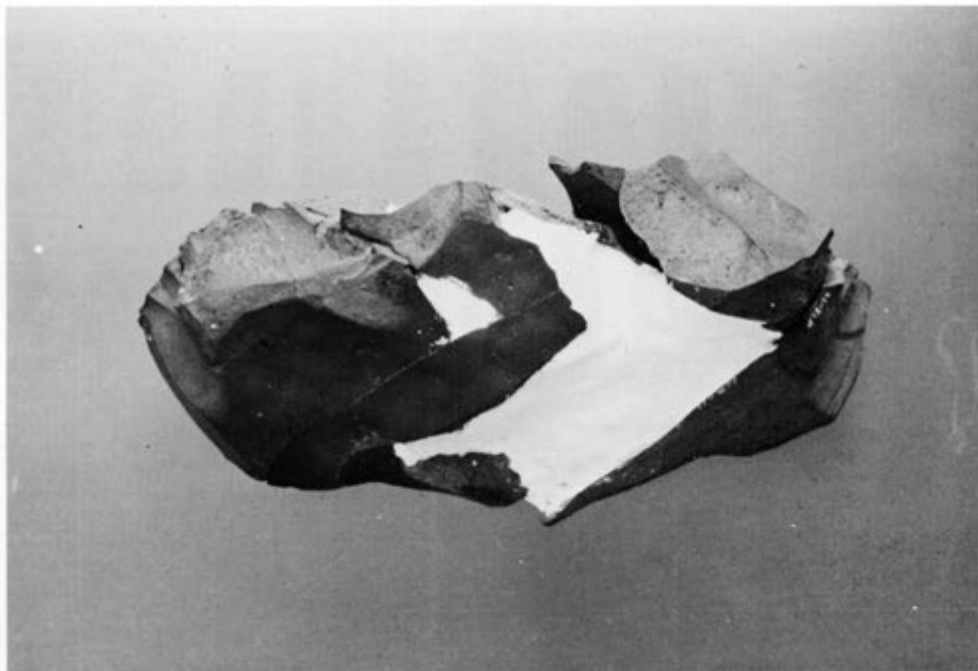
中世山城(曲輪1の炉址及び柱穴)



縄文早期竪穴住居址Ⅶ号及び連穴土壇



先 土 器 時 代 (細石器遺物出土状況)



先 土 器 時 代 (接合資料)



細 石 核



細 石 刃

38. 神ノ木山遺跡

神ノ木山遺跡は、鹿児島市下田町字神ノ木山に所在する。日本道路公団の九州縦貫自動車道の中心杭でいえば、STANO 212 付近の開拓された畑地である。

このあたりは、シラス台地が浸蝕を受けてできた開析谷が入り込み複雑な地形となる。本遺跡の所在するところは、北西・南東及び南側とも深い谷となり、幅約70mの馬背状を呈する。標高は約113mを測る。現況は傾斜面を削平した狭い段々畑が尾根を中心に左右に点在し、その多くは荒地となっている。

調査は、九州縦貫自動車道の中心杭STA 212 を中心に2mの方眼を設定し、2m×2m及び2m×4mを基本とし、市松状に掘り下げた。

その結果、10cm～30cmの耕作土の下はシラス層となり、遺物は1点も出土しなかった。

このような状況は各トレンチとも同様であるが、一部に二次堆積による黒色土層が観察されたものの、その地点は流水路状となる地形のためであった。



神ノ木山遺跡

各時代の概要

旧石器時代

世界で最も古い人類は、今から約200万年ぐらい前、日本では10万年ぐらい前に出現したといわれている。最初的人类が出現した時から、現在よりも1万年ぐらい前までを「旧石器時代」という。

鹿児島県内で人類が生活するようになったのは、出水市上場遺跡や指宿市小牧遺跡の調査から約2万年前と推定されている。

このころの人々は、植物の栽培法を知らず狩猟や採集によって食糧を得ていた。また、道具は石を打ち欠いて作った石器を使った。土器はこの時代の終わりごろになってつくられるようになった。

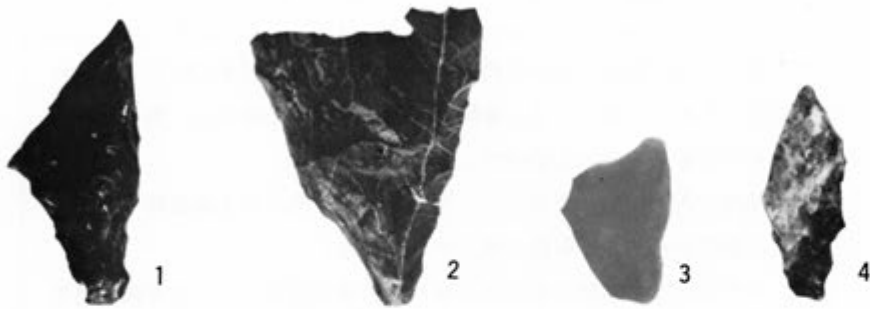
九州縦貫自動車道の調査では9ヶ所の遺跡が発見され、木場A遺跡では約2万年前のナイフ形石器が、また、加栗山・加治屋園遺跡は、旧石器時代から縄文時代へ移りかわる時代の石器が多く出土し、今までわからなかった時代を調べるのにとても貴重なものになった。

— 遺 構 —

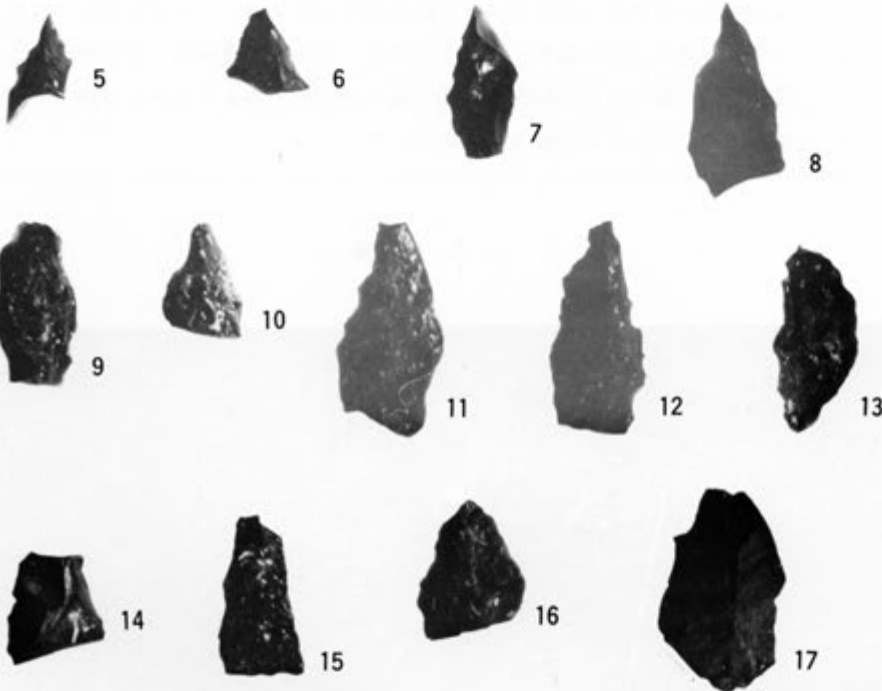


集 石 (木場A遺跡)

集石……径2m程の楕円形状に安山岩の大小の円礫・角礫を集めたものである。礫の周辺に炭化物がみられることや礫は火をうけた跡があるから炉などに使用された可能性もある。



ナイフ形石器

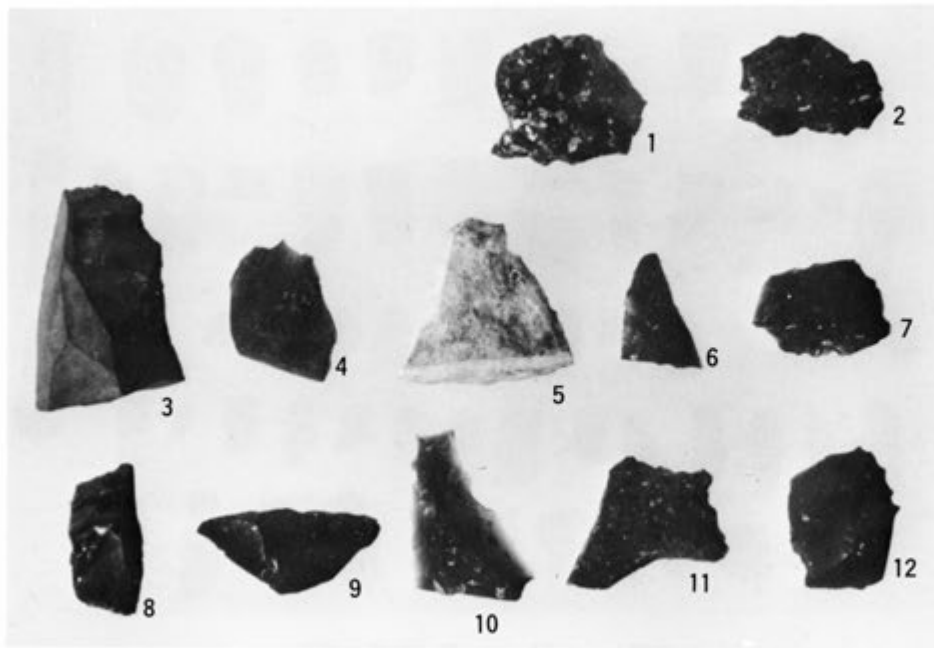


尖頭器

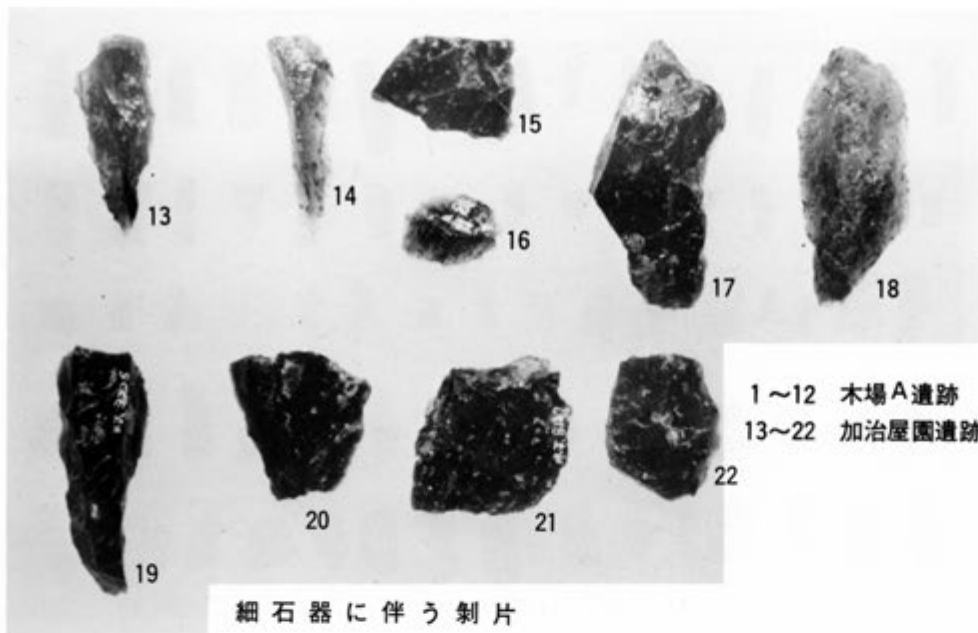
- 1・2 木場A遺跡
- 3・5～17 木場A-2遺跡
- 4 加栗山遺跡

ナイフ形石器……木の先につけて突いたり、ナイフのようにものを切ったりする石器である。旧石器時代の代表的な石器である。

尖頭器……先端が鋭く尖った石器で、木の先にとりつけヤリとして使った石器である。



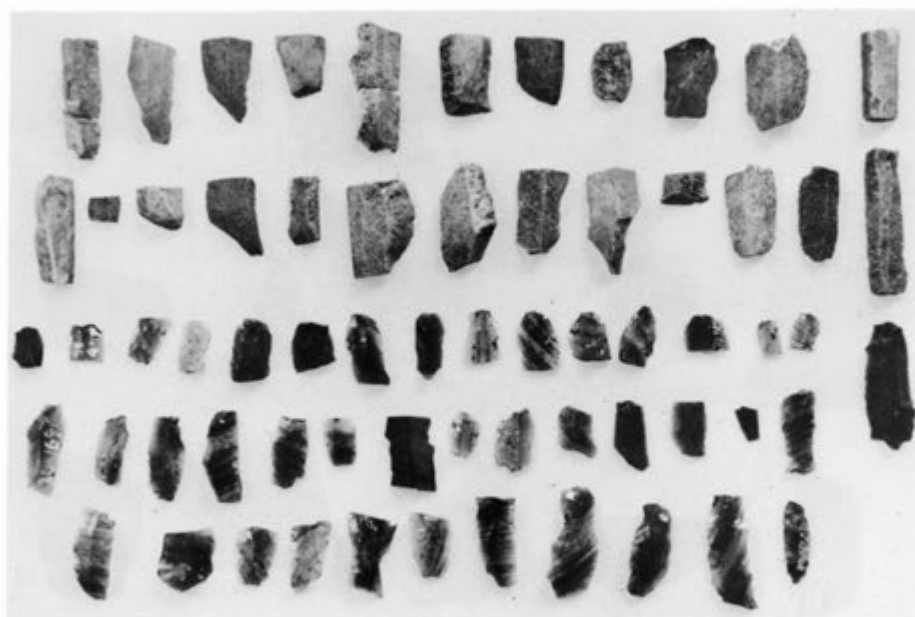
ナイフ形石器に伴う剥片



1~12 木場A遺跡
13~22 加治屋園遺跡

細石器に伴う剥片

剥片……原石を打ちかいて出来た薄い石器のことで、これから加工を施こしているような石器を作ることが多い。木場A遺跡の剥片は約2万年前の剥片で、加治屋園遺跡の剥片は約1万年前のものである。

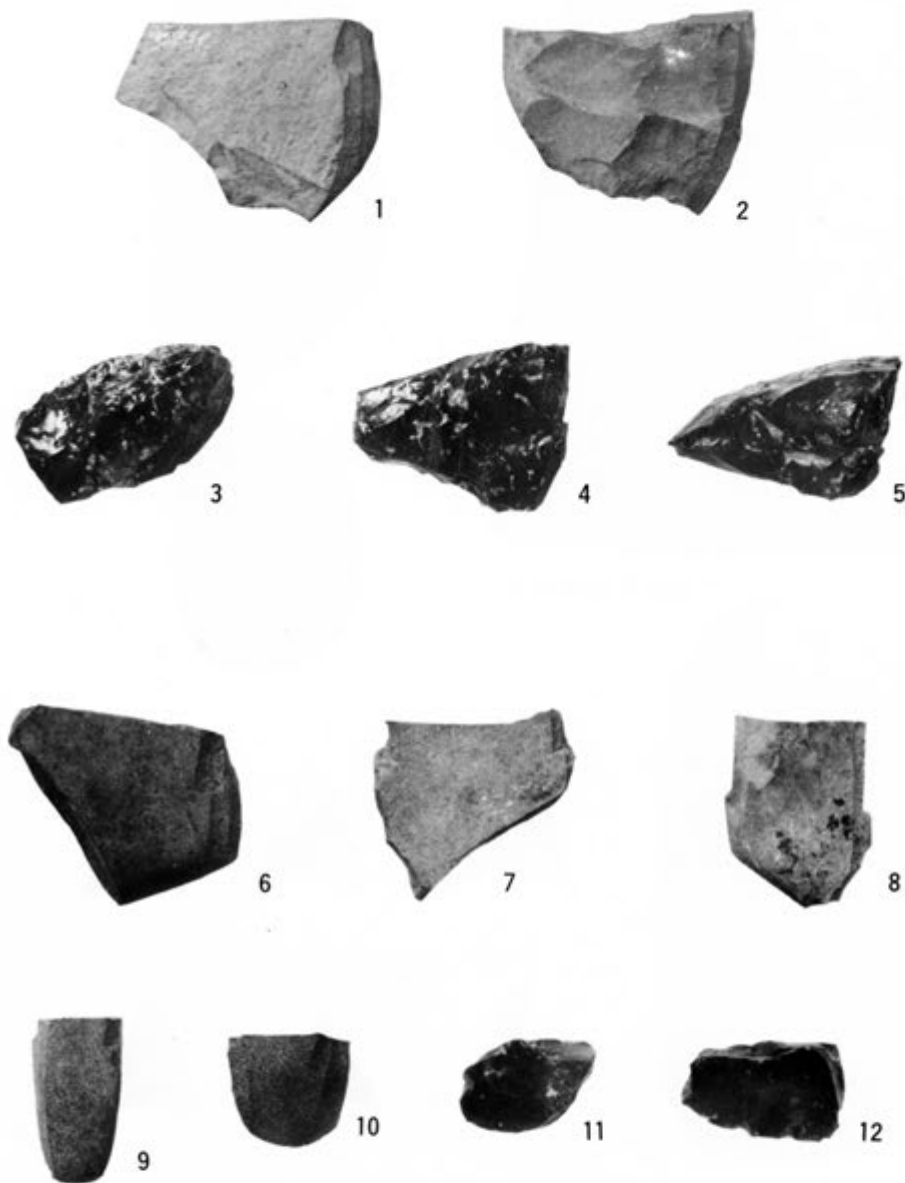


細 石 刃 (加栗山遺跡)



細 石 刃 (加治屋園遺跡)

細石刃……長さ1～2cm，幅3～5mmぐらゐの薄い石器でカミソリの刃みたいなものである。外国で骨に埋めたまま発見されていることから，木や骨に植えこんで使ったものと思われる。



細 石 刃 核

1～5 加栗山遺跡
6～12 加治屋園遺跡

細石刃核……細石刃を作り出すための石器であり、この石器が多く出てくることによって、細石刃を作った場所がわかる。



大型加工台形様石

石斧 加栗山遺跡出土の石器

石槌……石器を作るときに用いるハンマーのことである。

石斧……木の伐採等に用いる斧であり、縄文時代の主な石器でこれは磨かれている。

大型加工台形様石……用途は不明であるが、磨いた部分等から石皿の可能性もある。

石鏃……縄文時代の遺物で弓矢の先に付けるものであるが、加栗山遺跡では細石器と共伴している。

縄 文 時 代

約1万年前から約2,000年前ぐらいまでのおよそ8,000年間は「縄文時代」といい、早期・前期・中期・後期・晩期の5時期に区分していますが、最近では早期の前に草創期をおくこともある。

縄文時代は、それまでの寒冷な気候がしだいに暖かくなり、氷や雪が解けて海面があがったので、それまで大陸と陸続きであった日本は四方を海に囲まれた島国となった。

植物は西日本ゴシイ、カシ類、東日本でクヌギ、ナラ類が多くなりました。木の実や草の根などを料理するようになり、土器作りの技術がすすみ、器形や文様も変化しました。今までの狩猟や採集に加えて漁撈も行われるようになった。

石器類は用途に応じたものがつくられ、また、動物の骨や角で釣針や銚などもつくられました。

まじないや祭りと、かかわりのある土偶・岩偶などは中期以降につくられるようになりました。

古代人は、岩陰の洞窟や、竪穴式住居で生活しました。

遺 構

鹿児島県内で縄文時代の遺跡から発見される遺構には、竪穴住居址・集石・土壇・炉穴・貯蔵穴などがある。層を一枚一枚はいでいくと、方形や円形に周囲との土の色が違う場所があり、住居址や土壇（掘り込んだ穴）などがあることが解ります。遺構の時代の決め手は、遺構内や周囲から出土する土器の年代によって判断します。

遺 物

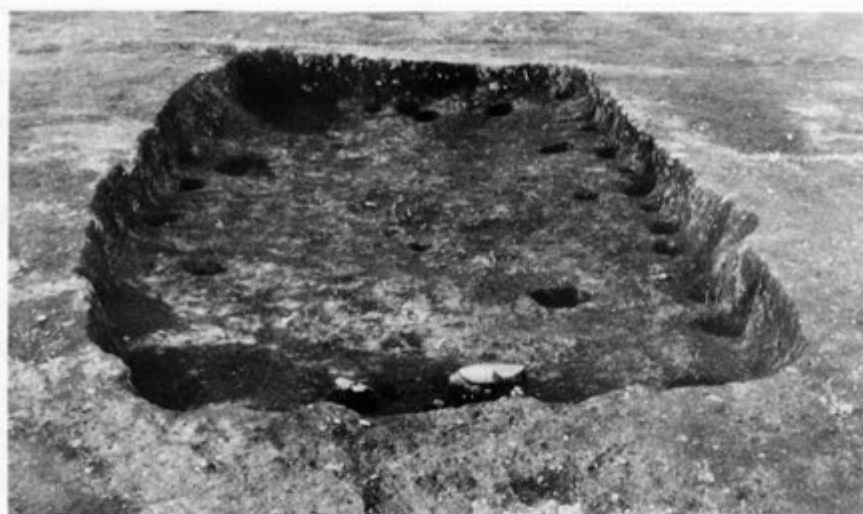
遺物には、土器・石器(矢じり・石匙・削器・磨石・敲石・石皿など)・装身具・玩具などがある。地中に埋って出土する遺物は、上のものより下から出土するもののほうが時代は古い。火山灰土壌に厚く覆われた遺跡は、地表面に近い遺物包含層ほど、農耕や畑の開拓などによって壊されたり、攪乱されたりして消滅を受けやすいので、深くなるほど現在まで遺物包含層が残っていることが解る。

本県で発見されている縄文時代の遺跡は、早期・前期が多く、また、遺物の量も多い。それに比べて、縄文時代中期・後期・晩期の遺跡は少なく、遺物の数も少ない。

(注) 遺物包含層—遺物や遺構が含まれている層のこと。



竪穴式住居址群(加栗山遺跡)

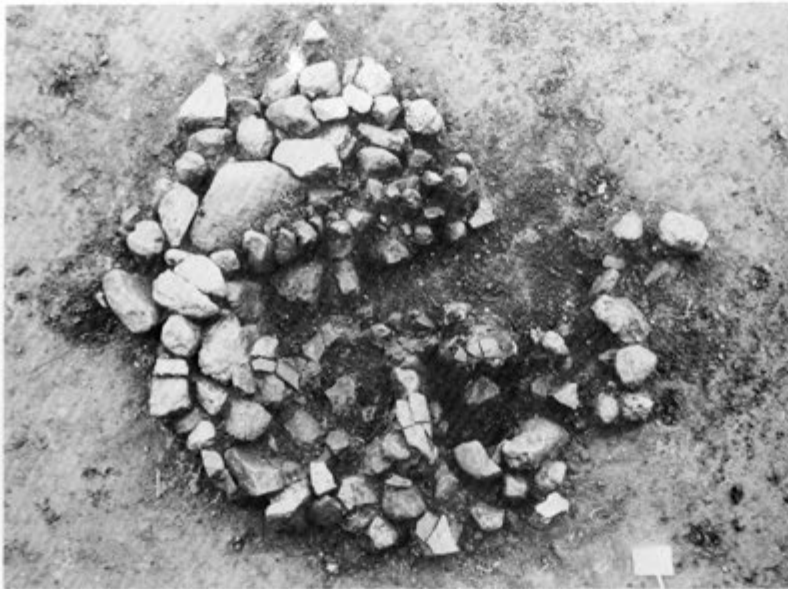


竪穴式住居址(加栗山遺跡Ⅶ号住居址)

加栗山遺跡では、縄文時代早期(今から約8,000~9,000年前)の竪穴式住居址が計17基発見された。平面は方形で、床面には円柱穴あり。帯状の溝がつくられているのもあった。



竪穴式住居址(加栗山遺跡X号住居址)



集石(加栗山遺跡集石I)

①は長径2.7m、短径2.3mの方形の竪穴式住居址で、深さ32cm。床面に26個の柱穴と、2本の平行する小さな溝がつくられている。住居の建て増しが考えられる資料です。

集石……握りこぶし大の自然の石を1ヶ所に集められたもの。火を受けて赤く変色しているものもある。調理用の施設とする考え方がある。



① 集 石 (三代寺遺跡)



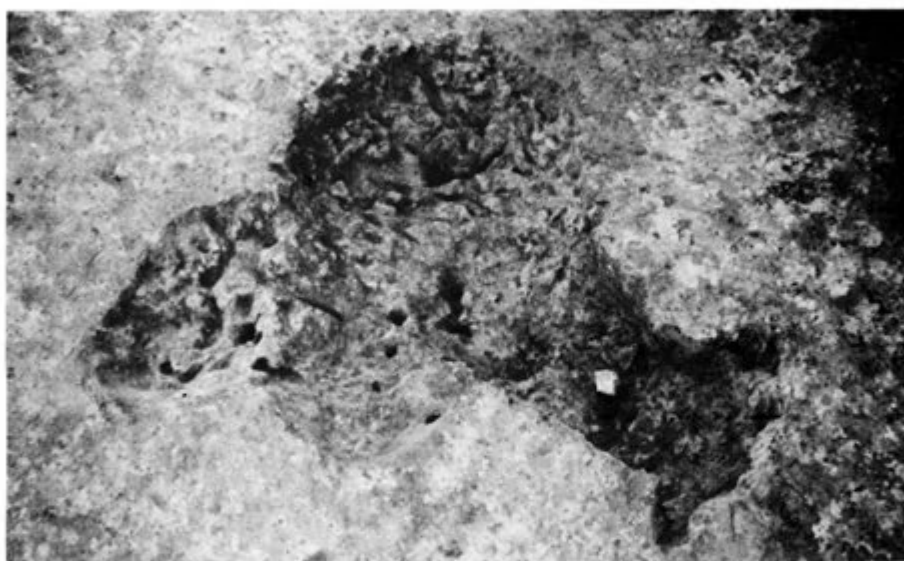
② 集 石 (中尾田遺跡)

①は長径1.6m、短径1mで楕円形の穴の中に5~10cmの石を用いてあった。

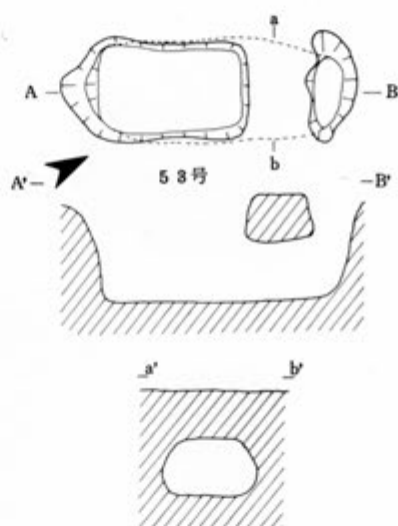
②は底面に20~30cmの扁平な石を花卉形に配置し、皿状をなしている。

いずれも、灰や炭は観察されていないが、調理用の施設ではないかと考えられている。

集石は、主に旧石器時代の終りごろから縄文時代早期・前期にかけて発見されている。



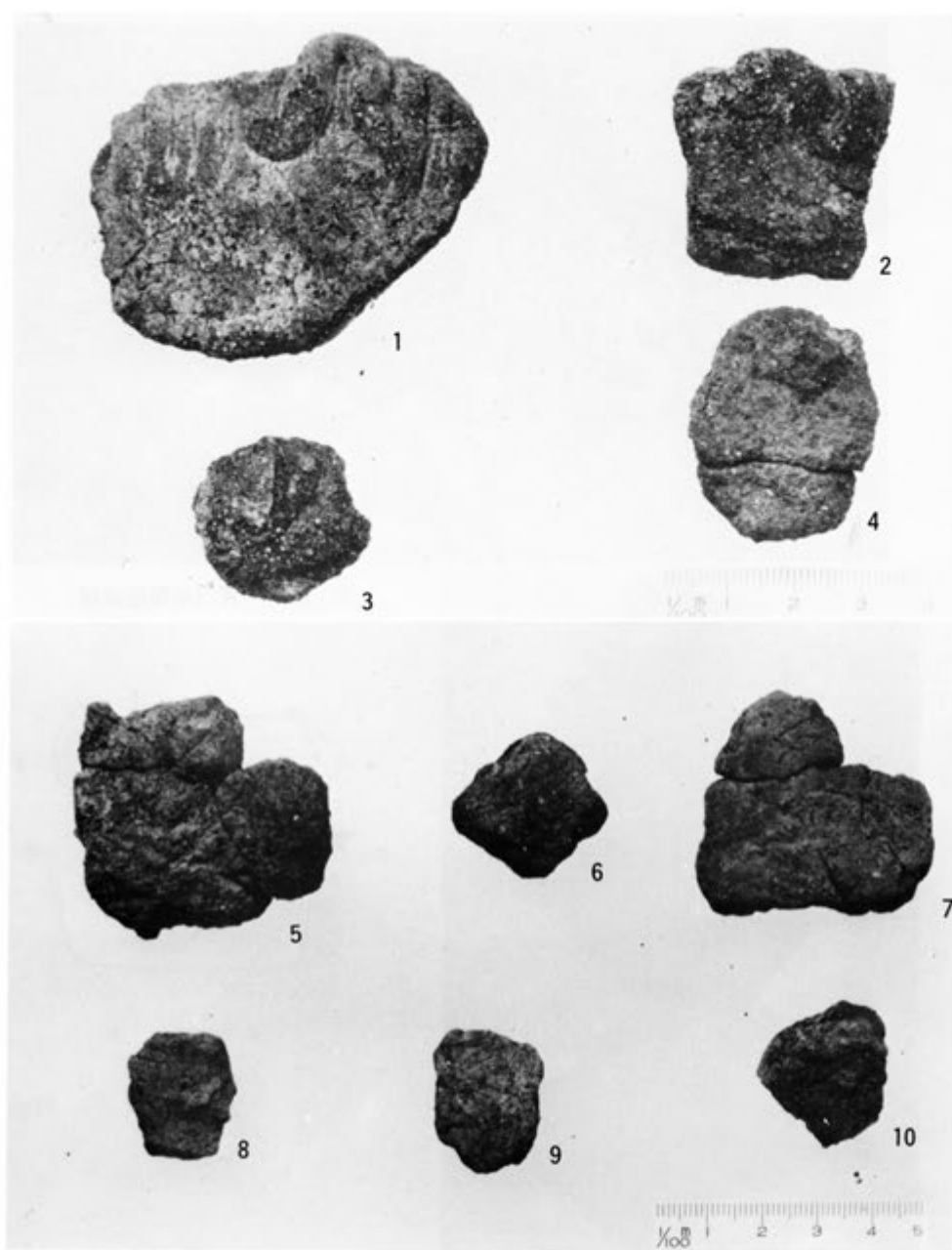
① 炉 穴 (中尾田遺跡)



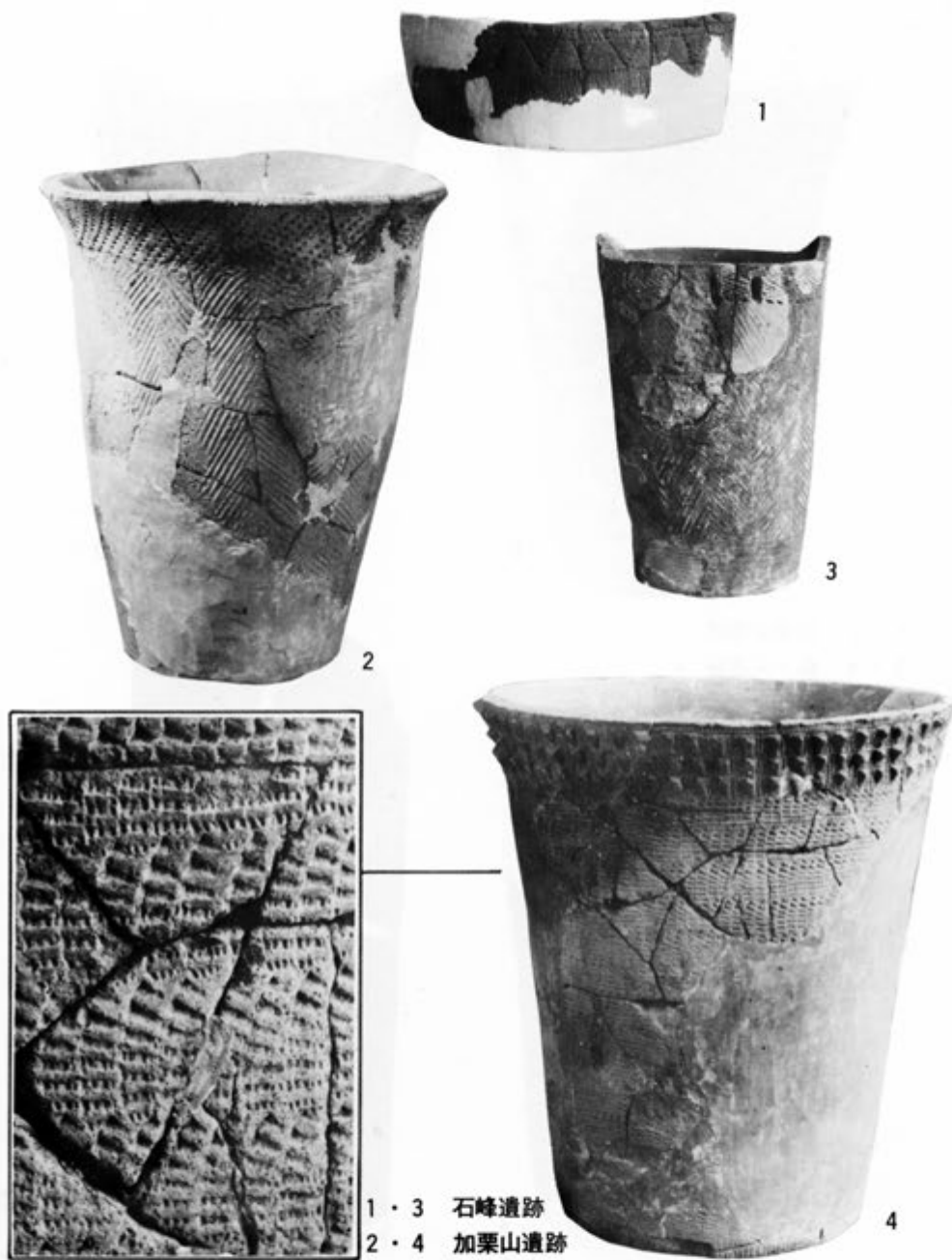
② 連穴土壇 (加栗山遺跡)

①は不定形をなしているが、4個の楕円形をした穴が重なって発見されたものである。柱穴の中には木炭片や木炭の粉末が多量にみられ、火をたいた跡と思われる。

②の土壇は、2個の穴がトンネルによって連らなっている。用途や性格は現在のところよく解らない。



粘土紐貼り付け文土器（加治屋園遺跡） 細石刃や細石器に伴って総数 114 点が出土した。破片のために器形は不明、土器は薄くて焼成が良いものと、厚くて焼成の悪いものがある。①は「S」字状に粘土紐を貼り付け、貝殻類似の施文具で刺突文を施す。その他、土器中に繊維状のものや、器面に繊維圧痕がみられる。本県最古の土器として注目される。



1・3 石峰遺跡
2・4 加栗山遺跡

縄文時代早期 1…連点鋸歯文の円筒土器。3…石坂式土器・円筒土器で口縁部は外反し、波状口縁となる。2…石坂式土器。口縁部が直行する円筒土器である。施文具には貝殻を使用し、口縁部には押圧による羽状文、胴部には羽状の貝殻条痕文を施す。4…吉田式土器・円筒土器。口唇部に刻み目文、口縁部にクサビ形凸帯、胴部に貝殻押し文を施す。



1・2 加栗山遺跡
3・4 桑ノ丸遺跡



縄文時代早期 1…円筒土器の吉田式土器。2…角筒土器の吉田式系土器。口唇部は平坦で刻み目文、口縁部には三角形のクサビ形凸帯文、胴部は貝殻押し文を施す。3…円筒土器の前平式土器。口縁端部に2段に縦位のキザミ目文、胴部は貝殻条痕文を施す。4…角筒土器の前平式土器。口縁端部に横位の押圧線文、胴部は貝殻条痕文と縦列線文の二重施文を施す。



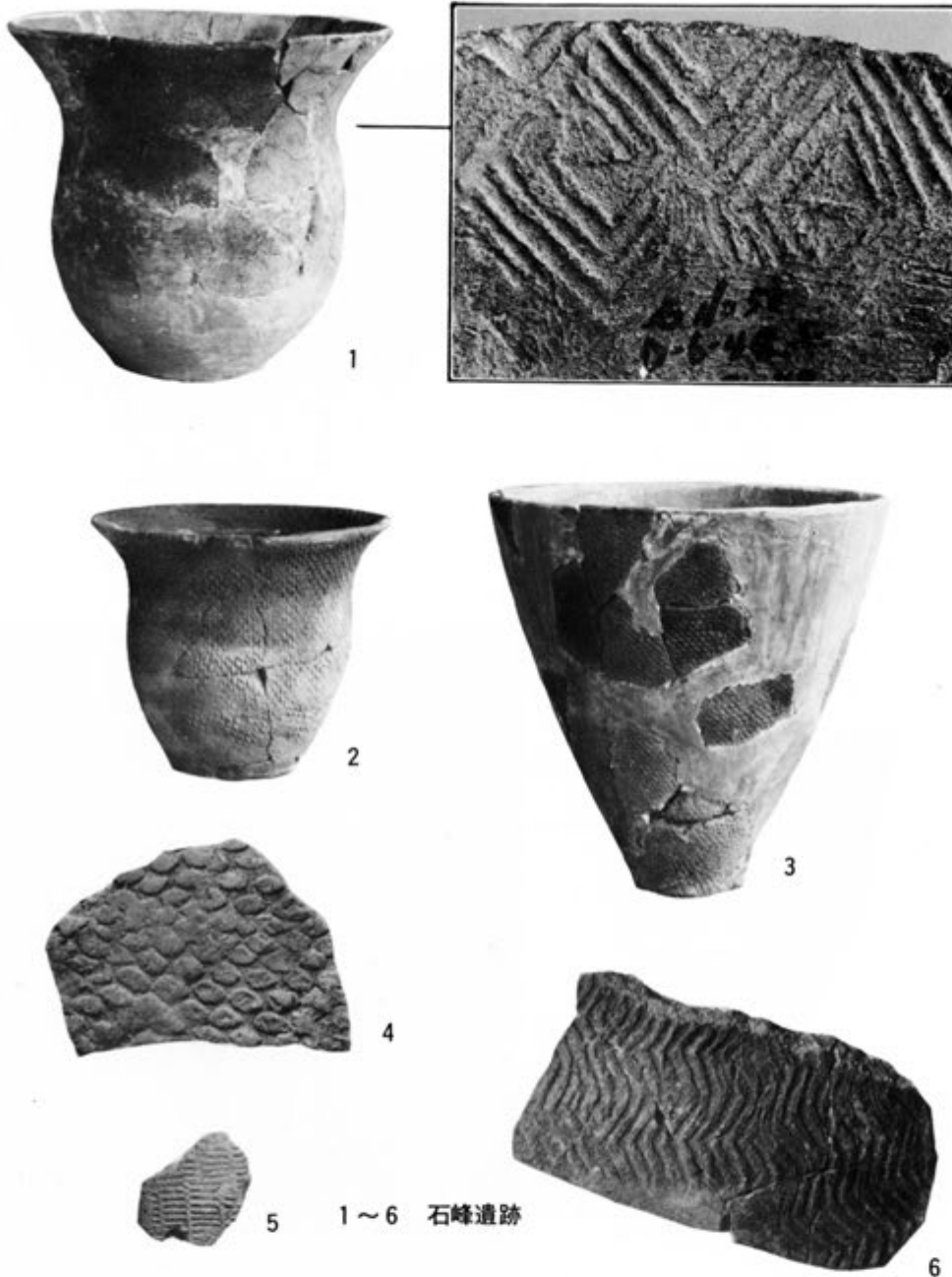
1・3 石峰遺跡
2 木佐貫原遺跡

縄文時代早期

1…撚糸文土器。口径31cm、高さ32cmの尖底土器、胴部は張り頸部でしまり外反する口縁部。

2…撚糸文土器。

3…凸帯撚糸文土器。高さ20cm、刻目凸帯2条と廻転押捺した撚糸文、7～9条の凹線文。



1～6 石峰遺跡

縄文時代早期（押形文土器） 棒状に菱形1，楕円2～4，格子5，山形6を彫り込み，原体（棒状施文具）を土器の表面に押しつけ回転させて文様を施す。

1は高さ22.5cm，2は高さ17cmで胴部は丸くふくらみ，頸部がしまり，外反する口縁部で平底。3は高さ25cm，平底で直行する口縁部となる。



1



2

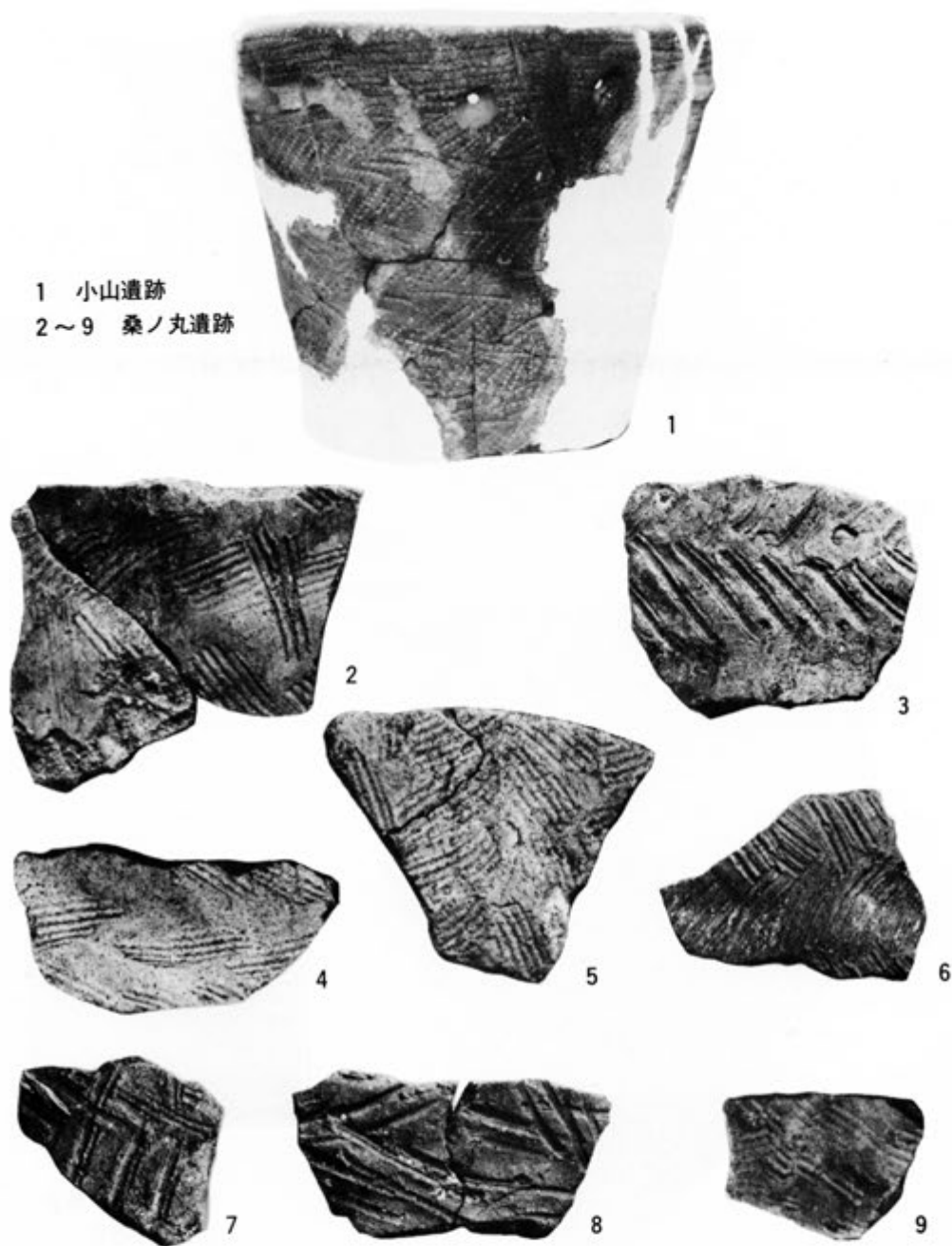


1 木佐貫原遺跡

2 石峰遺跡

縄文時代早期 1は押型文土器で、口径29.4cm。器形は胴部が「逆くの字」状に張り出し、稜をつくり出す。頸部はしまり、口縁部は外反する。外全面と口縁部内側に山形押型文を施す。2は石坂系土器である。器高49cm。胴部は張り出し、頸部はしまり、外反する口縁部で底部は丸底になる。口縁部と底部付近に楕円押圧文と胴部に変形燃糸文を施文とする。

1 小山遺跡
2～9 桑ノ丸遺跡



縄文時代早期（1…石坂式土器，2…桑ノ丸Ⅲ類土器）

1は円筒形の平底で器面には貝殻縁により綾杉状に施す。縦・横位の凸帯をつける。

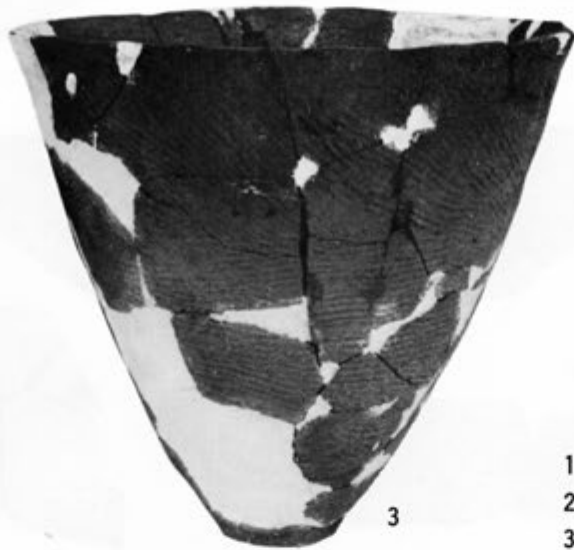
2～9は破片のため器形は不明。施文具は貝殻か篋を用い、羽状や山形状に引っかけて文様を施す。今までにないタイプの文様で新資料である。



1



2



3

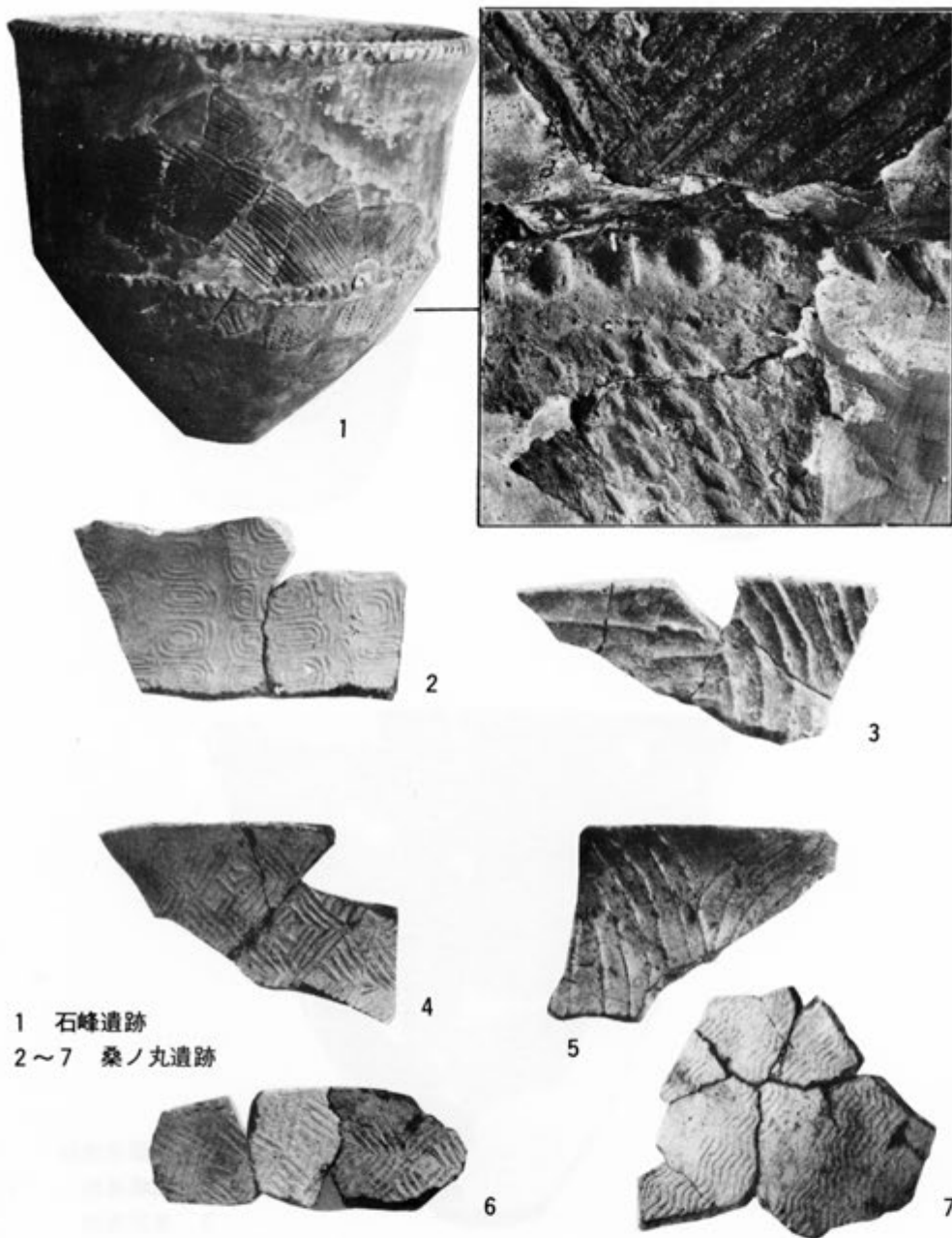
- 1 木屋原遺跡
- 2 石峰遺跡
- 3 東原遺跡

縄文時代早期

1は貼り付け凸帯条痕文土器。器高19cmの円筒土器。凸帯は刻目文，胴部は条痕を施す。

2は円筒形条痕文土器。器高約26cm。文様は口縁部に14～16条の貝殻条痕文を施す。

3は貝殻条痕文土器。器高約29cm。外開き口縁となる。器面全体に斜位・横位の貝殻条痕文。



1 石峰遺跡
2～7 桑ノ丸遺跡

縄文時代前期（手向山式土器） 1は器高約28cm。器形は僅かに内弯し発達した頸部と、底部へ向って細まる胴部との継目に刻目凸帯文を巡らす。この型式の土器は、押型文・幾何学沈線文・曲線文・隆帯文・縄文・撚糸文・絡縄凸帯などの文様要素のうち、2～3種類を配置施文する土器がある。2は重弧楕円文。3・5は隆帯文。4・6は菱形文。7は山形の押型文。



1～3 石峰遺跡

縄文時代前期（平椀式土器） 1…器高約22.5cm, 2…器高約31cm, 3…器高約40cm。

器形は頸部から口縁部へ外反し、4個の隆起部をもつ波状口縁となる。胴部はやや張り大きな平底になる。口縁部は肥厚帯を有し、土器の内面は平滑に篋磨きを施す。文様は、連点文・曲凹線文・幾何学凹線文・波状凹線文・結束縄文・絡縄凸帯を施す。

- 1 小山遺跡
- 2・3 石峰遺跡
- 4 木佐貫原遺跡
- 5 三代寺遺跡



縄文時代前期（塞ノ神式土器）

基本器形は、ややふくらみのある円筒形の胴部にラップ状に開いた口縁部がつく。文様は、連点文・幾何学文・網目文・撚糸文を施す。胴部が文様のみA a，文様が凹線文で囲まれるものA bが分類される。1～3は塞ノ神A a，4は塞ノ神A bと平楯式土器の中間形態。



1~3 三代寺遺跡

縄文時代早期（塞ノ神B式土器）

器形としては胴部はやや丸味を帯びた円筒形となり、口縁部は「く」の字に外反する。文様は口縁部に貝殻腹縁の刺突文を巡らし、胴部は直線や曲線で縦位、菱形に文様を施す。塞ノ神A式に比べ粗雑な整形となる。3は小型の土器で口径9.2cm、凹線文と連点文を施す。



縄文時代前期（曾畑式土器）

器形は、丸底で鉢又はピーカー形である。器壁は薄く胎土に滑石を含むものもある。文様には短線の凹線文を基本に直線文、羽状文、菱形文、連点文、幾何学文などを施す。

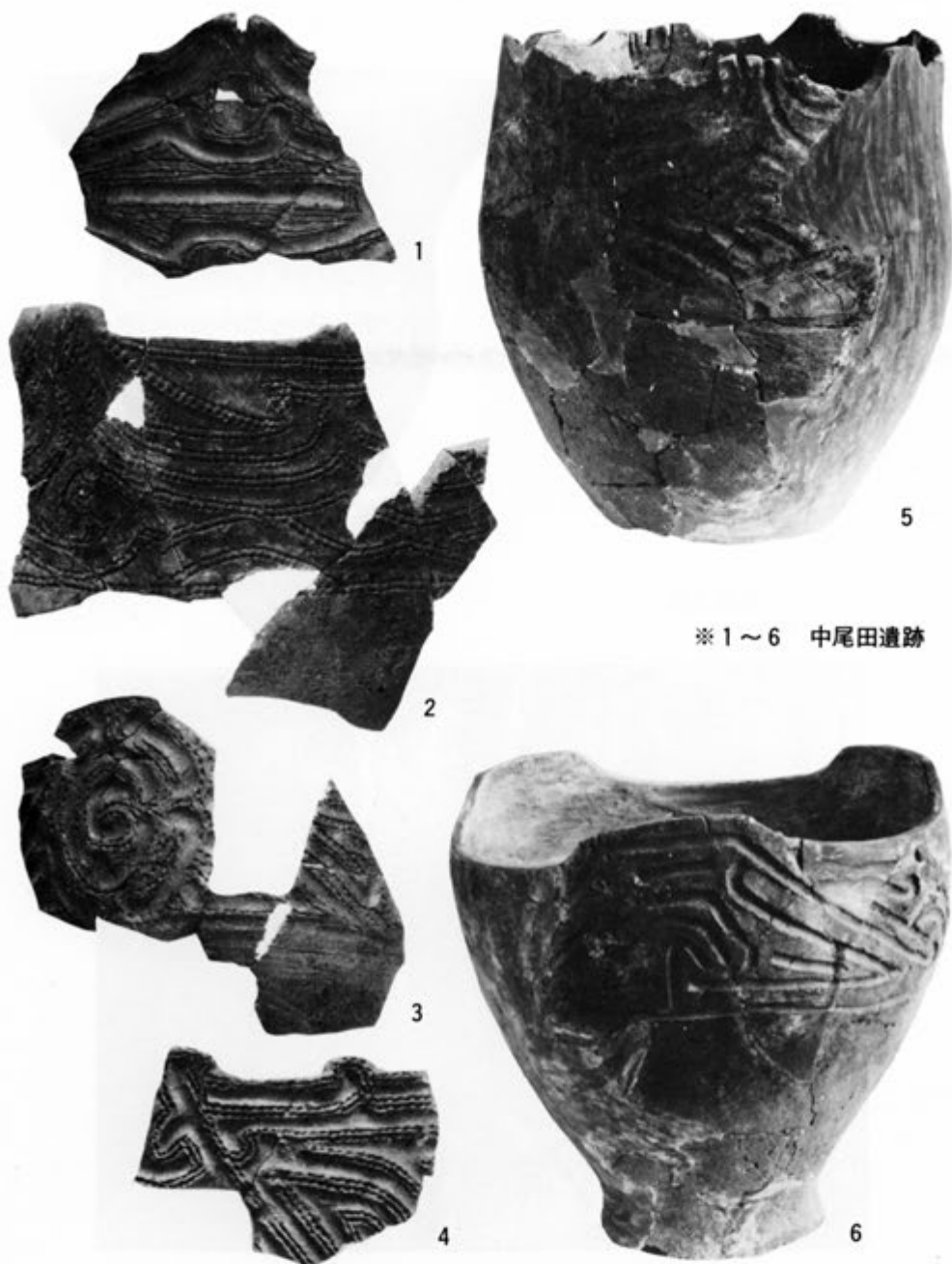


1・2 石峰遺跡



縄文時代前期 1は深浦式土器，器高約25cm。 2は春日式土器，器高約34.5cm。

深浦式土器の器形は，口縁部は外反し，胴部は直線的に下りゆるやかに弯曲して丸底になる。文様は，三角形・菱形・放射状に刻目隆帯文を貼付け，その間に細い沈刻線文を施す。春日式土器の器形は，頸部でしまりキャリパー形の口縁部。文様は粘土紐の渦巻文，波状文，連点文。



※ 1～6 中尾田遺跡

縄文時代中期（並木式土器…1～4）（阿高式土器…5・6，器高29cmの完形品）

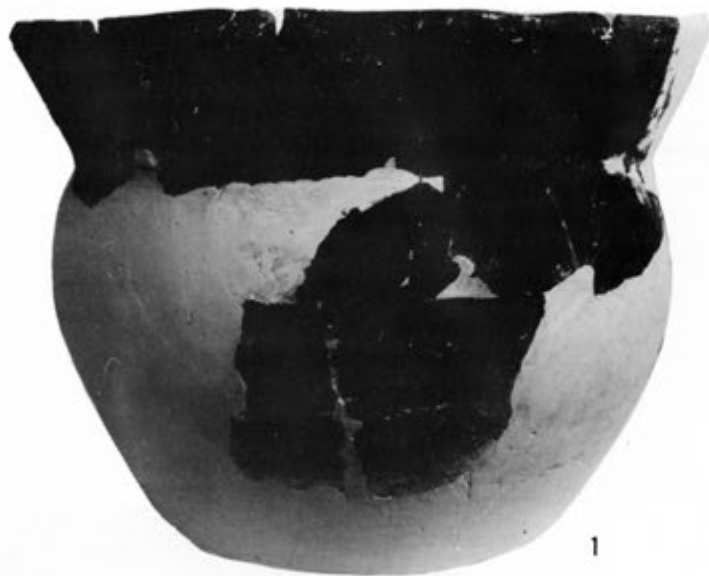
1～4は深鉢形の土器片である。胎土に滑石を含む。文様は、太形凹線文を施し、その凹線と凹線の上に半截した竹管・篋・貝殻などで瓜形状に施目してある。5・6は深鉢で、文様は大形凹線で押点文・渦巻文・曲線文を大きく描く。胎土は滑石を含むものもある。



※1 木場C
 2 桑ノ丸遺跡
 3・4 木佐貫原

縄文時代中期・後期

1は南福寺式土器（中期）。口縁部は肥厚し菱形や弧状の凹線文を施す。口唇部に突起を有す。
 2は指宿式土器（後期）。深鉢形で外開きの口縁部となる。文様は2本の並行する曲線と直線文。
 3・4は市来式土器（後期）。口縁部に隆帯を巡らし貝殻圧痕・爪形・凹線等の文様を施す。



※ 1 桑ノ丸遺跡
2 山崎B遺跡

縄文時代後期・晩期

1は縄文時代後期の黒色研磨土器である。三万田式系統の土器と思われる。

2は上加世田式土器（晩期初頭）深鉢形土器で、黒色で精製磨研されている。



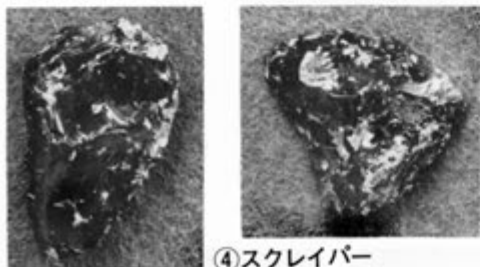
①石鏃



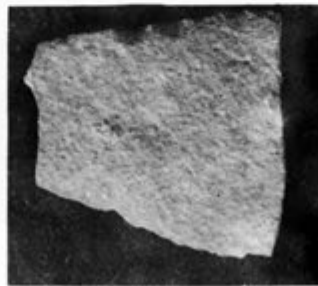
②石七



③石七



④スクレイパー



⑤剝片石器



⑥打製石斧



⑦磨製石斧



⑧磨製石斧

- ①～⑤
山崎B遺跡
⑥ 三代寺遺跡
⑦ 山崎B遺跡
⑧ 木佐貫原遺跡

石鏃……矢の先につける三角形の石器で「やじり」と呼ばれるものである。

石匙……つまみを持つ石器で、皮剥ぎ等に使用されたとされている。

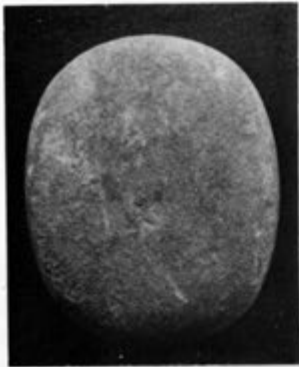
スクレイパー……搔器・削器と呼ばれ、皮はぎ等に使用されたとされている。

剝片石器……不定形な石の剝片に刃をつけたもので、利器として使用されたとされている。

石斧……木を切ったり、土掘り具等として使用され、打製と磨製のものがある。



①石皿



②磨石



③凹石

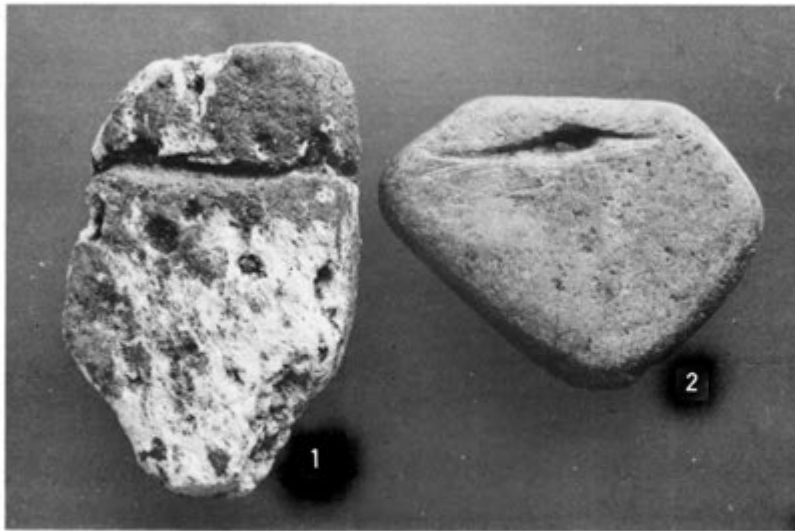


④敲石

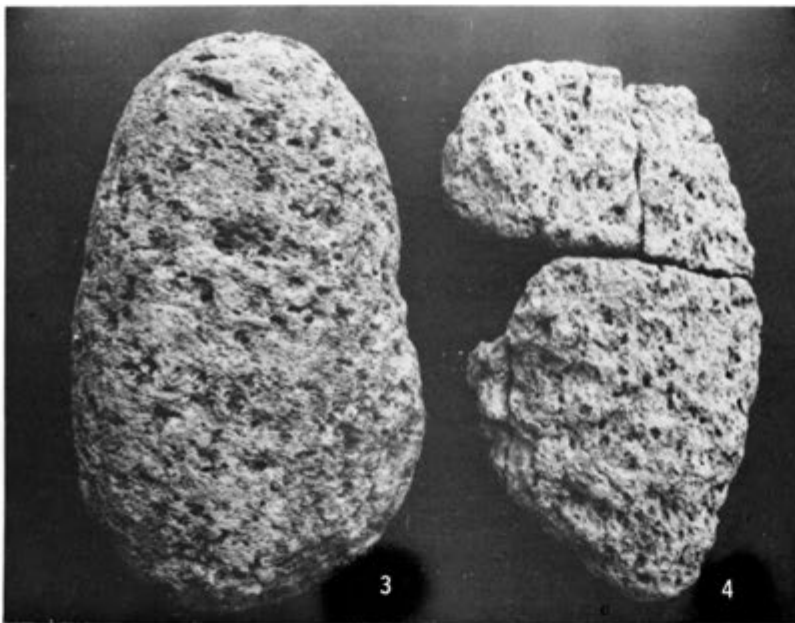
①～④ 三代寺遺跡

石皿……磨石や敲石と併用して、主に木の実等をつぶしたり、粉にするのに使用されたとされている。

磨石・凹石・敲石……木の実を割ったり、つぶしたり、粉にしたりするために使用され、石皿と併用された考えられている。



1～4 加栗山遺跡出土



-
- 1は軽石製玩具。縦7cm、横4cm、厚さ2.2cm。上位に凹線を巡らす。
- 2はペンダント。縦4.5cm、横6cm、厚さ7mm。直径2mmの穴を開け、ひもを通したものであろう。
- 3・4は軽石製の陰陽石。加栗山遺跡のM号住居址内より出土した。

弥 生 時 代

西暦紀元前 300 年ぐらい前から紀元後 300 年ぐらいは「弥生時代」といい、前期・中期・後期の 3 時期に区分されている。この時代の特徴は水稲が栽培され、土器・石器のほかに鉄器や青銅器などの金属器が用いられるようになったことである。

水稲の栽培が始まると、人々は水田の近くに集落をつくり、やがてこの中に有力者が現われるようになる。時代もすすんでくると、これら有力者の中から豪族が出て地域を治めるようになる。北九州を中心に分布する銅剣・銅鉾や畿内を中心に分布する銅鐸は、これらの豪族が所有していたものと考えられている。

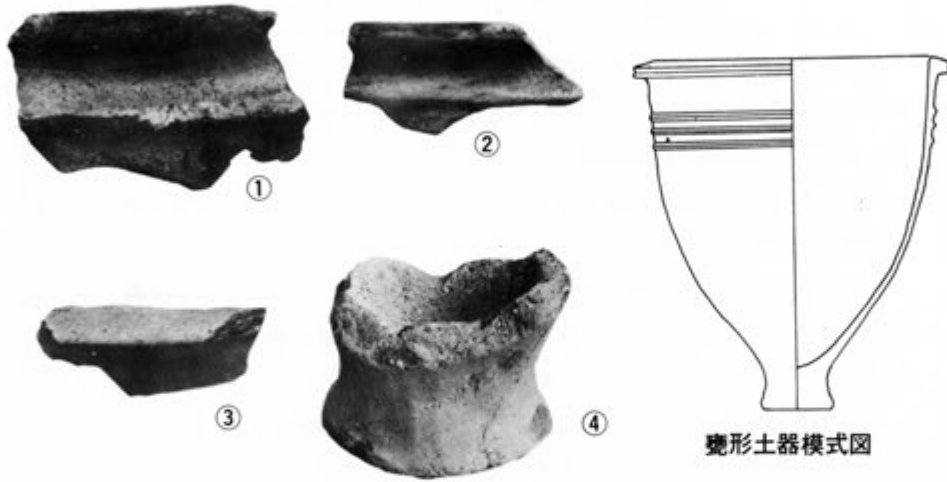
鹿児島県の弥生文化は、北九州と同じころに始まったが、中期ごろから地域的な特徴が見られるようになってきた。

九州縦貫自動車道建設に関する調査においては、弥生時代の遺跡としてとらえられるものはほとんど無く、わずかに 7 遺跡において、土器片・磨製石鏃が確認されただけである。



磨製石鏃 (桑ノ丸遺跡)

磨製石鏃……縄文時代の石鏃は打製石鏃で、打ちかいて作られたものであるが、弥生時代のものは磨製石鏃と言われるように表面をみがいて作られた鏃が使われるようになる。



甕形土器

甕形土器模式図



長頸壺



長頸壺模式図

- ①～④ 小瀬戸遺跡
⑤ 石峰遺跡

甕形土器……甕形土器は主に煮炊き用に使用されたものである。①～④は小瀬戸遺跡出土のもので弥生時代中頃のものである。

長頸壺……長頸壺は主に液体状のものを入れるものに使用されたと思われるもので、⑤は石峰遺跡から出土した、免田式土器と言われるもので、弥生時代後期とされている。

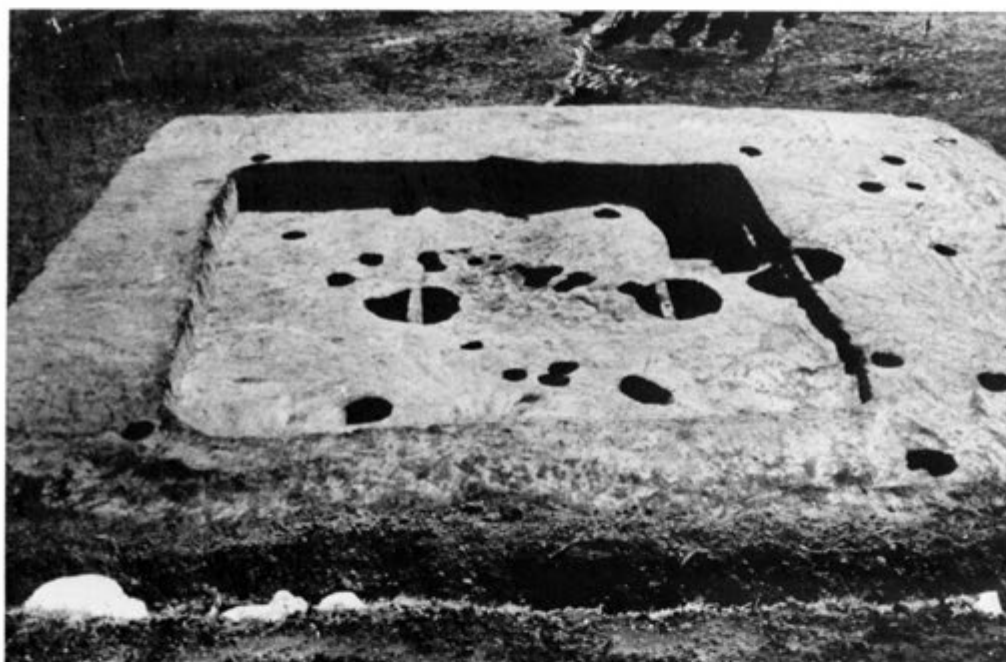
古 墳 時 代

弥生時代に各地に現われた豪族は、しだいにいくつかのより強い豪族に支配されるようになる。豪族たちは、その力を示すために、土を盛った大きな墳墓をつくった。この時期を「古墳時代」といいます。

鹿児島県の古墳は高塚古墳のほか、南九州独特といわれる地下式板石積石室、及び地下式横穴が分布する。

古墳の内部には、竪穴式石室や箱式石棺等があって、ここに死者を埋葬した。副葬品はよその県にくらべて少なく、鉄剣・鉄鎌・刀子が中心で、ほかに鏡・玉類・甲冑・土師器・須恵器なども見られる。

九州縦貫自動車道建設に関する調査においては、古墳そのものはなかったが、古墳が造られた頃に使われていた土器等が出土した遺跡は多く、26ヶ所もあった。また、住居址が確かめられた所もあった。



東原遺跡竪穴式住居址

竪穴式住居……地表から深さ約60～100cmの円形、または方形に掘り下げて床面とし、その上を被うように屋根を葺きおろすものである。住居の内・外に柱穴の痕跡が認められる場合が多い。



① 甕形土器



②



④



③

小形土器

- ①～④ 東原遺跡住居址内出土
- ⑤ 桑ノ丸遺跡
- ⑥ 入道遺跡



⑤ 壺形土器



⑥ 甕

甕形土器……主に煮沸用に使われるもので、ススが付いているものもある。

小形土器……小形のもので、鉢形・埴形・コップ形等のものがある。

壺形土器……貯蔵用に使われたものとされている。

甕……液体状のものを入れたものとされている。中央の穴に竹のような管状のものをさし込み注ぎ口としたものである。祭祀用と考えられている。

歴 史 時 代

元明天皇が奈良に都を定めた和銅3年（710）からを奈良時代、桓武天皇が京都に都を移した延暦13年（794）から約400年間を平安時代という。

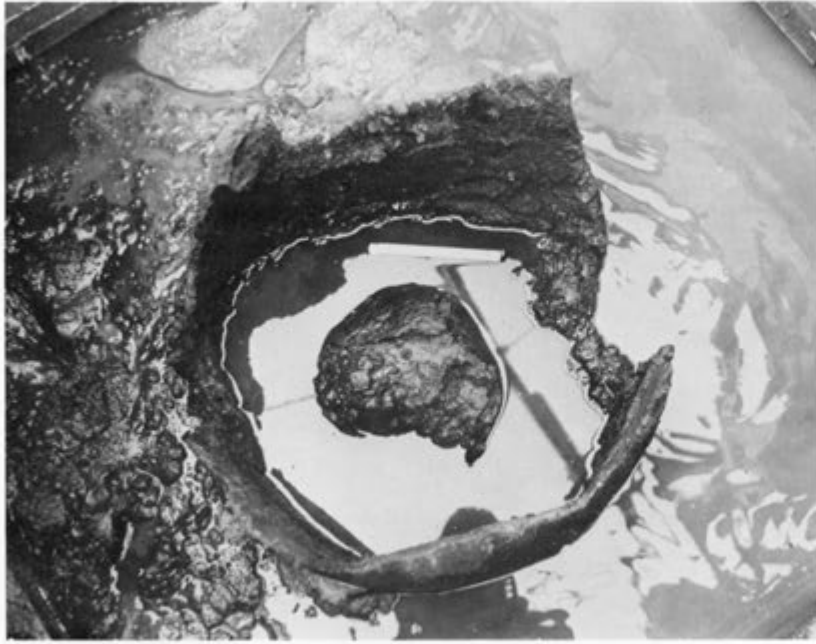
鎌倉時代は源頼朝が鎌倉に幕府を開いた建久3年（1192）から元弘3年（1333）その後は足利尊氏が武家政権を再興した室町時代となる。室町時代の次は徳川家康が江戸に幕府を開いた江戸時代という。

九州縦貫自動車道建設に関する調査においては、奈良時代末から平安時代にかけての遺構・遺物が小瀬戸遺跡で検出された。

また、中尾田遺跡や山崎遺跡、加栗山遺跡では、シラス台地の急峻な地形を利用した中世の山城が検出され、不明な点の多い中世山城の解明に役立った。



縦横に走るものが排水溝と考えられる溝状遺構。円形の穴は掘立柱の建物跡である。



井戸 I



井戸枠 I



井戸枠 II



木製容器

(いずれも小瀬戸遺跡)

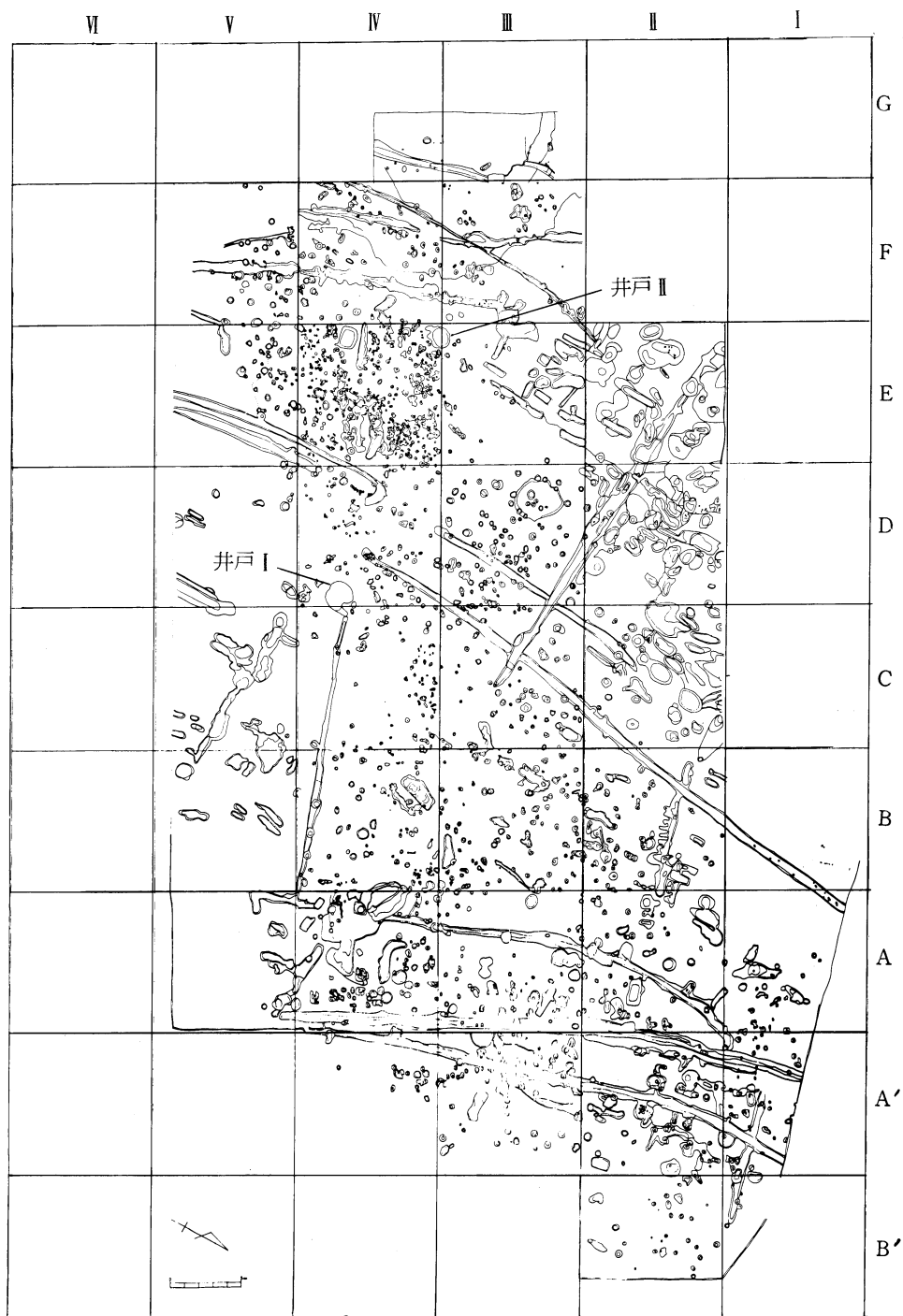


中世山城(柵列・堀)

加栗山遺跡



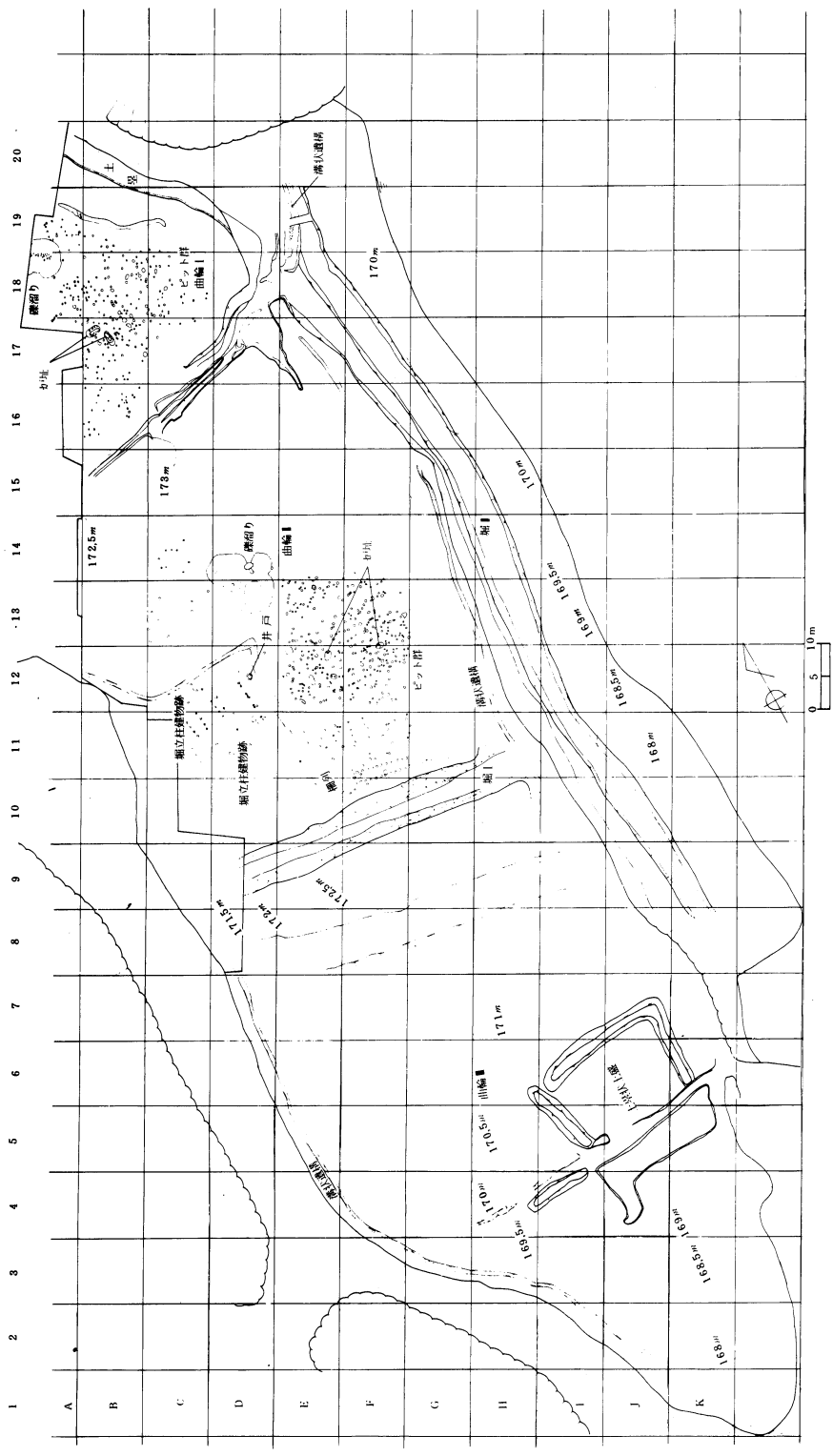
山崎B遺跡(堀)



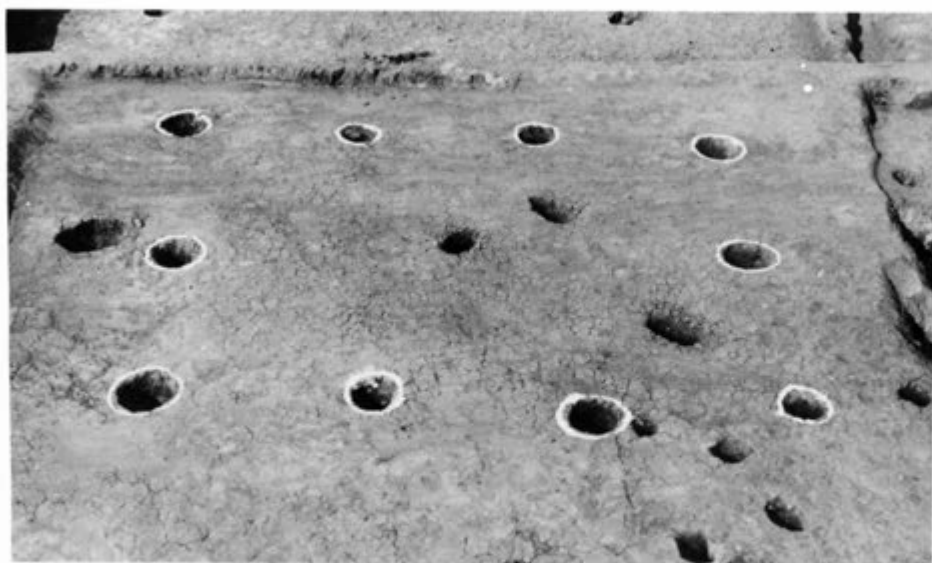
小 瀬 戸 遺 跡



中尾田遺跡



加栗山遺跡



建物跡（2間×3間の掘立柱）



炉跡（加栗山遺跡）



構列（中尾田遺跡）

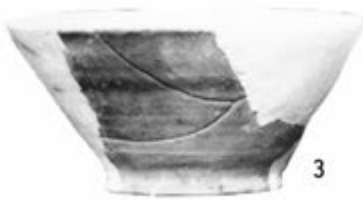
建物跡……柱の土台となる礎石を置くこともなく、地面に穴を掘り、柱を直接埋め込む「掘立柱」の建物である。瓦が出土していないことから、カヤやワラぶきの屋根が考えられる。



甕



壺



碗



碗



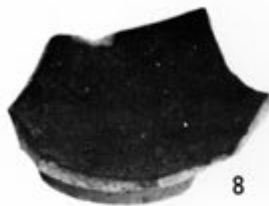
坏



坏



皿



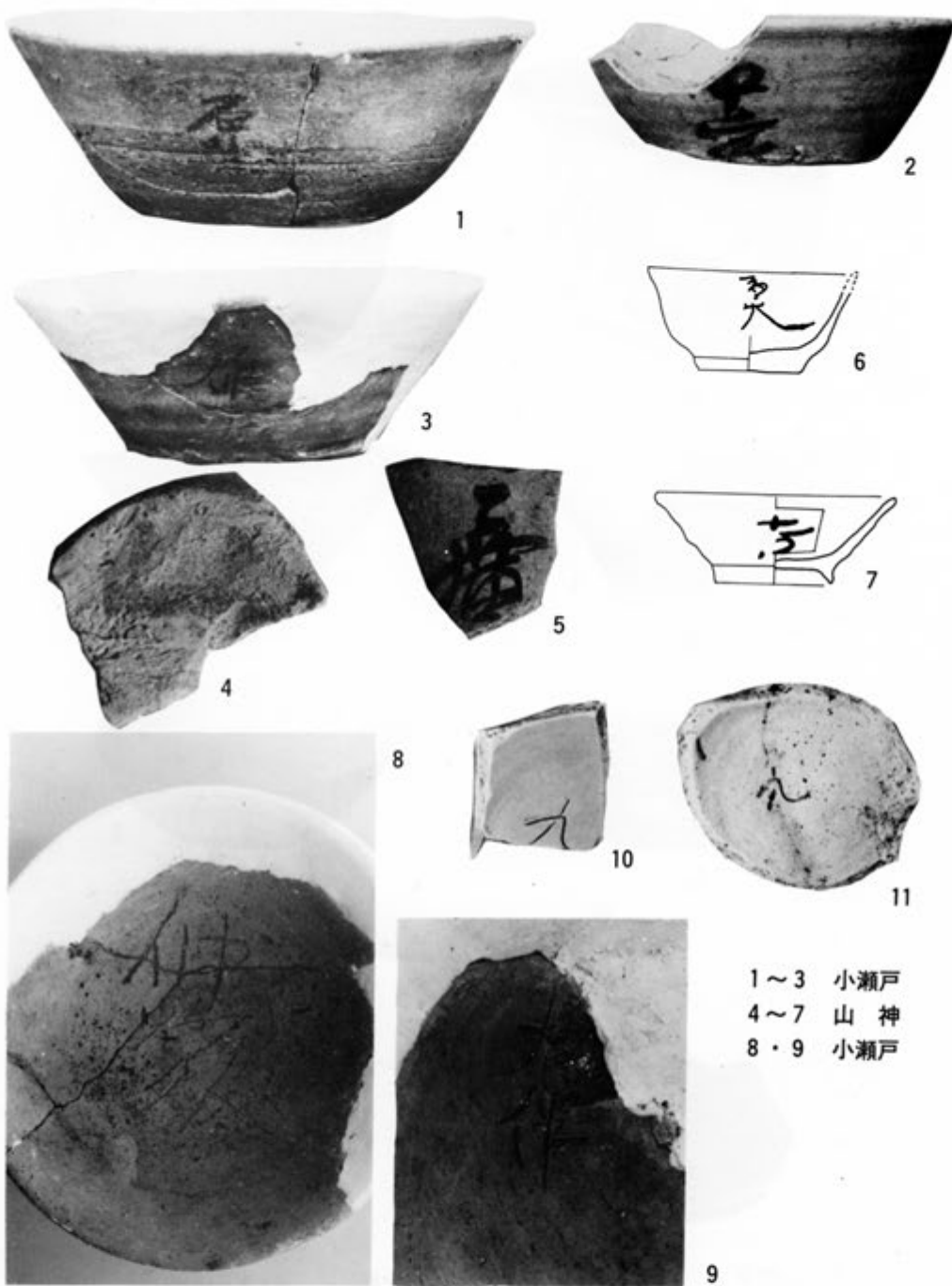
8



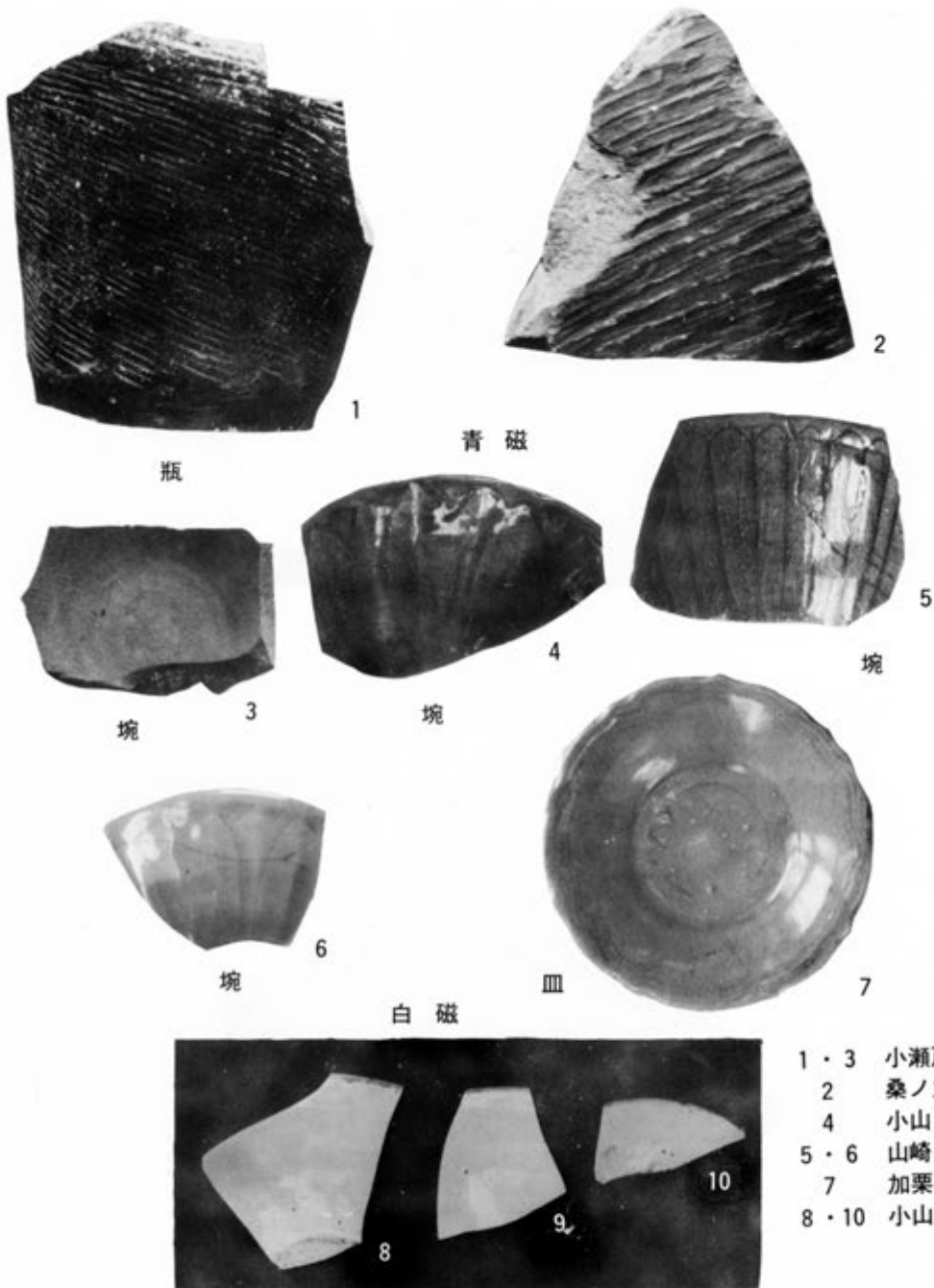
9

1 山崎B 2・6 石峰 3・5・6 小瀬戸 8・9 山崎

土師器……茶褐色の素焼きの土器で、甕・坏・壺・皿などがあり、文様は見られない。古墳時代から、奈良・平安時代、室町時代まで作られた土器。



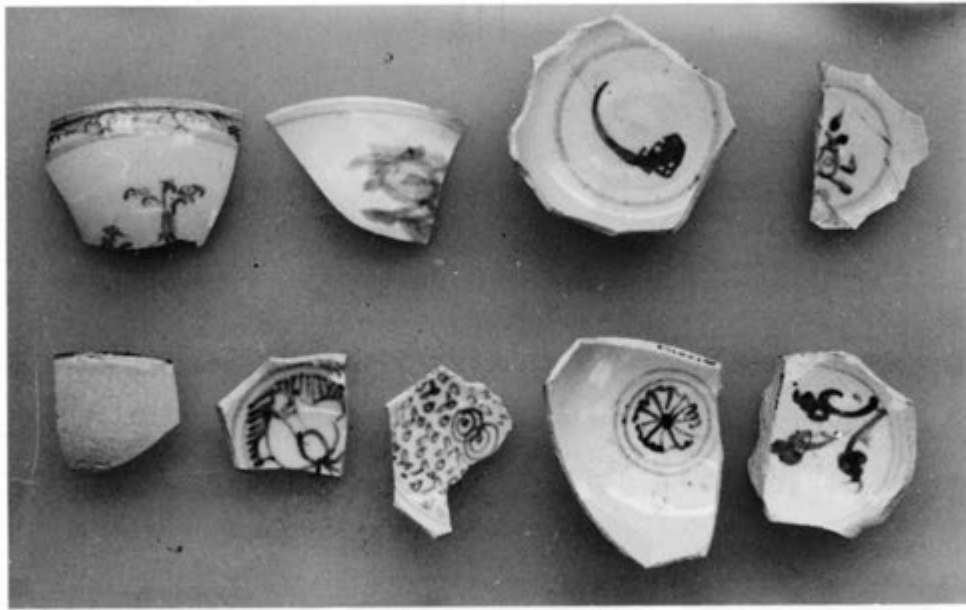
墨書・刻書土器……土師器などに墨やヘラで、所有者名・土器を使用する場所名などを書いた土器。



- 1・3 小瀬戸
- 2 桑ノ丸
- 4 小山
- 5・6 山崎B
- 7 加栗山
- 8・10 小山

須恵器……古墳時代以降，灰色ないし灰黒色に焼かれた硬質の土器。器面には叩き目のあとがある。壺・甕・坏・埴などがある。約1000℃の還元焰で焼かれた。

青磁……青色を呈する磁器。器面には蓮弁文や花文などを描く。中国産が主である。



染 付

1



2



3

瓦 器 質 土 器



4

羽 釜

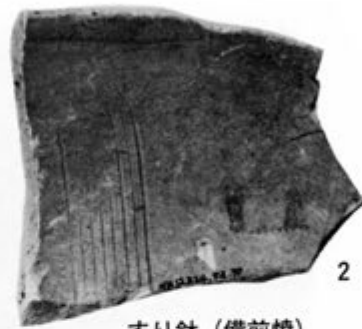
染付……白色の素地に呉須で下絵付をして、上釉をかけて焼いた磁器。1600年代日本で焼かれる以前は、おもに中国から輸入された。

瓦器質土器……灰黒色にいぶし焼きされた軟質の土器。



甕 (常滑焼)

1



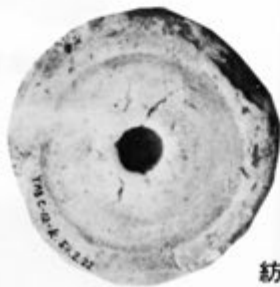
すり鉢 (備前焼)

2



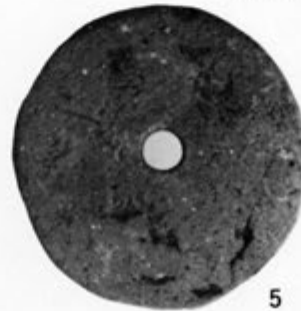
石鍋 (滑石製)

3



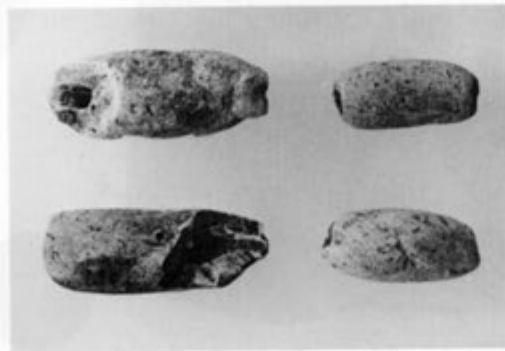
紡錘車

4



5

石
錘

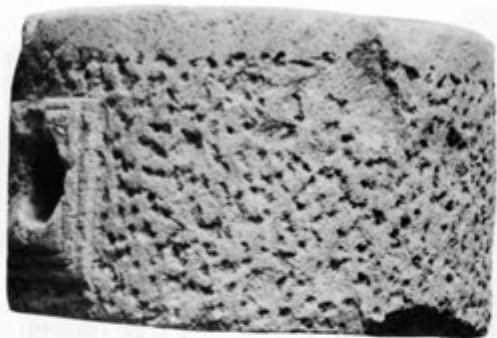


6

1~3 中尾田
4 山崎B
5・6 小瀬戸

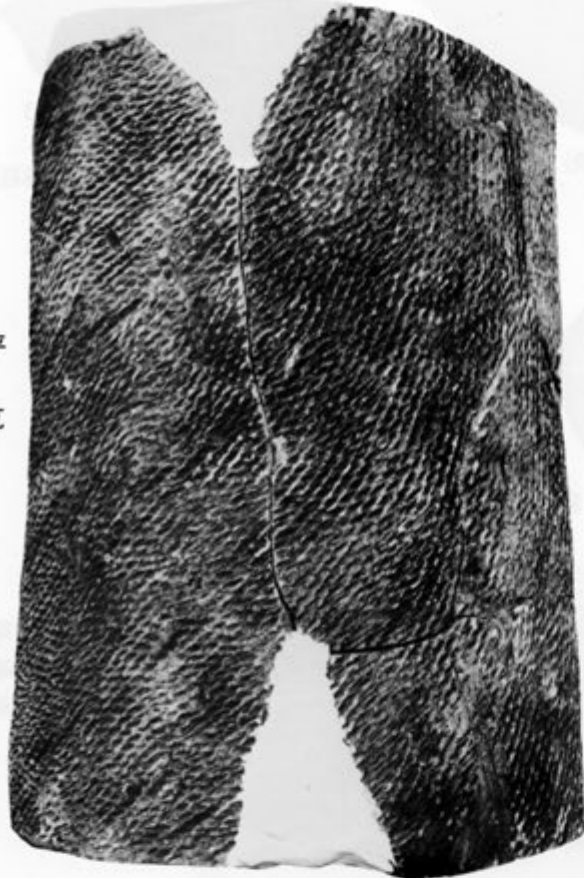
紡錘車……糸をつむぐとき、回転によって糸によりをかけるため、糸巻棒にさしてその回転を助ける円盤形の小器具。土師器の底を再利用したものもある。

土錘……網のおもりに用いたもので、棒状の土製品の中央に穴をあけてある。



石 白

1



平
瓦

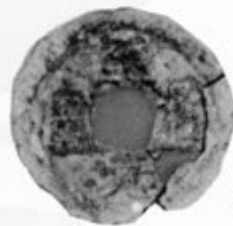
2

古 銭



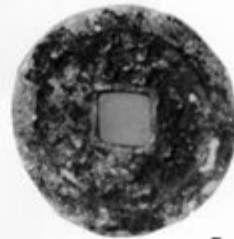
3

「崇寧通宝」



4

「至元通宝」



5

「元豊通宝」



6

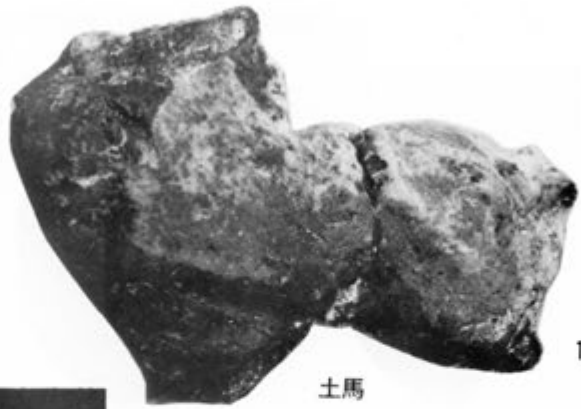


7

- 1 加栗山 2 小瀬戸 3 小山 4・5・7 中尾田

石白……凝灰岩質のもので、茶臼に使用されたものであろう。

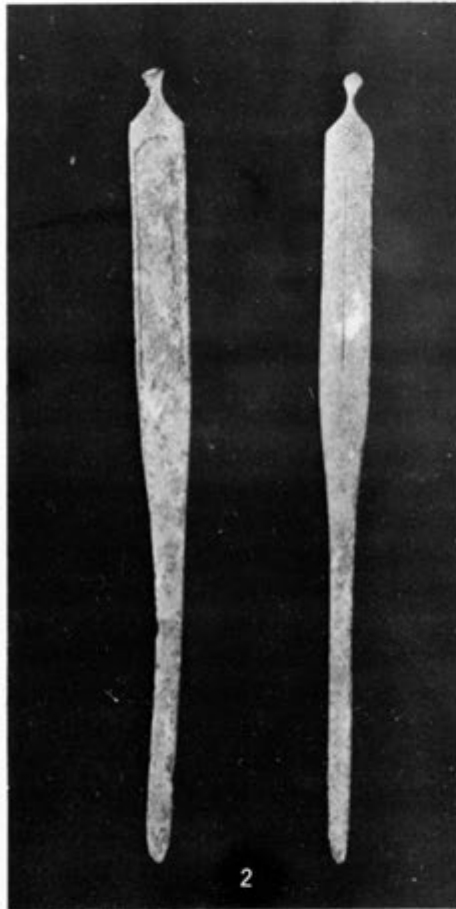
瓦……屋根にふくもので、平瓦・丸瓦・軒丸瓦などがあり、面には燃糸などの叩きがみられる。



こうがい

土馬

1



2



金銅製品

3



台座

4

- 1 小瀬戸
- 2 加栗山
- 3 中尾田
- 4 小山

土馬……粘土で焼き固めたもので、水霊信仰に使用されたとされている。

笄……髪をまげるとき止めるかんざしで、装飾具として用いられた。

台座……無縫塔の台座である。僧の墓によく使用されていることから、出土地は寺院も推定できる。

植物遺体 一 小瀬戸遺跡井戸 I 内出土一



モモ



ウメ



ヒヨウタン



ヤブニッケイ



イチイガン

植物遺体……小瀬戸遺跡の井戸 I 内より出土したもので、ウメ・モモ・ヒヨウタンは当時の食生活、ヤブニッケイ、イチイガンは周辺の植性の一端をうかがい知ることができる。

集石遺構の科学処理による取り上げと保存

加栗山遺跡は、中世山城・縄文文化・細石器文化と複合遺跡であった。これらの貴重な資料に対して、我々は遺構等について科学的保存という面からも取り組んでみた。

東京都小金井市前原遺跡において、礫焼ピットの科学保存を行なった東京国立文化財研究所第3修復技術研究室の樋口清治室長と青木繁夫氏の指導を受けて、1号集石と2号集石の2基について科学的保存を行なった。

1 集石の科学的保存



取り上げる遺構の範囲を決め、EXPをPS-NY-シンナーで適量にうすめ、土に注入して固める。動く石や石のすき間には土をつめて固定しておく。

薬剤：EXP（イソシアネートポリマー）
PS-NY-シンナー



取り上げる範囲のまわりを掘り込む。レベルや方位を測定しておく。



遺構表面から適当な長さの「」型の針金を数ヶ所に差し込む。全体重量を軽くするため、裏側の土を除去するための目安となる。



遺構の天地を逆にする際、遺構の礫が移動しないように、表面に拓本を取る要領で画仙紙を水張りして固定する。ラップ等でさらに覆うと効果がある。



5 天地を逆にするため、遺構の周辺にわく組や、すじかいを入れて頑丈に固定する。



6 表面に発泡ウレタン樹脂を流し込み、さらに頑丈に固定する。発泡ウレタンの節約のため、ビニール袋等で風船をつくり、つめる。発泡が始まったら板等で圧力をかけ平らにする。
薬剤：ハイプロックス（主剤・硬化剤）主剤対硬化剤＝1対1



7 発泡ウレタン樹脂が固まったら、天地を逆にするためフタをし、遺構を台地と切り離しながら裏打ちをする。ショック防止のため、ウレタンフォームをフタとの間に入れたり、すじかいをしっかりとる。



8 遺構の天地を逆にした後、裏側の土を除去する。3で差し込んでいた針金が見えたら、さらに最大限にうすくして全体重量を軽くする。



9 裏土の表面にエポキシ樹脂エマルジョンを塗って固める。
薬剤：エマルジョン（主剤・プリゾールL-601、硬化剤・プリゾールL-602）主剤対硬化剤＝3対1、適宜水でうすめる。



10 裏土の表面にポリマールをしみ込ませたグラスファイバーマットをはり、さらに固め、安定させる。
薬剤：ポリマール（ポリエステル樹脂）触媒にパーメック（ベンゾールパーオキサイド）を使う。主剤対触媒＝100対1



裏に支えの骨組をつくり、裏土と一体化させるため、ポリマールをしみ込ませたグラスファイバーマットをはりつける。



遺構の天地を元にもどし、上ぶた、発泡ウレタン、画仙紙、針金等を除去していく。



遺構面を清掃し、EXP（イソシアネートブリポリマー）をさらにしみ込ませて固める。
薬剤：EXP、PS-NY-シンナー



動く石はエポキシ系の接着剤で固定し、ひびがはいて土が動く場合は、エポキシ樹脂エマルジョンの原液を流し込んだり、土と練ったものをつめておく。
薬剤：エポキシ系接着剤、エポキシ樹脂エマルジョン



1号集石

清掃を行ない、展示用の化粧板などをあてる。カビ対策用にホルマリンを4~5倍位薄めたものを塗布しておく。



2号集石



発掘風景



実測（平板測量で遺物の所在を測量している）



実測（出土遺物を1/10, 1/20の縮尺で）
方眼紙に実測している。





遺跡説明会



あ と が き

九州縦貫自動車道（鹿児島線）関係の埋蔵文化財発掘調査は昭和46年8月、始良郡始良町所在の小瀬戸遺跡に始まり、昭和53年2月、始良郡栗野町木場A遺跡の調査完了、昭和56年3月までの報告書作成・整理作業ですべてが終了した。遺跡数38箇所、発掘面積206,300㎡、10余年が費やされた。

本書はできるだけ平易に、しかも各遺跡のわくをはずし、遺物を各時代に再編することで、とかく固くなりがちな本報告書にかわって、埋蔵文化財の理解に役立てばと編集したものです。いろいろな機会にご利用くださればありがたいです。

この間、日本道路公団をはじめ、関係各市町村のご協力、遺跡・遺物・保存科学等についてご指導下さった諸先生方、盛夏・厳寒にもいとわず発掘作業に従事して下さいました作業員の方々、出土品の整理に神経をすりへらしてがんばって下さった収蔵庫の皆さんにお礼を申し上げます。

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告 (22)

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 XIII

総 集 編

発行日 昭和57年3月

発 行 鹿児島県教育委員会 〒 8 9 2 鹿児島市山下町14番50号

印 刷 かわち印刷有限会社 〒 8 9 2 鹿児島市下竜尾町26-1